なごみ文庫
凄く真面目な外伝
SugokuMajimenaGaiden
ニトロプラス劇場
Story
野山風一郎
Illstration
Sayori
原作
Nitroplus

野山風一郎（のやま・ふういちろう）
魔法少女っていいですよね。その響きだけでゴハン三杯くらいいけます。
それはそうと執筆速度が三倍になる魔法が欲しいです。
http://gyarugefuhai.hp.infoseek.co.jp/index.html

◎原作
Nitroplus
「スマガ」より

◎イラスト
S a y o r i

千のリベンジを経て、とうとうこの本の挿絵担当というエンディングを迎える事ができました。
はじめまして、sayoriです。
ニトロプラスが好きです。ニトロプラスのためなら死ねる。
http://sayori.sabori.com/

「スマガ」応援団長

"白石稔" 大・興・奮!!

「これは、世紀の『パイオツニア』
宮本武の、情熱とか夢とか
愛情とか、なんかこういろんな
思いが込められた、

魂の叫びである！

…だったらいいな（笑）」

ニトロプラス劇場

ＳＭＧ—凄く真面目な外伝—

野山風一郎
原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版

凄く真面目な外伝

SugokuMajimenaGaiden

ニトロプラス劇場

Story

野山風一郎

Illstration

Sayori

原画

津路参汰

原作

Nitroplus

ここは天国

みなさんは天国に

『神様TV』

というものがあるのを

ご存知でしょうか

そこでは毎回

下界の様々な

番組を見ることができます

ほら

今まさにどこかの神様が

TVの電源を

いれるようですよ？

楪在一郎
楪在二郎
佐草陽水
スピカ
ガーネット
神様
ミラ
宮本武
日下部雨火
アリデッド
うんこマン
（仮）
樋ヶ結花
沖姫々

Story
野山風一郎
Illstration
Sayori

原画
津路参汰
原作
Nitroplus

ALL CHARACTERS

Ilustration : Santa Tuji

ガーネット

伊都夏市を護る魔女の一人。三人のまとめ役。気が優しくすぐ他人に気を使う。家が貧しい事を気にしている。爆乳。

ミラ

伊都夏市を護る魔女の一人。もみあげの匂いで感情を読むという特技を持つ。宮本とは草野球のチームメイト。微乳。

スピカ

伊都夏市を護る魔女の一人。自分で「天才」と名乗るほどの実力。お嬢様育ちの為、少々一般常識に欠けることも。巨乳。

くさかべ あまほ
日下部 雨火

伊都夏大学園新聞部部長。世界の秘密を知る為取材を行う。一度妄想を始めると桃色の世にトリップしてしまう。美乳。

うんこマン（仮）
（オザキキヨヒコ）

ある日記憶喪失のまま伊都夏市に落ちてきた主人公。神様との交渉で「人生リベンジ」のチャンスを得た。今の名はオザキ。

おき きき
沖 姫々

伊都夏大学園生徒会長にして自衛軍指揮官。絶大なカリスマを持つも、プライドも高く苦境に陥ることもしばしば。無乳。

ひのけ　ゆか
樋ケ 結花

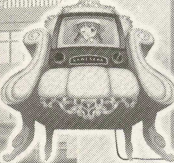
新聞部員にして宮本の幼馴染。宮本に密かな恋心を抱くつもりが周囲にはバレバレ。意外に家庭的な一面も。ツンデレ。

みやもと　たけし
宮本 武

無類のオッパイ好きで、「パイオツニア」を自称。全ての女性のカップを目利きする。生徒会に所属。野球好き。

アリデッド

魔女をまとめるカルデアの指令。また同時に学園の教師で、記憶喪失のオザキの引受人でもある。生活能力が皆無に等しい。



かみさま
神様

天国（？）で主人公が出会った自称神様。テレビの奥から話かけてくる。外見、中身共に幼稚園児で下ネタ大好き。たまに犬やこけし、アリクイ、アンナさんなどほかの神様（？）も出てくる。うんこマンに人生リベンジの機会を与えた。

きんざい　じろう
襟在 二郎

ミラの祖父にして自称正義のマッドサイエンティスト。日夜謎の発明に精を出している。一郎の双子の弟。

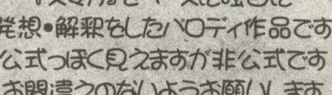
さくさ　あきみ
佐草 陽水

生徒会顧問。主人公の前に立ちはだかっては気に障る事を言い去って行く。ギターは背負っているだけで特に弾けない。

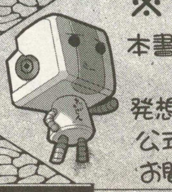
きんざい　いちろう
襟在 一郎

スピカの家の執事。スピカに近づくあらゆる害虫（含男）を排除する。トラップの達人。二郎の双子の兄。

夕方	N	スピカ on Fire	005
		他人事ではありませんよ	019
7	二 S	男たちの夢と	023
		ブラジャーを、君に	042
	字	日下部・ザ・ギャンブラー	045
8		ネコミミメイドカフェには夢がある	060
	字 デ	ブルーマウンテンって一瞬ブルマの山かと思ってドキドキしちゃうよね	065
9	N	夢は大きく膨らんで	077
		乳、帰る	087
	字	混ぜるな危険	102
		乳ヒーロー誕生◇天	177
10		ネコまっしぐら	125
	S 映	スマガハザード～ラストエスケープ～	138
		ガーネットの三分間クッキング再	161
	デ	カレーなるCM	172
11	S N	空を見上げて	177
		愛のストーカー～弁当の材料～	187
		ギターを背負った渡り鳥	203
	映	ファイナル・アクション・ヒーロー◇天	208
深夜		僕の考えた神様ルート　18歳未満は回れ右して帰れ!	223



※ CAUTION ※



本書はNitroplus制作のADV
『スマガ』をベースに独自に
発想・解釈をしたパロディ作品です
公式っぽく見えますが非公式です
お間違えのないようお願いします

「スピカ on Fire」

一日の授業が終わった伊都夏大学園の放課後、スピカは学園の中庭で、竹箒を手に落ち葉を集めていた。
「まったく……どうしてアタシがこんなことしなきゃならないのよ」
愚痴をこぼしながら、スピカは乱雑に箒を動かす。
模範的な生徒とは決して言えないスピカが、放課後に掃除を一人でしているのには理由がある。
それは度重なるスピカの遅刻が原因だった。
朝方、寝坊して遅刻したスピカを校門で生徒会長の沖姫々が待ち構えていたのだ。
「スピカよ、貴様の遅刻は奉仕活動の責務規定回数に達した。よって懲罰を申し渡す！」
それで課せられた罰則というのが、中庭の掃除だったのだ。
無視して帰ってやろうかとも思ったが、アリデッドから「アタシの教師としての顔を潰さんでくれや」と言われ、ガーネットからもサボらないように前もって釘を刺されてしまったため、逃げることもできなくなってしまった。
「しっかし、面倒くさいわね」

辺りは落ち葉の量が多く、掃き集めるのも容易ではない。
「魔法(リネア)でまとめて吹っ飛ばしてやろうかしら」
スピカは箒の先を落ち葉が多く落ちている場所に向ける。本来の箒にある、魔法の力を投影する装置であるミュトスなど当然付いていないので撃てるわけもないのだが。
スピカはため息をつくと、掃除を再開した。
しばらくして、スピカはトイレに行くため一度その場を離れる。
数分経って戻って来ると、中庭の落ち葉はすべて一か所に集められていた。
「これは……まさか」
スピカの脳裏に執事の襟在一郎(きんざいいちろう)の顔がよぎる。こんなお節介をするのは世話焼きの爺や以外に考えられない。
キョロキョロと周囲を見回したが、一郎の気配はもうどこにもなかった。
「余計なことするんだから……」
いらぬ世話だと思ったが、何はともあれ掃除は終わった。あとは落ち葉を捨てに行くだけである。
こんもりと山になっている落ち葉を見て、スピカはふと考えた。
「焚き火にしても……別にいいよね？」
スピカはポケットを探ると、おもむろにライターを取り出した。煙草を吸ったりする

わけではないが、火が好きな彼女は、常にポケットにそれをしのばせていた。
スピカはライターの火を落ち葉に移した。乾いた枯れ葉はあっという間に燃え、炎はすぐに大きくなった。

〈焚き火などを行う際には、最寄りの消防署にあらかじめご連絡ください〉

「やっぱり火はいいわねー……」
スピカはうっとりと焚き火を見つめる。
「スーちゃん！」
そこへ遠くから猛然とミラが走りこんできた。
「あれ、ミラ。どうかしたの？」
「煙が見えたから、消防士さんしに来た！」
「残念ながら、ただの焚き火よ」
「おー！　あったまるー！」
ミラは焚き火に手をかざす。
スピカはそれを見つめながら、小さく唸（うな）った。
「ちょっと物足りないわね……」

「んあ？」
「もうちょっと激しく燃えないかしら……」
焚き火を眺めているうちに、スピカはもっと大きな炎を見たい欲求にかられていた。
「じゃあさ、ミラが何か持ってこようか？」
ミラがそう申し出る。
「何かあるの？」
「じいちゃの倉庫にたっくさんあるよ」
ミラの祖父である襟在二郎（じろう）は、一応科学者という肩書を持っており、日夜よく分からない発明に勤（いそ）しんでいる。彼なら確かに可燃物も持っているだろう。
「そうね。せっかくだし、パーっと燃やしちゃいましょ」
「あいあいさー！　じゃあ、ばびゅーんと行ってくる！」
ミラは彗（ほうき）に跨（また）がると、黄色い光を残して飛び去る。
それから十分と経たずに、ミラは戻ってきた。背中にはパンパンに膨らんだリュックを背負っている。
「ただいまー、スーちゃん」
「何を持って来たの？」
スピカが訊（き）くと、ミラはリュックの中をごそごそと漁（あさ）る。

「じゃじゃーん！　ハイオクガソリン！」
いきなり色んな意味で危険な可燃物を取り出した。
「へえ、勢いをつけるぐらいにはなりそうね」
だが、スピカはガソリンぐらいでは動じなかった。むしろそれぐらい普通と言わんばかりの態度だ。
「よーし！　じゃあ早速燃料投下だー！」
ミラはオイル缶のキャップを外すと、焚き火の上からドボドボとガソリンを注いだ。
〈ガソリンの取り扱いには国家資格が必要となります。みなさんは決して真似をしないでください〉
ガソリンをかけられた焚き火は、その炎の高さを一気に増した。
「おおー！　ファイヤー！」
「なかなかいいじゃない。もっとないの？」
しかし、スピカはまだ満足しない。
「はーい。次いくよー」
続いてミラはリュックの中からホースのついたボンベを取り出す。

「それは？」
「んー、わかんない」
スピカはボンベの表面に記された文字に目を走らせる。「Oxygen」と書いてあるのが見て取れた。
「酸素みたいね」
「さんそ？」
ミラは大きく息を吸い込むと、その場で深呼吸をはじめる。
「そうそう。空気に含まれてるそれ。燃焼には欠かせないわね」
スピカは瞳をキラキラさせてボンベを見つめた。
「よっしゃー！　完全燃焼だー！」
ミラはボンベのバルブを開けると、ホースの先を焚き火に向けた。噴き出た酸素ガスが火の勢いをさらに強める。

〈くれぐれも真似しないでください〉

「うおー！　かっこいいー！」
大きくなった炎に、ミラも子供のようにはしゃぐ。

「いいわねー……」
スピカの炎に照らされた顔は、やや陶酔(とうすい)気味になっていた。傍(はた)から見ると危険な人にしか見えない。
その後も、スピカとミラはスチールウールを燃やしたり、灯油を注いだりして火の勢いを盛り上げていく。
そこへアリデッドが通りかかった。
「あん？　何やってんだ、オメーら」
「あ、アリせんせーだ」
「ただの焚き火よ」
アリデッドは今や人の身長以上もある炎を見ながら、片眉を歪めた。
「これ、もう焚き火ってレベルじゃねーぞ」
そう言いながら、アリデッドは煙草を取り出すと、焚き火に近づけてる。
紫煙を吐き出しながら、アリデッドは苦笑をスピカに向ける。
「まったく、真面目に罰掃除をやってるかと思えば」
「掃除は終わったわよ。燃やしてるのは集めた落ち葉。どうせ焼却炉で燃やすんだから同じことでしょ」
スピカの言い分に、アリデッドは唇を笑みの形に曲げた。

「ま、それもそうだな」
教師ならば本来叱らねばならぬところ。だがそれよりも個人的な欲求が勝ったアリデッドはポケットからスルメを取り出すと、目の前の炎で炙(あぶ)り始めた。
「あー、ビール欲しいな、ビール。どっか自販機ねえのかよ」
もはや教師としての体面すら気にしていない様子。
スルメの香ばしい匂いが漂い始めた頃、スピカの様子を見に来たガーネットが、いまや火柱と化した焚き火を見て目を丸くした。
「ス、スピカちゃん⁉ これは一体……⁉」
「あ、ガーネット。今焚き火してるの」
スピカは事もなげにそう言い放った。
「た、焚き火……？」
ガーネットには、焚き火と呼ぶには炎が強すぎるように見える。
「ん……？ 何かいい匂い」
更に可燃物を追加していたミラが、ふと手を止めると鼻をヒクヒクと動かす。
「スルメならもうちょっとでいい具合に焼けるから待ってろ」
アリデッドが言うと、ミラは首を横に振った。
「違う。それじゃない匂いがする」

「もしかして、これかしら」
　ガーネットは持っていた紙袋の中身をミラに見せる。
「あー！　お芋だー！」
　紙袋の中には、まだ土のついたサツマイモが入っていた。
「園芸部の人に分けてもらったの」
　ガーネットは嬉しそうに答える。
「お、いいねぇ。それもついでに焼こうぜ」
　アリデッドが舌なめずりをする。
「え？　ここで焼いてもいいんですか？」
　生真面目なガーネットには、学校の敷地内で焼き芋をすることに抵抗があった。
「いいんだよ。アタシが許す」
　だが、一応は教師であるアリデッドから許可が出たため、ガーネットに断る理由はなくなる。
「じゃあ、用意してきますね」
　ガーネットは家庭科室に行ってサツマイモを洗い、アルミホイルに包んで戻ってきた。
後ほど取り出しやすいよう串を通してから、炎の中に置く。
「これでしばらくすれば出来上がりです」

「やったー！　焼き芋だー！」
　ミラはピョンピョンと飛び跳ねて喜びを表した。
　燃え盛る炎を堪能していたスピカは、ふと視線を動かした時、ミラのリュックの中にまだ何かが残っていることに気付いた。
　手を入れて取り出すと、それは瓶に入った黒い粉末。
「何かしら？」
　スピカが瓶の蓋を開けて、中身を確かめようとした、丁度その時であった。
「貴様ら！　何をしている！」
　怒声と共に、薙刀を携えた沖が走ってきた。
「うるさいのが来ちゃったわね」
　スピカは煩わしそうに沖に顔を向けた。
「ついに正体を現したな、魔女め！　神聖なる学び舎に放火とはいい度胸だ！」
「放火じゃないぞー！　焚き火だー！」
　ミラが反論すると、沖は鼻で笑った。
「これが焚き火だと？　下手な言い訳をしおる！」
　沖がそう言うのも無理はない。落ち葉を燃やして始めた焚き火は、様々な可燃物を投入することにより、すでに業火と呼んだ方が相応しいほどの勢いになっていたのだ。

「派手なほうがキレイでしょ」
悪びれずに言うスピカ。
「ものには限度がある！　しかも学園の敷地内で、無許可で！　これは到底見逃すわけにはいかん！」
沖は薙刀の石突きで地面を叩いた。
スピカは大袈裟に肩を竦めてため息をつく。
「やれやれ。炎の美しさが分からない人は器が小さくてイヤね。ま、小さいのは器だけじゃなさそうだけど」
そう言うスピカの視線は、沖の胸に注がれていた。
沖のバストは、「ミス・ノーバディー」とあだ名されるほど小さく、そしてそれは彼女のコンプレックスとなっていた。
そこを指摘する言葉に、沖のこめかみがひきつる。
「……よかろう。今日こそ成敗してくれる！」
そう宣言すると、沖は薙刀を構えてスピカに躍りかかった。
「おっと！」
スピカはバックステップして薙刀の一撃をかわす。そのはずみで、持っていた瓶が手から離れて炎の中に飛び込んだ。

次の瞬間、轟音(ごうおん)とともに炎が一瞬で膨れ上がった。
「きゃあ！」
「あっちぃー！」
その場にいた全員が熱風に煽(あお)られ、悲鳴を上げる。
スピカが持っていた瓶の中身は、黒色火薬だったのだ。炎に投げ込めば当然爆発する。
「な……何事だ⁉」
沖が熱でしみた目から流れた涙を拭(ぬぐ)って、状況を把握しようとする。
「なっ⁉」
飛び散った火が校舎に燃え移っているのを見て、沖は思わず間の抜けた声を出してしまった。
「うぎゃあー！　やべー！」
教師という社会的立場もあるアリデッドが、燃え始めた校舎を見て絶叫した。
「た、大変！　しょ、消火器、水！　あ、お芋が！」
ガーネットも突然のことに取り乱して無意味に走り回る。
「うわ、本当に消防士さんしなきゃ」
意外にも一番冷静だったミラが、消火道具を探しに行った。
「キレイ……」

そんな中、スピカだけは一人、うっとりと燃える校舎を見つめていた。

その後、スクープの匂いを嗅ぎつけてやって来た日下部(くさかべ)の消火器と、ミラが運んできた消火ホースのおかげで、校舎は壁が焦げた程度の被害で済んだ。

もちろん、スピカ達とアリデッドは沖にこってりとしぼられた挙げ句、今度は校内全ての清掃を申し付けられてしまったのだった。

「他人事ではありませんよ」

ピンポーン。
ガチャ。
「はい」
「どうもこんにちは、オザキさん」
「日下部(くさかべ)？　また取材か？」
嫌そうな顔をしながら出迎えるオザキ。
「いえ、今日の私は新聞部部長ではなく、消防署の方から来たセールスレディです」
「は？」
「どうです、オザキさん。万が一のためにこの消火器を買いませんか？」
どこからともなく取り出した新品の消火器を見せる。
「え？　そんなこと言われてもなぁ……」
「オザキさん、防災意識は常日頃から持っておかねばなりません。それに、自転車にヘルメットが義務化されつつあるように、一家に一つ消火器が義務化されるかも知れませんよ？」

「いや……でもなぁ」

「お値段のことならご心配なく。消防署っぽいところから助成金が出ておりますので、大変お手頃になっています」

「うーん……」

「今買い逃すと値上がりするかもしれませんよ。さあ、せっかくのチャンスを有効に活かさなくては」

「う……そうかも……」

気持ちがぐらつき始めたオザキに、日下部はとどめとばかりに畳みかけようとした。

その時である。

「こらぁー!」

「沖(おき)!?」

「ちっ」

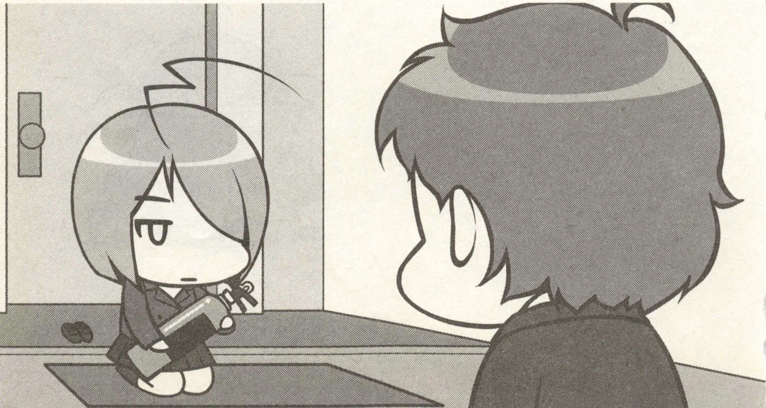
突如沖が現れ、舌打ちする日下部に薙刀(なぎなた)を突きつけた。

「最近この辺りで消火器行商の詐欺が頻発していると通報があったが、犯人はやはり貴様か!」

「ばれてしまっては仕方ありません。風のように逃げるとしましょう」

そう言って、日下部は忍者の如(ごと)く消え去った。

「おのれ、逃がすか！」
沖は日下部を追いかけて走り去る。
一人ポツンと残されたオザキは、一つ咳払いをしてからこちらを向く。
「このように詐欺師は言葉巧みに騙そうとします。怪しいと思ったら、最寄りの警察署にご相談を」
以上、詐欺撲滅キャンペーンＣＭでした。



「男たちの夢と」

眠気の残る朝、オザキキヨヒコは大きな欠伸(あくび)をしながら、学園へと向かっていた。
「あー……ったく」
腹の音を聞きながら悪態をつく。
起きぬけに家主であるアリデッドの寝ぼけ攻撃に襲われたため、何も口にできないまま逃げるように出てきてしまったのだ。若い男に朝食抜きはこたえた。
「ん……？」
ふと見ると、道の先に見覚えのある人物が立っていた。
「二郎じゃないか」
二郎はミラの祖父であり、正義のマッドサイエンティストを自称している風変わりな人物だった。悪魔退治(ソディアック)をはじめ、様々なところで手を貸してくれる心強い人物でもある。
二郎はこちらに気付くと、パッと表情を輝かせた。
「おお、オザキくん！　おはようですじゃ！」
「ああ、おはようさん。こんな所で何してるんだ？」
「いやなに、ちょっとした散歩ですじゃ。朝の散歩は気持ちの良いものですぞ」

そう言って快活に笑う。
「散歩ねえ」
二郎は研究室に引きこもって何やら怪しげな発明をしていそうなイメージがあるので、正直なところ、あまりピンとはこなかった。
「ところでオザキくん。喉が渇いておりませんかのう?」
「え?」
「飲み物を持って来たんじゃが、余ってしまってのう。勿体(もったい)ないから飲んでもらえると助かるのですじゃが」
そう言って、白衣の中から三角フラスコを取り出す。中にはやたらとエメラルドグリーンな液体が入っていた。
「何だ、それ?」
オザキはあからさまに警戒する。
二郎は一度フラスコを見た後、間を置いて答えた。
「メロンっぽい色をしたジュースですじゃ」
どう考えても怪しすぎた。
「どうして三角フラスコに入ってるんだよ」
「ワシは科学者ですからな」

答えになってないような気がしたが、二郎なら納得できるような気もする。
「ささ、どうぞお飲みくだされ、オザキくん。遠慮はいりませぬぞ」
二郎がフラスコを差し出す。
断った方が無難なような気がしたが、オザキは朝から何も口に入れておらず、空腹に加え喉もカラカラに渇いていた。加えて懐具合も極度に寂しいため、簡単に買い食いするというわけにもいかない。
「じゃあ……遠慮なく」
結局誘惑に負け、二郎の申し出を受けることにした。
受け取ったフラスコのコルク栓（せん）を外し、中身の匂いを嗅いでみる。予想外に甘い香りが鼻孔をくすぐり、オザキの警戒心を和らげた。
「……いただきます」
フラスコを傾け、エメラルドグリーンの液体を一気に流し込む。派手な色の割には味も悪くはなく、普通に飲むことができた。
おかげで喉の渇きが癒え、内臓も眠りから覚めたような気がしてくる。
「ごちそうさま。意外と美味かったぜ」
一息に飲み干すと、空になったフラスコを返した。
「なーに、どういたしましてですじゃ」

二郎はニコニコしながらフラスコを白衣の中にしまった。
「じゃあオレ、学校行くから。ありがとうな」
「うむ、道中気をつけるのですぞ」
二郎はオザキの背中に手を振りながら、口髭の奥でニヤリと笑った。

教室に入ると、黒板を掃除しているガーネットが目に入った。
「おはよう、ガーネット」
「おはようございます、オザキ……くん？」
挨拶を交わした後、ふとガーネットが動きを止めて、オザキの顔をまじまじと覗き込んだ。
「どうかしたのか？」
不思議に思ってオザキが尋ねると、ガーネットはいきなり顔を真っ赤にして首を横に振った。
「な、何でもないです！　な、何でも……。け、けど、この気持ちは……」
「ガーネット？」
様子がおかしいと思い、オザキはガーネットに近づく。
「ひうっ⁉」

　ガーネットはビクリと震えると、その場に尻餅をついてしまった。
「ガ、ガーネット⁉」
　驚いたオザキは何事かと思い、ガーネットの両肩を揺さぶる。
「わ、わかりました……オザキくんの好きなようになさってください……」
　ガーネットは蕩(とろ)けたような瞳でオザキを見上げた。
「……は？」
　全てを受け入れるように両手を広げたガーネットを前に、オザキは訳が分からずに困惑してしまう。
「お、おい、ガーネ――」
「キヨヒコー！」
「うおお⁉」
　さらに問いかけようとした途端、横からいきなりミラがタックルしてきて、オザキは床に押し倒された。
　オザキに馬乗りになったミラは、頬を紅潮させており、上から熱っぽい瞳でオザキを見つめている。
「キヨヒコ、大好き……」
　吐息混じりにそんなことを言われ、オザキのパニックは更に拍車がかかる。

「ミ、ミラ……？　何が一体……？」
混乱するオザキの頭を、ガーネットがつかんで自分の方を向かせた。
「オザキくん、こっちを見てくれないとイヤです」
ガーネットがむくれたように唇を尖らせていた。
「キヨヒコ、こっちも見ないとダメ」
今度はミラがオザキの顔をつかんで振り向かせる。
「オザキくん」
またもガーネットが顔の向きを変える。
「キヨヒコ」
今度はミラ。
「オザキくん」
「キヨヒコ」
「オザキくん」
「キヨヒコ」
「だー！　いい加減にしろ！」
頭を振り回され、オザキはたまらず叫んだ。
しかし、二人は委縮するどころか、逆にうっとりとオザキを見つめるばかり。

「大きくて男らしい声……」
「英雄の条件は、戦場でよく通る声だよねー」
　全くこたえていない二人に、オザキはますます混乱し、助けを求めるように周囲を見回す。だが、次の瞬間彼は我が目を疑うこととなった。
「ええ⁉」
　いつの間にやら、オザキは女子生徒に囲まれていた。その誰もが、潤んだ瞳でオザキを見つめている。
　ただ、その中の一人である樋ケだけは、頭を抱えて「ダメ、私にはタケちゃんが……」などと呟きながら苦悩に悶えていたが。
　女子生徒の包囲網は徐々に狭まっている。オザキは押し潰されるような錯覚に襲われ、背筋を凍らせた。
　と、そこへ何かが投げ込まれ、視界が白い煙で閉ざされた。
「な、何だ⁉」
　突然の出来事だったため、その場にいた者は全員煙を吸い込んでしまう。
「ぐ、げほっ」
　同じように煙にやられ、涙を浮かべながら咳き込んでいるオザキの手を、煙の中で誰かが引っ張った。

「う、うわ⁉」
オザキは引きずられるようにして、教室の外へと連れ出された。
「だ、誰だ……⁉」
煙がしみた目をこすりながら、自分の腕をつかんでいる人物の顔を見る。
「日下部(くさかべ)？」
そこにいたのは、新聞部部長である、日下部だった。
「危ないところでしたね、オザキさん」
ガーネットたちはまだ煙の中から出てこられないでいる。ひとまず窮地は脱したようだった。
「あ、ああ。助かったよ。何がどうなってるのか分からないけど」
オザキはあの状況から助け出してくれた日下部に礼を言う。
「とりあえず、落ち着ける場所まで行きましょう」
「そ、そうだな」
二人は、ひとまず屋上に退避することにした。
屋上に来るまでの間、日下部はオザキの腕をつかんだままだった。そして今も放していない。
「ここなら誰もいませんね」

「あ、ああ。そうなんだけど……なあ、もう手を引いてくれなくても大丈夫だぞ？」
「く、組んだ方がよかったですか？」
「いや、そういうことじゃなく……え？」
ここでオザキはようやく日下部の様子がおかしいことに気がついた。
頬を赤く染め、至近距離でじっとオザキを見上げている。
先ほどのガーネットたちのことが思い出され、背中に冷たい汗が流れ落ちる。
「あ、あの、日下部……さん？　手を放してくれると嬉しいかなー……なんて」
そう言うと、思いのほかあっさりと手を放した。
だがオザキが胸をなでおろしているのも束の間、日下部はいきなり自分の服を脱ぎ始めた。
「な、なにやってるんだー⁉」
オザキは慌てて大声を出す。
「お、屋上には誰もいませんが、そ、そのうち誰か来るかも……。そ、そうしたら……見られちゃう！　誰も来なくても、し、下から見えちゃうぅ！」
日下部の妄想は、いつにも増してとんでもないことになっていた。全年齢推奨のため中身の公表は控えさせて頂く。
「く、日下部！　落ち着け！　服を脱ぐな！」

　オザキが止めようとすると、日下部はそれを材料にさらに妄想を加速させた。
「き、着たままがいいですって⁉　や、破くのが好きだなんて……そんな特殊な趣味が……！　ああ！　そこまで破られたら、か、隠せない！　みんなに見られちゃうぅ！」
　日下部は己の妄想に翻弄されながら、激しく身をよじっている。
「ど、どうすりゃいいんだ⁉」
　この暴走状態の日下部をどうやって止めればいいのか、皆目見当がつかない。
　困り果てているオザキの後頭部に、何かが当たった。
「ん？」
　オザキが振り返ると、屋上の扉の前で、沖が手招きしていた。どうやら小石か何かを投げたらしい。
　妄想に悶えている日下部をひとまず置いて、沖の傍らへと駆け寄った。
　沖はオザキの腕をつかみ、校舎内に引っ張り込んで扉を閉める。
「お、おい沖」
「日下部のことは、今は放っておけ。じきに正気に戻るだろう」
　そう言いながら沖は扉に鍵をかけた。
　それでいいのだろうかとも思ったが、他に具体案も思い浮かばないので、沖に従うことにする。

「フ……それにしても大変だな、おぬしも。女子生徒たちが血眼で探していたぞ」
沖が微笑をオザキに向ける。
「いや、オレにも何がなんだか……」
オザキは疲れたようにため息をついた。沖はいつもと変わらぬように見えたので安心していた。
「ふむ……オザキ、顔を見せてみろ」
「顔？」
少し屈んで沖の目の高さに合わせる。
沖はオザキの顔を両手で包むように挟み、自分の方に引き寄せた。
額と額がくっつきそうな距離で、沖はオザキの瞳を覗き込む。そのまっすぐな視線に、オザキの方が照れてしまった。
「うむ」
沖は納得したような表情をすると、目を閉じてさらにオザキの顔を近づけようと力を込めた。
「お、沖⁉　な、何を⁉」
突然の思わぬ行動にオザキは首に力を入れて抵抗する。
「分からぬか？　接吻(せっぷん)だ。これからおぬしと接吻をする」

淀みなく見事に言い切られた。

「な、何故に⁉」

男のオザキの方が赤くなって動揺してしまっている。

「おぬしが沖のものだからだ。それ以外に理由などない」

平静に見えた沖も、どうやらおかしくなっていたらしい。

「い、いやいや！　落ち着け！　ちょっと頭冷やそうか⁉」

「この想い、到底冷えようがないぞ」

普段から鍛えている沖の腕力に、だんだんと抗いきれなくなってくる。

徐々に距離が縮まり、唇が触れそうになる寸前、オザキは物凄い力で襟首を引っ張られた。

「うげ⁉」

気付けば沖から引き離され、廊下を水平に飛んでいく。

この感覚は、何となく憶えている。

首を回すと、案の定そこにはスピカの横顔があった。

彗に乗った彼女が、オザキを沖からさらったのだ。

「間に合ってよかった。このまま二人で遠くまで行きましょう」

そう言いながらウインクをするスピカ。

——おかしい。こんなのオレの知ってるスピカじゃない。
スピカもおそらく他の女子生徒同様になっているであろうことを察知したオザキは、素早くシャツのボタンを外すと、両腕を一気に引き抜いた。スピカは襟首をつかんでいたため、オザキの体は廊下に転がり落ちる。
「あ⁉」
腕の重みが消えたことに気付いたスピカが慌ててブレーキをかける。
オザキはスピカが方向転換して追いかけてくる前に、廊下の角を曲がって階段を飛び下りながら一目散に逃げだした。

何とか校舎から脱出したオザキは、人目を避けるように校舎裏へと落ち延びた。
荒くなった呼吸を整えながら、オザキは額の汗を拭う。
「くそ、一体どうなってるんだ……⁉」
呟いたオザキは、背後に人の気配を感じて、弾けるように振り向いた。
「オザキくん。捜しましたぞ」
そこにいたのは朝も出会った二郎だった。
「二郎か……」
女性ではなかったことに安堵(あんど)の息を吐く。

「どうですかな。楽しんでおりますかのう」
オザキはその二郎のセリフでようやく原因に思い至った。
「……なあ、二郎。お前、さっきオレに何を飲ませたんだ？」
女性たちがおかしくなった理由――何かあるとすれば、二郎がくれたあの飲み物以外に考えられなかった。
「ほっほっほっ、気付かれましたか。あれこそワシが開発した惚れ薬ですじゃ！」
二郎は胸を張って言う。
「ほ……惚れ薬だって⁉」
「左様。あの薬を飲んだ者は強力なフェロモンを発生させ、誰でも虜にしてしまうのですじゃ。それを、オザキくんには実験体になってもらって、効果のほどを確認しに来たのじゃが、いつもより女の子に人気があったりしましたかな？」
「そういうことか……」
オザキは体全体の力が抜けて、壁にもたれかかった。これでようやく今の状況に合点がいく。
二郎の邪気のない笑顔を見ていると、怒る気力も失せてしまった。
「いくらなんでも強力すぎだって。狩られるかと思ったぜ……」
オザキは憔悴し切った表情で告げる。あれは恋や愛とかではなく略奪に属する何かだ。

理性まで失わせては何の意味もない。
「ふむ、少し効果を強くしすぎましたかのう」
「少しどころじゃないっての」
「まあ効果は一日で切れますので、誰にも見つからぬよう隠れておくのがよいですじゃろう」
「そうするわ……」
オザキは二郎の言う通り、どこかに隠れるのが一番無難だろう。
その時、オザキの耳に誰かの足音が届いた。
「！」
オザキは思わず身構えて、足音のした方へとふり向く。
「あ、オザキ」
姿を見せたのはクラスメイトの宮本武（みやもとたけし）。女性ではないことに、オザキはホッとして肩の力を抜いた。
「なんだ……宮本か」
「何だよ、わざわざ捜しに来たっていうのに、つれない奴だなぁ」
「ああ、悪い。ちょっと色々大変でな」
オザキは苦り切った笑みを唇に浮かべる。

「なあ、オザキ」
　宮本はいつになく真剣な表情をオザキに向けていた。
「どうした？」
「オレ、気付いたんだよ。オッパイだけじゃない。胸板だっていいもんだってな」
　そう語る宮本の目線は、オザキの胸に熱く注がれていた。
「………」
　オザキは無言でこの世の終わりのような顔を二郎に向ける。
「ああ、言い忘れておりましたわい。あの惚れ薬は男女問わず効果があるのですじゃ。ワシは中和剤を飲んどるから平気ですがの」
「何でそんな兵器作るんだよ！」
　オザキは悲鳴じみた声で叫んだ。
「愛の前には年齢も性別もないですじゃ」
「オレにはあるんだよ！」
　もちろんオザキにそっちの気はなかった。
「オザキ、お互いの胸板を揉んだりさすったりしよう」
　宮本が怪しい手つきで迫ってくる。
「じょ、冗談じゃない！」

オザキは全身に鳥肌を立てながら、脱兎のごとく駆けだした。
「学園の敷地内は危険すぎる！」
校門目指して全力疾走を開始。
途中、ベンチに座っている佐草が目に入る。
「やらないか？」
そう言いながらズボンを下ろそうとする佐草を、オザキは全力で無視した。
校門がようやく見えたところで、オザキの後ろから無数の足音が迫ってきた。
恐る恐る首だけ後ろに回してその光景を見る。
学園中の人間が、老若男女問わずオザキを追いかけてきていた。
「う、うわああああああ！」
オザキはけっして捕まるまいと、必死の思いで加速する。
しかし校門の前には、アリデッドが立ち塞がっていた。
「ヒャッハアー！　ここは通さねえぜ！　テメーはアタシのもんだ！」
アリデッドが黒い彗を構える。
後ろからは高速で飛んでくる三色の光。そして人の波。
「い、いやあああああ！」
オザキの断末魔の悲鳴が、尾を引いて伊都夏市にこだました。

気がつけば、オザキは天国にいた。
「うんこマン、何やってるんでちか？」
幼稚園児にしか見えない神様が、テレビの画面越しに呆れた顔をしている。
「……ごめんなさい」
もう言い返す気力もないオザキは、ただそう返すことしか出来なかった。

「ブラジャーを、君に」

――みなさん、乳バンドしてますか？　締めつけられてませんか？　隙間が大きすぎたりしませんか？

――ブラジャーはサイズが合った物を選ばないと、形が崩れたりして大変なことになります。美しいおっぱいは日本の、いや、世界の宝であります。そこで孤高のパイオツニア、宮本武（みやもとたけし）はオーダーメイドブラジャーを推奨（すいしょう）したい！

――一流の職人たちが作り上げる美しい文様、それがあなたのバストサイズにぴったりフィット。これはもはや芸術の域に達していると言っても過言ではありません！

――世界パイオツニア協会の全面協力により、オーダーメイドでありながらリーズナブルなお値段での提供が可能になりました。上質を知るあなたにお届けしたい……。

――御注文の際は、この世界を股にかけるパイオツニア、宮本武が直接サイズから形

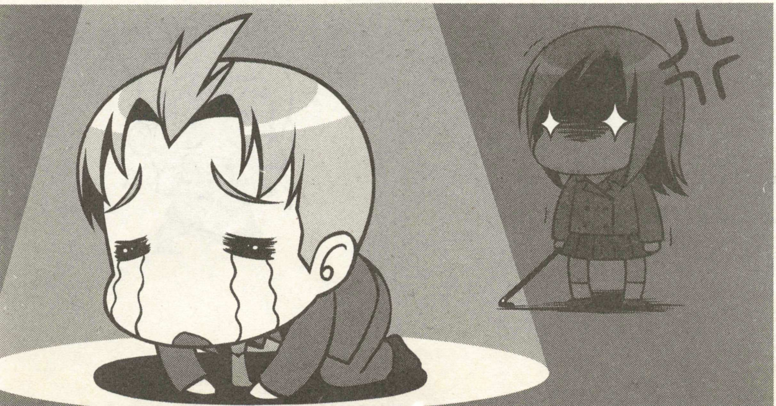
までバッチリ調べますので、初めての方でも安心してご利用いただけます。イメージトレーニングは完璧です！　何の心配もいりません！　さあ、ぜひぜひ！　気兼ねなく足をお運びください！　来てください！　おでがいじばず！　頼むから！

「タ～ケ～ちゃ～ん～……」

「ん？　あれ、ユカ。何だよ、今ＣＭ中だぞ。んん？　手に持ったそのバールのようなものは何？　え、ちょっと。あの」

ぐしゃ。

〈ただいま事故により放送が中断しております。復旧次第、番組を続けさせていただきます。ご了承ください〉



「日下部・ザ・ギャンブラー」

すべての授業を終え、帰宅の途に就こうとしたオザキを呼び止めたのは、日下部（くさかべ）のそんな一言だった。
「オザキさん、私と勝負しませんか？」
「……なんで？」
オザキは警戒するように身を引きつつ日下部に尋ねる。
新聞部の部長である日下部は、天蓋（グレンツェン）の外から来たオザキからこのセカイの真実に辿り着くための何かしらの手がかりを得ようと、執拗（しつよう）に周囲を嗅ぎ回っていた。
オザキには神様に生き返らせてもらうことで前世の記憶を有するという秘密がある。だが、この事をおいそれと話すわけにもいかず、新聞部の取材攻勢にはほとほと困っていた。
そんなオザキの心の内を見透かしたように、日下部が薄く微笑んだ。
「その勝負にオザキさんが勝てば、新聞部はあなたに対する取材を諦めます」
「え……!?」
意外な言葉にオザキは驚く。セカイの真実をつかもうと並々ならぬ執念を燃やす日下

部の口から、そんな言葉が出るとは思わなかったのだ。
「ただし——」
オザキを制するように言葉を続ける。
「私が勝ったら、オザキさんは新聞部へ入部してもらいます」
それを聞き、納得すると同時に体の力が抜けた。
「なんだ、結局そういう話か」
日下部はオザキを取材対象とすると同時に、仲間に引き込もうともしていた。
決断を迫るかのように一歩近寄る日下部。
「どうです、受けてみませんか？」
オザキはその提案を頭の中で検討する。
負けたら新聞部員にならなければならないというのは、かなりリスキーな気もするが、勝てば新聞部のストーカーまがいの取材から解放される。これは魅力的だ。
のるかそるか——。
「勝負の方法は？」
しばし逡巡（しゅんじゅん）した後、確認の意味も込めて尋ねる。
日下部は微笑を浮かべ、ポケットからトランプを取り出した。
「スタンダードにポーカーではいかかでしょう？」

オザキは一呼吸置いた後、目を見据えて返答した。
「いいぜ。その勝負、乗った」
ここで背を向けるのは性に合わない。そう考えて出した結論であった。
しかしオザキはもっと慎重に考えるべきだった。手練手管に長けた日下部が何の勝算もなく、ギャンブル性の高い勝負など挑むはずがないということを。

二人は一つの机を挟んで向かい合って座った。
「では、始めましょうか」
「ちょっと待て」
早速ゲームを開始しようとする日下部に、オザキが待ったをかけた。
「何でしょう？」
「その前にトランプを確認させてもらいたい」
日下部の普段の行いを考えると、小細工をしている可能性も十分考えられる。
「いいですよ。どうぞ」
だがその要求は拍子抜けするほどあっさりと容認された。
そのまま、箱に入ったままのトランプを手渡される。
トランプはビニールに包装されたままで、まだ開封された形跡はない。何か細工がし

である様子はないように思えた。
「何か問題でもありますか?」
「……いや」
とりあえずこの段階での小細工はないだろうとオザキは認めた。しかし日下部が何らかのイカサマをする可能性が完全に否定されたわけではない。
「イカサマが気になるのでしたら、オザキさんがカードを配ってはいかがでしょうか」
まるで心を読み取ったかのようなタイミングでの申し出に、ギクリとして日下部を見る。だが彼女の表情は変わらない。
オザキが最も警戒していたのは、トランプを配る時のイカサマだった。日下部なら配るカードを操作するような技術を持っていても、何ら不思議ではない。オザキはゲームを開始する直前に、誰か無関係な第三者にディーラーを頼んで機先を制するつもりだったのだ。
「いいのか? 俺が配って」
挑発するように言うと、日下部は表情を崩さぬまま首を縦に振った。
「私は一向に構いません」
オザキがイカサマをする可能性が限りなく低いと読んでいるのだろう。事実、彼にそんなカードテクニックはない。

オザキは内心舌打ちしつつも、余裕のある笑みを相手に向けた。
「じゃあ、遠慮なくそうさせてもらうぜ。後悔するなよ」
精一杯のハッタリだったが、日下部のポーカーフェイスは揺らがない。すでに心理戦が始まっているということに、オザキは遅まきながら気付いた。
カードを切る前に一度すべて机上に広げ、念のための確認をする。特におかしなところはなく、ジョーカーを一枚入れて全種類揃っていた。
「じゃあ、始めるぞ」
緊張を隠した声で言い、シャッフルしたカードを配ろうとした。
「ああ、大事なことを忘れていました」
「な……なんだよ」
出鼻をくじかれたオザキは作りかけていた鉄の無表情をあっさり崩す。
日下部はポケットから雪のように真っ白なコインを取り出すと、双方に積み重ねるように数枚置いた。
「これは？」
「チップです。これがある方がゲームの戦略性も増すでしょう？」
「……まあ、そうだな」
オザキは眉間にしわを寄せた。チップが存在することで、駆け引きがさらに複雑化す

り続けることにした。策士策に溺れるという言葉もある。チップという要素がプラスとマイナスどちらに作用するか、蓋(ふた)を開けてみるまではまだ分からないのだ。

と、日下部の顔に急に赤みがさしてきた。

「ギャンブルにチップはつきもの。その増減すらゲームを彩るタクティクス。負けていく度にチップが奪われ、チップがなくなれば今度はちゃ、着衣を……⁉　だ、脱衣ポーカー……！　ぬ、脱がすだけでは飽き足らずそんな要求まで……！」

「お、おい、日下部⁉」

「ゆ、許せない……！　そんな鬼畜な願望を、勝負にかこつけて私で満たそうだなんて……！」

日下部の瞳が危険な輝きを帯びると、どこからともなく持ちだした消火器をオザキに向けて振り上げた。

「だー！　落ち着け！」

オザキが一喝すると、日下部はハッとなったように正気に戻った。

「失礼しました」

何事もなかったかのように冷静さを取り戻した日下部を見ながら、オザキはため息をつく。

日下部には妄想癖があり、それはとんでもない方向に暴走しやすい。しかも本人は意外なほど初心なため、過度な妄想により自身が制御不能に陥るのだ。

「では、今度こそ始めましょう」

日下部が仕切り直すように咳払いを一つして言う。オザキも気を取り直して表情を引き締めた。

「ああ……オープン・ザ・ゲーム！」

かくして、二人の戦いの火蓋は切って落とされた。

「…………」

勝負が始まってから三十分後、オザキは机に突っ伏して頭を抱えていた。

その手元にチップは一枚もない。

「勝負あり、ですね」

「…………」

日下部とのポーカーでの勝負に、オザキは実にあっさりと負けた。

配られたカードが悪かったわけではない。だがオザキに強い役ができた時は、日下部は決して勝負に出なかった。

「オザキさんの表情が読みやすくて助かりました」

微笑混じりに言う日下部に、もはや返す言葉がなかった。
ポーカーフェイスに徹したつもりだったが、どうやら甘かったらしい。
「では、約束通りオザキさんには新聞部に来ていただきます」
「うう……」
オザキの額に汗が滲(にじ)む。
こんなギャンブルに負けて、新聞部に入ることになったなど、スピカを始め魔女(エトワール)たちにどう説明すればいいのか——。何を言ったところでひどいことになるのは目に見えている。
とは言え、勝負の結果を反故(ほご)にすることは、オザキのプライドが許さなかった。
その時、進退窮(しんたいきわ)まったオザキに救いの手が差し伸べられた。
「待ちな」
そう言って現れたのは、オザキのクラスメイトにして生徒会執行部員、宮本武(みやもとたけし)その人であった。
「宮本……」
「宮本さん、何の用でしょうか？」
「話はすべて聞かせてもらった。悪いが、このままオザキを連れて行かせるわけにはいかないな」

宮本はオザキの前に立ち、日下部と睨(にら)みあう。
「沖姫々(おききき)の差し金ですか？」
「確かに生徒会としての立場もある……」
宮本はそこで言葉を切ると、握った拳を目の高さに上げる。
「だが、それ以上にクラスメイトとして、いや、義兄弟(ブラジャー)として、オザキの苦境を見過ごすわけにはいかないんだよ！」
「宮本……お前……」
熱く叫ぶ宮本に、オザキは感動を禁じえない。
「オレと勝負しな、日下部。オレが勝ったらオザキは返してもらうぜ」
強引な横槍だったが、断固たる決意の宮本に、日下部はため息混じりに承諾した。
「……いいでしょう。ですが、私が勝ったらどうします？　オザキさんに見合うものを賭けてもらいますよ？」
宮本はオザキを椅子からどかせると、日下部の正面に座って言い放つ。
「魂を、賭けよう」
「……グッド」
日下部が承認したことにより、勝負が成立する。
正直なところ日下部は、「宮本の魂が何なのか知らないけど別にいらねえ」と思ってい

たが、もう断るのも面倒くさかったのだ。
それに、日下部には必勝の策があった。
日下部と宮本の勝負は、オザキがカードを配ることになった。オザキがイカサマをできないことは、先ほどの勝負で証明済みだったので、ある意味適任と言えた。
——頼むぞ、宮本！
心の中で念じながら、双方に五枚ずつカードを配る。
日下部は手札を見ると、カードを二枚前に出した。
「二枚チェンジで」
オザキからカードを受け取り、手札を整える。
と、ここで日下部が宮本の様子がおかしいことに気付いた。
「宮本さん、何をしているのですか？」
彼に配られたカードは、机の上に伏せられたままで、触れた形跡すらない。
宮本は日下部の質問に対し腕組みをすると、椅子に深く座り直した。
「カードは、このままでいい」
『はあ？』
オザキと日下部が揃って同じ声を出す。

PRE

「お、おい！　どういうつもりだよ！」
自分の身柄がかかっているオザキとしては、この奇行に気が気ではなかった。
「落ち着けよ、オザキ。これにはちゃんとした理由があるんだ」
オザキとは対照的に宮本は平静そのものの声でそう返す。
「聞きたいものですね、その理由とやらを」
表情を崩さない日下部に、宮本が得意げな笑みを向けた。
「オレはずっとオザキと日下部の勝負の様子を見ていた。それで気付いたんだ。日下部のコールとドロップの判断が的確すぎることにな」
「それは確かに……」
「気付いたことはもう一つある。この場にいてもおかしくないユカの姿が見えない」
「そう言えば、樋ケ(ひのけ)はいないな」
「この二つの事実から導き出される結論は一つ。どこかでユカがオザキの手札を覗き見していて、それを日下部に教えている」
「な……!?」
オザキは驚いた顔で日下部を見る。だが彼女のポーカーフェイスは微塵も揺らいでいない。
「……で、それが場に伏せられたカードとどう関係するのですか？」

「フッフッフッ……ずっと伏せていれば、どんな方法を使ったところでオレの手札は分からないってことさ」
日下部の問いに宮本は得意満面でそう答えた。
「まあ、それは確かにそうでしょうが……」
日下部は呆れたような声を出した。
確かに、日下部はイカサマをしていた。前日から準備を行い、教室の天井に穴を開け、極小サイズのカメラを設置。上からオザキの手札を覗き、それを部室のモニターで確認している樋ヶが日下部に伝えていたのだ。伝達方法も腕時計に通信機を仕込み、振動でモールス信号を使うという手の込みよう。
しかし、それを封じるためとはいえ、宮本のしていることは理解の外だった。
「本当に良いんですか、カードを見なくても」
宮本は自信満々に頷くと、今度はチップを全て場に出した。
「俺はこれに全てベットするぜ！」
「お、おい⁉」
慌てるオザキに構わず宮本は勢い良く立ち上がると、机を平手で叩いた。
「さあ、勝負(コール)するか降りる(ドロップ)か、ハッキリ口に出してもらおうか！」
勝利を確信したかのように日下部へと迫る。

「ではコールで」
「え？」
あっさり勝負に乗ってこられ、宮本は一瞬間抜け面になる。
「コールで」
「え？　あのー……手札も見ずにコイツこの自信はどこから、ま、まさか何かイカサマをー、とか思って、ビビって降りたりしないの？」
「コールで」
日下部のポーカーフェイスは全く崩れていない。
この時になって、宮本はようやく自分の作戦が失敗したことに気付いた。
「…………」
カードをオープンすると、日下部はフルハウス。宮本は当然のごとくブタだった。
「……おい」
オザキの冷ややかな視線を浴びながら、宮本は泣く泣く日下部に両手いっぱいの品物を差し出す。
「持ってけ！　オレの魂！」
宮本のアイデンティティとはすなわちオッパイであり、自らが己の魂と呼びならわすものは当然オッパイにまつわるもので、まあ有り体に言えばオッパイマウスパッドなど

の様々なオッパイグッズだったのだ。
「なっ……こ、これは………」
それを目の前に突きつけられた日下部は、これまた当然のように暴走した。
さらに宮本の持っていたアイテムを見た樋ケまで乱入してきた為、結局勝負はうやむやになったという。

「ネコミミメイドカフェには夢がある」

沖姫々。

伊都夏大学園の生徒会長にして伊都夏市自衛軍の旗振り役として、その使命に魂を燃やすうら若き乙女である。

「ご、ご主人様、お帰りにゃさいませ」

「うおおおおー！」（男たちの野太い声）

そんな彼女が今、露出の高いメイド服に身を包み、頭には可愛らしいネコミミを装着している。

「ど、どうして沖がこんにゃまねを……」

「会長、ＣＭ、ＣＭ」

物陰から沖に注意をうながす宮本。

「わ、わかってるにゃ」

沖は仕切り直すように咳払いすると、笑顔を作りスカートの裾をつまむ。

「今度、伊都夏市にネコミミメイドカフェが開店するにゃ。ぜひ足を運んでほしいにゃ」

「うおおおおー！」（男たちの熱い声）

「おいしいお茶とお料理を用意して、ご主人様のお帰りを待ってるにゃ」
「うおおおおおおー！」（男たちの心からの声）
「忙しいご主人様。でも、あんまり待たせちゃあいやだにゃん」
そこで沖がウィンクすると、歓声担当の男たちのボルテージが一気にリミッターを振り切った。
「うおおおおおおおおおー！」
盛りあがる男たちの様子を見て、ようやく沖はホッと一息をつく。
「どうやらうまくいったみたいだにゃ」
画面へと笑顔を振りまく沖に、男たちの称賛（しょうさん）の声は止まらない。
「メイド最高ー！」
「ネコミミ最高ー！」
「ネコミミメイド最高ー！」
「無乳メイド最高ー！」

「にゃ⁉」
聞き逃せない言葉に沖の眉が跳ね上がる。
「無乳最高！」
しかしテンションがおかしくなった男たちの無乳コールは止まらない。
「ジーク無乳！」
「オールハイル無乳！」
「希少価値！　ステータス！」
なおも続く無乳コールを受け、沖の肩がプルプルと震えだした。
「き、きさにゃら……」
「無乳！　無乳！　無乳！」
物陰の宮本も何故か一緒になって無乳コールをしているのを見て、沖の堪忍袋の緒が切れた。
「いい加減にするにゃー！」
薙刀(なぎなた)を振りかざして暴れまわる沖。
ようやく落ち着いた頃には、収録を行ったスタジオは見るも無惨な状態へと成り果てていた。
薙刀の餌食となり、次々と倒れ伏す男たち。

それでも男たちの魂は燃え尽きることはなかった……。

「薙刀無乳メイド最高！」

「ブルーマウンテンって一瞬
　ブルマの山かと思ってドキドキしちゃうよね」

伊都夏(いとげ)市内、某コーヒーショップ。そこには秘密の地下室がある。
その部屋では、選ばれた者たちによる極秘会議が定期的に行われていた……。

「全員揃ったようじゃな……」
窓一つない薄暗い密室の中、円形のテーブルを囲んでいる者たちを確認して、ややエキセントリックな雰囲気のある白衣の老人が椅子から立ち上がった。
彼の名は襟在二郎(きんざいじろう)。自称正義のマッドサイエンティストにして、魔女(エトワール)の一人、ミラの祖父でもある。
「それでは、定例会議を始めるとしようかの」
開会の宣言を終え二郎が席に座ると、入れ替わるように若い男が立ち上がった。天蓋(グレンツェン)の外から来た記憶喪失の男、オザキキヨヒコである。
「今日の議題は激化している悪魔(ゾディアック)との戦いの対策。オレたちがいかにして魔女たちを援護するか。それを話し合いたいと思う」

この極秘会議は、伊都夏市を襲う悪魔とどう戦うかを討論する場だった。
ただし会議に参加できるのは男のみ。
魔女と言うだけあって、当然エトワールには女性しかいない。自衛軍の臨時指揮官も女子学生の沖姫々だ。
そんな中、男にも何かできないかという趣旨で始まったのがこの極秘会議だった。
そういった事情もあり、会議の参加者は最前線で戦う女性たちを支えたいと思う者たちで構成されている。
ミラの祖父である二郎、魔女たちと縁のあるオザキ、スピカに仕える執事の襟在一郎（いちろう）、沖姫々への忠誠心が篤（あつ）い生徒会執行部の宮本武（みやもとたけし）、そして一郎と二郎が引っ張ってきた男、佐草陽水（さくさあきみ）の五人がそのメンバーであった。
「では、前回の作戦の結果を。一郎」
オザキにうながされた一郎は、あらかじめ用意してあった映写機を動かした。
スクリーンに投影されたのは、赤い光の尾を引いて空を駆けるスピカと、その周囲を彩る大輪の花火だ。
「オザキ様が考案された『火が好きなスピカを花火で景気良く応援しちゃうぞ作戦』ですが、前回の戦闘ではまずまずの効果があったようです」
「みたいだな」

オザキは得意そうな笑みを唇に乗せる。一郎は一瞬何か言いたそうな目をオザキに向けたが、そのまま沈黙を保った。

「ふむ。腕によりをかけて派手な花火を作った甲斐があったわい」

作戦に使用された花火は二郎が制作した。天才発明家を自称する彼からすれば、この程度はそれこそ朝飯前だろう。

「よし、じゃあ今度はもっと派手なのを打ち上げてやろうぜ。そうすれば――」

「お待ちください」

勢い込むオザキを一郎が制した。

「何だよ？」

「花火にスピカお嬢様を高揚させる効果があるのは分かりましたが、あまり派手すぎると、今度はお嬢様の注意がそちらに行ってしまい、大きな隙を生みだすことになります」

一郎の指摘に、オザキは言葉に詰まる。確かにそれは十分にあり得ることだった。

険しい表情で思い悩むオザキを見て、宮本が話題を変えた。

「でもミラの方は上手くいってるんだろ。ほら『ヒーローの格好でミラを応援してしまえ作戦』。あれでミラの動きが随分良くなったもんなぁ」

ミラの戦闘意欲を盛り上げるため、テレビで放送中の戦隊ヒーローのコスプレをして応援するという作戦は、ものの見事に上手くいった。ヒーローの声援を受けたミラは、

いつもの三割増しの強さで悪魔を撃退してみせたのだ。
「うむ……。それがちと困ったことになりましての」
ミラの祖父である二郎が、渋い顔で頭をかいた。
「何か問題でも？」
双子である一郎が問うと、二郎は映写機を操作し、別の映像を出す。
スクリーンには一目でそれと分かる戦隊ヒーローが映し出されていた。
「あ、それ新しく始まった戦隊ものだろ。野球戦隊クローザーズとかいう」
宮本が言うと二郎は暗い顔で頷いた。
「戦隊ものでテーマが野球か。ミラの好きな要素が二つもあるじゃないか。かなり気に入ってるんじゃないか？」
オザキの言葉に、二郎は首を横に振った。
「実はそうでもないんですじゃ……」
二郎は新たな映像へと画面を切り替える。
その映像の不自然さに、最初に気付いたのは宮本だった。
「……なんでセンター前にキャッチャーがいるんだ？」
宮本はかつて野球少年で、今でも草野球チームに在籍しているほど根っからの野球好きである。そんな彼の目にはセンター前に捕手がいるという状況は、極めて奇異に映った。

「これは番組のワンシーンですじゃ」

二郎がため息混じりに言う。

「どういうシーンだよ」

さすがにオザキからもツッコミが入る。

「これは序の口でしてな……」

二郎が映写機を操作してまた映像が切り替わる。

今度はマウンドからの視点が映し出された。

『な、なんだコリャ⁉』

オザキと宮本が同時に声を出した。

まずバッターが持っているバットが三メートル近くあった。それだけではなく、バッターがピッチャーに背を向けて構えていた。さらには球審までもが背を向けている。

野球をよく知らない者でも、違和感を覚えるのは当然だろう。

「えーっと、これはどういうギャグなんだ？」

オザキが呆れたように言う。

「これは仕様ですじゃ……」

二郎が諦めきったように肩を竦める。

「いやいや、仕様っておかしいでしょ」

宮本が苛立(いらだ)ちを隠しきれぬ声で言う。彼からすれば愛する野球を侮辱(ぶじょく)されたような気分なのだろう。

「ミラもそう思ったらしいですじゃ。戦隊ものの要(かなめ)である戦闘も、毎回同じパターンを繰り返し、ものの五分で終わりましてのう。あとはよく分からんメロドラマをやっておるんですじゃ。好きな物を二つ同時に冒涜(ぼうとく)された気分になったのですじゃろう。ミラは最近すっかりご機嫌ナナメですじゃ」

二郎はガックリと肩を落とした。

「わかる！　オレにはわかるぞ、ミラよ！」

宮本が握った拳を震わせて同意を示す。よっぽど気に入らなかったようだ。

「それではヒーローで応援する作戦も、今以上の効果は望めないということですな」

一郎も落胆の色を見せた。

「新番組が始まるまでは難しいな……」

オザキも頭をかきむしる。

重い空気が流れる中、それまで一言も発さなかった佐草が立ち上がった。

「この際、スピカ君とミラ君のことは置いておこう」

全員の注目が佐草に集まる。

「魔女はもう一人いるだろう？」

言われて、オザキの口からその名が漏れる。
「ガーネット……」
三人の魔女のまとめ役とも言えるガーネットは、そのしっかりした性格ゆえに、効果的な支援を行えずにいた。
「ガーネット君か。今までにも色々考えたんですじゃがのう」
二郎が額をポリポリとかく。
ガーネットは戦闘の中では狙撃手のような役割をしている。精度が要求される分、集中を乱すような応援は逆効果になってしまう。
それを考えると、スピカやミラのような派手な行動はとれない。
「うーん……」
皆が思索の沼に沈みそうになる前に、佐草が口を開いた。
「俺に考えがある」
そう言う佐草の瞳には自信の光があった。
「聞かせていただきましょう」
「まず、ガーネット君の潜在能力を引き出すにはどうすればいいか。俺はそこから考えてみた」
「潜在能力……」

オザキがその単語をもう一度繰り返す。

「そうだ。人の潜在能力というものは、追い込まれた時に発揮されやすい」

「火事場の馬鹿力ってやつ？」

佐草は宮本に頷く。

「簡単に言うとそれだな。事例は山のようにあるし、脳内麻薬とやらで理屈も付けられる。まあコントロールするのは至難の技のようだが」

「そうですのう。スポーツで似たようなトレーニングがないでもないんじゃが、ああいうのは安全性に気を遣いますからのう。命がけで戦っている魔女に意味がありますかどうか」

「制限……だって？」

二郎が科学者らしく現実的な分析を加えた。

「いや、もっと単純な制限を設ければいいんだ」

オザキが眉間にしわを刻む。

「そう、例えば時間制限」

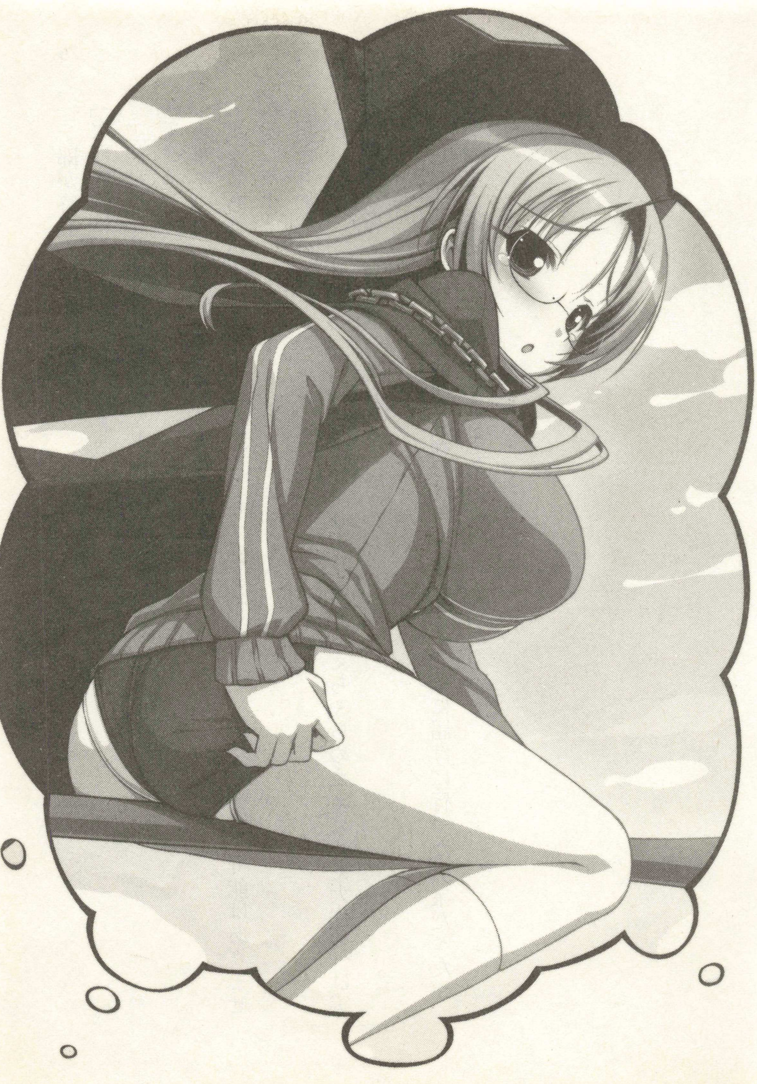
「時間制限ですと？」

「そうです、二郎さん。この作戦のためにはあなたの協力が不可欠です」

佐草の真剣な眼差しに、二郎も表情を引き締める。

「詳しく聞かせていただきますじゃ」
佐草は頷くと、数万の聴衆を相手取るように語り始めた。
「まず、重要なのはガーネット君の格好だ」
「ガーネットの格好っていうと……」
「ジャージブルマだな」
宮本が素早く反応した。
「そうだ、ブルマだ。これこそが作戦の要となる」
「ブルマが……？」
オザキは何となく一郎に視線を送るが、一郎は首を横に振った。かつて戦場を駆け抜けた彼にも、佐草の意図がまだつかめていないらしい。
「人は追い詰められれば追い詰められるほど、その隠された力を発揮する。もちろん逆の場合もあるが。しかし、魔女の一人であるガーネット君なら、必ずや己の窮状（きゅうじょう）を力に変えることができるであろう」
その点で異論がある者はいなかった。
「そこで、彼女のブルマにある仕掛けを施す」
「その仕掛けとは……？」
オザキは生唾（なまつば）を飲み込み、佐草の次の言葉を待った。

佐草は厳かな声でこう言った。
「時間が経つと、ブルマが縮んでいく」
佐草のその一言に、全員が思わず言葉を失った。
しばし静寂がその場を支配する。
その沈黙を破ったのは宮本だった。
「佐草の先生――いや、佐草師匠。オレは生徒会執行部の一員でありながら、顧問のあなたのことをこれまでないがしろにしてきました。それを心からお詫びします」
佐草と宮本はがっちりと握手をする。
「佐草」
オザキが佐草の前に歩み出る。
そして、右手を差し出した。
「オレも宮本と同じ気持ちだ」
「オザキ……」
佐草が柔和な笑みをこぼし、オザキの手を握る。オザキは照れたように微笑した。
「時間制限……なるほど、そういう方法がありましたか」



一郎が感心したように頷く。
「次の作戦は決まりのようですな」
二郎は少年のように目を輝かせていた。
「できるな、二郎」
オザキの問いかけに、二郎は満面の笑みで答えた。
「お任せあれい！　この正義のマッドサイエンティスト、襟在二郎に不可能はありませんのじゃ！」
男たちの心は今、一つになった。
こうして、『ガーネットのブルマがギリギリ限界みえちゃらめえええええ大作戦』は実行に移されることとなった。
後日完成した、時間が経つと縮むブルマをガーネットに届けに行った男衆だったが、当然のように青い光に薙ぎ払われたという。

「夢は大きく膨らんで」

伊都夏大学園生徒会長にして、伊都夏市自衛軍臨時指揮官である沖姫々。
品行方正にして容姿端麗、そして文武両道を歩む彼女を、多くの人が憧憬の眼差しで見ていた。
しかしそんな彼女にも、とても大きな悩みがあった。
沖は自室で着衣を脱ぎ去り、姿見の前に立っていた。
鏡に映った自分の姿を見ながら、沖はため息をつく。
白く柔らかな肌、均整の取れた肉体、少年のように瑞々しい肉体美がそこにはあった。
そう、少年のように。
「むう……」
沖は眉間にしわを寄せながら、自らの胸部に手を当てる。
そこには女性としてあるべき膨らみが、ほとんど無かった。山も丘もない。平原だ。
このバストサイズこそが、彼女の最大のコンプレックスだった。
「はあ……」

沖はもう一度ため息をつく。

胸が女性の魅力のすべてだと思っているわけではない。世の中には大きいより小さいほうが好きな者も少なくないと聞く。

しかしである。

沖とは何かと対立している日下部雨火(くさかべあまほ)、そしてこの地を守る魔女(エトワール)たち。彼女らは皆、沖よりも胸が大きかった。特にガーネットとはまさしく天地の差があった。

これが沖にとっては面白くなかった。口論になると毎回ウィークポイントとしてつつかれる。不愉快なことこの上ない。

――なんとかせねばなるまい。

弱点を弱点のまま放置することは、沖の矜持(きょうじ)が許さなかった。

こうしてバストをサイズアップすべく、沖の「猛特訓」が始まった。

胸を大きくするためには、その部分を盛り上げればよい。

そう考えた沖は、大胸筋を鍛えるべく、厳しいトレーニングを開始した。

腕立て伏せをはじめ、ダンベル運動、ベンチプレスを行い、トレーニングの合間に牛乳や豆乳を摂取した。もちろん全身のバランスが崩れぬように、他の部分の鍛錬も怠らない。

そんなある日、ジョギングの途中でスピカたち三人の魔女とばったり出くわした。
「あ、沖会長」
礼儀正しいガーネットが丁寧に挨拶する。
「む、お主らか……」
沖は足を止めて息を整える。
「かいちょー、ダイエット？」
ミラが訊くと、沖は首を横に振った。
「いいや。単なる鍛錬の一環だ」
胸を大きくするための特訓中だとは、口が裂けても言えない。
「ミラ、沖がこれ以上脂肪を落とせるわけないでしょ？」
スピカが意地悪そうな笑みを閃かせる。
「へ？　どーして？」
「だって、これ以上減らしたら、ねえ？」
スピカの視線は、沖の胸のあたりに注がれていた。
「……どういう意味かな？」
沖の頬がピクピクと震える。
「さあ？　でも脂肪って、胸からなくなっていくのよねぇ」

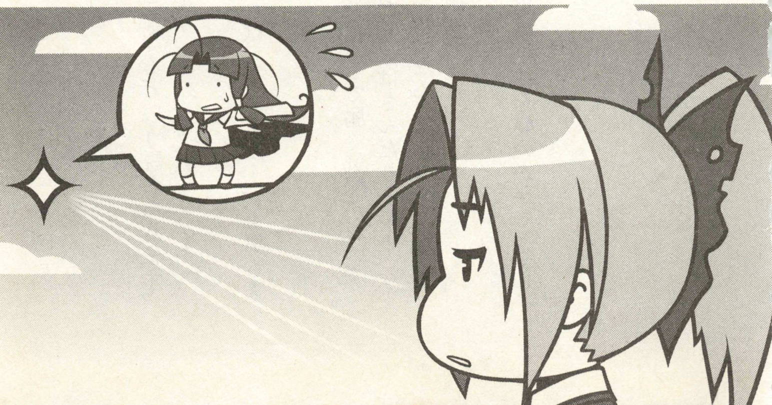
「そ、そうなのか……⁉」
胸がもとより平らな沖にはそういう経験がなかったので、スピカの言葉の真偽を判断しかねた。
「どうかしらね？」
スピカが面白そうに笑う。
「貴様……」
からかわれていると感じた沖が、全身から怒気を放ち始めた。
「あらあら、気が短いわね。カルシウムとってる？ 牛乳飲んでないの？ あ、飲んでたらもう少し大きくなってるかな？」
「ぬぐっ」
ここのところリットル単位で牛乳を飲んでいる沖は、何と言い返していいか分からず言葉に詰まった。
「スピカちゃん、ダメよ」
ガーネットが、間に入って取りなそうとする。しかし、彼女の豊満なバストが目の前でゆさゆさと揺れていては、沖には逆効果にしかならない。
「黙れ！ 所詮（しょせん）我らとお主らとは相容れぬ者同士。ここで決着をつけてくれる！」
沖は薙刀（なぎなた）をスピカに向けた。

「おっと」
スピカは素早く彗に飛び乗り、空中に逃れる。
「くっ、またしても！」
「残念でした」
からかうように眼下の沖に舌を出してみせた。それを受けて沖は、不敵な笑みを浮かべる。
「いつまでも空が安全地帯だと思うなよ」
沖は薙刀を片手に持ち替えると、槍投げのような姿勢に入った。
「当たるものですか」
スピカは上昇して沖との距離をとる。
沖は唇の端を上げると、薙刀をスピカめがけて放った。同時に自身も大地を蹴って、投げた薙刀に飛び乗る。
「んな⁉」
これにはさすがのスピカも動揺する。
連日の過酷な鍛錬は、沖にこのような超人的な技を可能にさせていた。
「ふははは！　そこへなおれ、スピカ！」
会心の笑みを浮かべて、スピカへと真っすぐ向かっていく沖。

かなわず、そのまま遥か遠くへと消えていった。
「あ、しまった！　と、止まれぬ！」
スピカが横に避けると、リネアではなく慣性で飛んでいる沖はブレーキも方向転換も
「うわっと」

そんなこんなで一ヶ月。
校門付近を歩いていた沖に、突如現れた日下部のカメラが向けられた。
一枚写真を撮った後、怪訝そうな顔を向ける。
「元気がありませんね」
日下部の言う通り、沖の表情はあからさまに沈んでいた。
「貴様には関係がない」
その声にもいつもの力強さがない。
沖が失意の底にいる理由は、一ヶ月の猛特訓にもかかわらず、一ミリたりとも増えなかったバストサイズだ。
努力の方向性が間違っているのだから、当然と言えば当然なのだが。
そんな話を日下部にできるわけがない。沖は気付かれる前にその場を去ろうとした。
「胸の悩みですか？」

その歩みがピタリと止まる。
「バストのサイズアップを目指して頑張ったのに、全然変わらなかったとか？」
「き、貴様、なぜそれを！」
沖は顔を真っ赤にして日下部に詰め寄る。
「いえ、ここのところ、沖さんがやたらと牛乳を飲んでいる姿を目にしましたもので。かまをかけてみました」
「ふ、不覚……」
沖はガックリとうなだれた。
めったにない姿に、日下部はそんな沖の様子を写真に収める。
「体を鍛えても胸は大きくなりませんよ」
「うう……」
途中からそんな気がしはじめてはいたのだが、決めたことを途中で投げ出すことは、沖の性格上できなかったのだ。
「！」



「食生活を変えてダメなら、あとはアレしかありませんね」
「あれ……？」
「そうです。胸は女性ホルモンが分泌することにより大きくなるという説があります。女性ホルモンの分泌を誘発するのは異性との接触。つ、つまり、ぺ、ペッティング！」
日下部は自分の言葉で一気に赤面する。
「よ、要するに、む、む、胸を男性にもももも、揉ませれば、大きく……女も男も大きく！」
「お、おい、日下部」
自分で勝手に妄想を暴走させている日下部に声をかけるも、まるで届く気配がない。
「そ、そんな、じっくりたっぷり、も、もみもみ、つまんだり、はさんだり……！　イヤ……ゴムマリじゃないのに……！　お、おもちゃみたいに扱うなんて……！」
顔を紅潮させ身をよじっていた日下部は、突然消火器を振り上げた。
「ゆ、許せない。私の胸を見ている男は全員ケダモノ……！」
暴走に拍車のかかった日下部は、無差別にそのあたりの男子生徒を襲いかかろうとしていた。
「いい加減にせんかー！」
日下部を止めるべく、沖が薙刀を振るう。

「やらせはしません！」

瞬間立ち直った日下部はそれを打ち払おうと消化器を掲げた。

「なっ⁉」

消火器は真っ二つに切断され、その衝撃の余波で日下部は吹き飛ばされた。

沖は胸を大きくするための特訓で以前よりはるかにパワーアップした肉体を手に入れていたのだ。

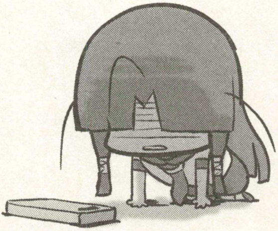
「また、つまらぬ物を斬ってしまった……」

そんな勝利のセリフも虚しい。

「しかし、男に揉まれる、か……」

沖は自分の胸に手を当てる。

つるりと撫でられる感触に、もはや乾いた笑いしか出なかった。



「乳、帰る」

オッパイとは何か――。
それは男として生まれたからには、生涯をかけて探究すべき永遠のテーマである。
伊都夏市随一のオッパイマニア、宮本武もまた、いまだオッパイの真理を追う求道者であった。
宮本は真のパイオツニアとなるべく、日々の修業を欠かさない。
オッパイ以外の煩悩を洗い流すため、滝に打たれて修業をしようと思ったが、近くに滝がないので健康ランドの打たせ湯で我慢した。
今日も健康ランドに通い、打たせ湯の下でオッパイについて夢想を広げていた。すでに二時間近くお湯に打たれて続けている。
宮本のオッパイのイメージ構築は完璧だった。頭の中には大小様々なオッパイが思い描かれている。
――しかし。
宮本は大浴場の壁を見る。
あの壁一枚を隔てた向こうには、本物のオッパイがわんさかあるというのに。

なんと高くて分厚い壁であることか。
「オレに透視能力さえあれば……！」
宮本は目に力を入れる。
「見えろ……見えろ……！」
無駄とは分かっていてもやらずにはいられない。何故ならば、そこにオッパイがあるから。
「……っ⁉」
ふと、湯気の向こうにある壁に、肌色のものがちらついた。
「ま、まさか……⁉」
宮本は目を限界まで開き、瞳にいまだかつてないほど力を込める。
「ふぬぬぬぬ！」
力を入れすぎて、鼻の穴から赤い物が滴り落ちた。
次の瞬間、奇跡が起こった。
「み、見えるぞ！」
今まで鉄壁のベールに包まれていた壁の向こうの光景が、宮本の目に飛び込んできたのだ。
「おおお……」

生で見るオッパイの群れに、宮本は感動で身を震わせた。ついでに鼻血の量はさらに増える。

「我、ついに奥義を会得(えとく)せり！」

　パイオツニア、宮本武が新次元への扉を開いた瞬間だった。

　次の日、学園に登校した宮本は、生徒会執行部の朝の務めである校門での挨拶を行っていた。

「おはようございます！」

「おはようございます！」

　執行部の元気のいい挨拶が飛び交う中、宮本はやたらと清々(すがすが)しい表情をしていた。いつものように女子生徒の胸を執拗(しつよう)に目で追いかけたりしていない。これには他の執行部のメンバーも、変だと思い始めていた。

「宮本」

　執行部の見回りにやってきた沖(おき)が宮本に声をかける。

「会長、おはようございます」

　宮本は爽やかに挨拶をする。

「何かあったのか？　今日のおぬしは随分と穏やかな表情をしているが」

いつもの宮本なら、女性の胸への情熱がありありと顔に浮かんでいる。しかし、今日の宮本にはそれが欠片（かけら）もなかった。沖はそのことを遠回しに指摘したのだ。

宮本は白い歯を見せて微笑む。

確かに今までなら、オッパイへの渇望で女子生徒の胸へ熱視線を送り続けていたであろう。

だが今は違う。宮本の目は、衣服越しでもオッパイを透視することができるようになったのだ。もはや浅ましく欲望をむき出しにする必要はない。

「今のオレは、いわば常時スーパー賢者タイム。どんなサイズも等しく愛することができるのです」

宮本は慈愛に満ちた笑みを沖へと向ける。

「……何だかよく分からんが、まあいい。大人になったということならな」

沖はとりあえずそうまとめて、自分の配置に戻った。宮本は沖の背中を爽やかな顔のまま見送った。

朝の務めが終わり、教室に入った宮本は、スピカを見つけると近づいた。

「おはよう、スピカ」

「おはよう、宮本」

特に気にすることもなく挨拶を返すスピカ。
「フフフ……『あの丘を越えて』……まずはこれからだ」
宮本の溢れ出すような笑顔に、スピカは何となく身の危険を感じた。
「な、何コイツ……？」
「ワンダフリャ宮本アイ！」
宮本はカッと目を見開き、スピカのオッパイを透視した。
「見えた……フフ……やはり素晴らしい。これぞ逸材」
宮本はスピカのオッパイをイメージで再現し、指をわきわきと動かし始めた。
「な……何やってんのよ？」
スピカは本能的に異変を察知し、宮本から離れる。
「フ……距離はもはやオレには関係ない。俺の手とオッパイは小宇宙でつながっている！」
宮本はイメージで作り上げたスピカのオッパイを揉み始める。弾力、肌触り、温かさとすべてが完璧に再現されていた。エアギターならぬエアオッパイである。
「うむ、極上だ。おお、柔らかい」
「ちょ、ちょっと……」
スピカは宮本のいやらしい指の動きに鳥肌が立つのを感じた。

「スーちゃん、みやもとと何やってるんだい？」
声をかけてきたミラに、スピカは宮本の方を指差す。
「アイツ、何かおかしいんだけど」
「んへ？　みやもとが？」
宮本と親しいミラは、特に警戒もなく彼に近づく。
「みやもと、おっはよー」
「やあミラ、『嘆き(なげ)の壁』。オッパイに貴賤(きせん)はないのだよ」
宮本は聖者のようにミラに接する。さすがにミラも宮本に異質さを感じた。
「みやもと、何か変だぞー？」
「違うな、ミラ。間違っていたのはオレじゃない。セカイの方だ」
宮本が悟りきったように言ったが、ミラには何のことだかさっぱり分からない。
そこへ、職員室からプリントを運んできたガーネットが教室に入って来た。
宮本はガーネットに顔を向ける。
「待ってたぜ……。『オッパニア・オッパイ』！　至高の存在！」
宮本はガーネットの胸を透視する。その豊満なサイズに、宮本は自然と笑い声を立てていた。
「ふはははは！　ついに手に入れたぞ！　長年の夢！　人類の母なる揺り籠(かご)！」

気炎を上げている宮本を、ガーネットはキョトンと見る。
「さて……早速楽しませてもらうとしようか」
宮本はガーネットのオッパイを目の前にイメージで再現すると、それに触れようと手を伸ばす。
しかし指が触れる直前に、頭部に強い衝撃が走った。
「うぐお!?」
思わぬ攻撃に、苦痛の声を上げてよろめく。
「タケちゃん！」
宮本を殴ったのは、幼なじみの樋ケ結花だった。
「な、何するんだよ」
宮本は殴られた場所を押さえながら抗議する。
樋ケは柳眉を逆立てて怒鳴った。
「何するんだ、じゃないでしょ！　アンタさっきから何やってんのよ！」
「な、何を怒ってるんだよ？」
「だってさっきから手つきが……その、アレじゃない。も、揉んでるじゃない」
後半トーンダウンさせながら、樋ケは言った。
「よく分かったな、ユカ」

宮本は意外なセリフに思わず感心してしまう。
「そ、そりゃまあ、タケちゃんのことだから……って、そうじゃなくて！」
顔を真っ赤にする樋ヶに、宮本は静かな微笑を向けた。
「ばれてしまってはしょうがない。そう、オレはオッパイを透視する能力を手に入れたのだ！」
「……はあ？」
いきなり何を言い出すのかと、樋ヶは困惑気味の表情を浮かべた。
宮本は構わず話を続ける。
「長年の修業が、オレに奇跡の力を授けたのだよ。積み重ねられた努力は、決して自分を裏切らない」
そのセリフだけ抜き出せばいいことを言っているようだが、修行というのがオッパイに関することであるため、すべて台無しになっている。
「はあ？　透視ですって？」
樋ヶが呆れたような顔を宮本に向けた。
「そう！　だから今まで不完全だったオッパイのイメージを、完全に再現することができるのだ！　言っとくけどな、イメージをバカにするんじゃねえぞ。すっぱい梅干しが口の中一杯にあると想像してみろ。唾液が出てくるだろ？」

呆れ顔だった樋ヶの目が、段々とすわってきた。
「……で、そのイメージで再現した胸を揉んでいたと。そういうわけ」
「うむ！　今までのイメージトレーニングは決して無駄ではなかった！」
堂々と言い切る宮本に、教室の女子生徒たちは極寒の視線を向けていた。
樋ヶは感情を静めるように額を揉みながら口を開く。
「……ねえ。ちょっと質問してもいいかしら？」
「ん、何だ？」
「今日のスピカのブラは何色？」
その質問に真っ先に反応したのは当のスピカだった。
「ちょ、ちょっと！　一体何を訊いてるのよ！」
「いいから、私に任せて」
樋ヶはスピカに目で「考えがある」とサインを送った。
完全に納得したわけではないが、ひとまずスピカは口を閉じる。
「ブ、ブラジャーの色……？」
宮本の顔は今までの自信に満ち溢れていた表情が消え、ありありと狼狽（ろうばい）の色が浮かんでいた。
「どうしたの？　透視できるんでしょう？　だったら答えられるはずよね？」

「あ……ああ、も、もちろんさ。えーっと、……赤？」
　樋ヶはスピカに視線を送る。
「違うわよ」
　スピカは怒ったような声で答えた。
「だってさ」
「え？　あれ？」
　宮本は混乱する頭を抱える。
「なんじゃらほい？」
　ミラには今の状況がよく理解できなかった。
　ここで、話を聞いていたガーネットが出揃った情報をまとめる。
「今までの話の流れから考えると、宮本くんは透視能力を手に入れたつもりだった。けど、実際にはそう思い込んでいただけで、イメージが現実に置き換わっていただけなんじゃないかしら」
　スピカはガーネットの説明を咀嚼（そしゃく）して自分なりに解釈する。
「えーっと、つまり、透視して見えたと思っていたのは、宮本のイメージの産物で、それが現実だと思い込んでたってこと？」
「いわば無意識のコラージュね」

樋ヶが端的に表した。

「そ、そんなバカな……！」

宮本はショックを受けて、よろめきながら数歩下がった。

あの健康ランドで壁の向こうが見えたと思ったのは、長時間お湯を頭に打たせ続けたために見えた幻覚だったのである。

樋ヶは頭をかきながら呆れきったようにため息をつく。

「まったく、何が透視能力よ。胸のことばかり考えてるから現実と妄想の区別がつかなくなるのよ」

力なく俯いていた宮本だったが、この言葉にゆっくりと顔を上げた。

「……違う」

「は？　何か言った？」

「違う。確かに透視能力は勘違いだったのかもしれない。だが、俺のエアオッパイは完成している！　イメージによる補完は完全になった！」

宮本が感情を迸らせた。

「ちょ、ちょっと……」

樋ヶは気圧されたようにたじろく。

「こうなったら見せてやる！　オレのエアオッパイ最終奥義を！　秘技、全方位乳囲

み！」

宮本は脳の処理能力をフルに使い、クラスの女子全員分のオッパイを自分の周囲にイメージした。

「片っ端からいただきます！」

宮本は自分の周りに鈴なりになっているオッパイを揉んでいく。

当然傍（はた）から見れば凄まじい変質者だった。

「うわっ、最悪」

その変態行為に、スピカたちを含め、女子生徒は全員ドン引きになる。

ただ一人、樋ヶだけは小刻みに肩を震わせていた。

「いい加減に……」

「ふはははは！　祭りじゃー！　オッパイ祭りじゃー！」

狂ったように想像のオッパイを揉み続ける宮本に、ついに樋ヶがキレた。

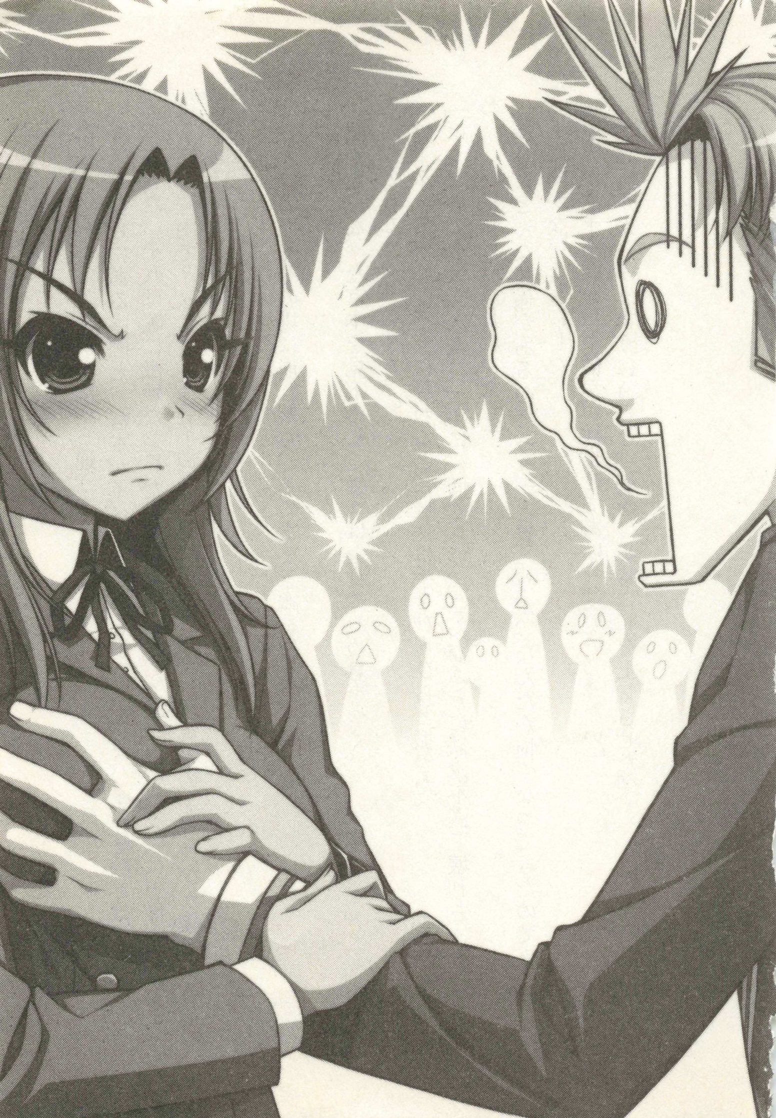
「いい加減にしなさーい！」

樋ヶは宮本の腕をつかむと、何を思ったのか強引に自分の胸を触らせた。

『ええっ⁉』

これにはスピカたちも驚く。

樋ヶの胸に触れた宮本は、彫像のように硬直した。



「あ……あれ……？　なんか……違う……？」

今手のひらにある感触と、宮本がイメージで作り上げたオッパイの感触とは、何かが違っていた。それは実に微妙な差異だったのかもしれない。しかし実際に想像で感触を得るほど脳内でイメージを作り上げていた宮本は、その現実とのギャップが楔（くさび）となり、一時的に自我が崩壊してしまった。

「ぐはっ……！」

宮本は力なくその場に崩れ落ち、そのまま意識を失う。

「はあ……」

動かなくなった宮本を見下ろし、樋ヶは全身でため息をつく。

「ど、どうなったんですか？」

ガーネットが心配そうに尋ねると、樋ヶは手をひらひらと振った。

「ほっといても大丈夫よ。一年に一回ぐらい、こんなふうに欲求不満で壊れちゃうのよねえ。特に昨日は満月だったし」

満月にどんな関係があるのだろうかと思ったが、なんだか怖くなってきたのでガーネットは聞かないことにした。

「原因が欲求不満なら、樋ヶが揉ませてあげればいいじゃない」

スピカがからかうように言うと、樋ヶは瞬時に顔を上気させた。

「じょ、冗談じゃないわよ！　な、何言ってんの⁉　バカなの⁉　死ぬの⁉」
必死に言葉を並べたてる樋ヶを見ながら、スピカがニヤニヤと笑う。
「さっきは触らせてたじゃない。あはーん、って」
「あ、あれは、ああすると治るからだからで、他に意味はないのよ！　そ、それに、目が覚めたら、どうせ忘れてるし……」
その言葉の最後の方は消え入りそうになるぐらい弱々しかった。
「苦労するわね、アンタも」
スピカはうんうんと頷く。
「私は応援してますからね」
ガーネットも樋ヶを激励する。
「だから！　そういうのじゃないんだってば！」
そんな樋ヶの言葉を、信じる者はこのクラスには誰もいないのだった。
ちなみに宮本は三日ほど寝込み、能力と共にその日の記憶をきれいさっぱり忘れたという。

「混ぜるな危険」

その日の夜、アリデッドはいつものようにどうしようもなく散らかった自宅のリビングで映画を見ながら、怪しげなお菓子をビールで流し込んでいた。
今流しているのはホラー映画で、不死身の殺人鬼が何百年か氷漬けになっていたところを、未来人が気まぐれに解凍してしまい、宇宙船の中で大暴れするという。
飲んでいた缶ビールが空になったので、アリデッドは冷蔵庫を開けに行く。しかし、もうビールは一本もなかった。
「オウ、ジーザス！ なんてこった、もう買い置きがねえだと⁉ 早く言えよテメー！」
アルコールが回っているアリデッドは、冷蔵庫に悪態をついた。
「くそ、今から買いに出るのも面倒だし……オザキに行かせるか？」
アリデッドは自らが身元引受人となっている同居人のことを思い出す。
「いや、ダメだな。アイツ車乗れねえし。帰ってくる前に映画が終わっちまう」
アリデッドは少しの間逡巡（しゅんじゅん）した後、ビールのことは諦め、別の飲み物で妥協することにした。
「しゃーねえ。ここは入荷したてのこいつらに出てきてもらうか」

　アリデッドは冷蔵庫の奥に隠すようにして置いてあったペットボトルを数本取り出した。わざわざ隠してあったのは、オザキに飲まれないようにするためだ。もっとも、同居人は家主の仕入れるチャレンジ精神あふれる飲み物に手をつけるつもりは一切ないのだが。

　アリデッドは毒々しい色彩のペットボトルをテーブルに並べる。

「おーし、まずはこれからいってみるか」

　アリデッドは「胡椒洞窟（ペッパー・ケイブ）」という名前のドリンクを口にした。

「うほあっ！　まっじーな、オイ！」

　あまりにひどい味だったらしく、アリデッドは一口飲んだだけで噴（ふ）き出し、それ以上飲むことを諦めた。

「次だ、次！」

　今度は「灼熱胡椒（ホット・ペッパー）」とラベルに書かれたドリンクを飲む。

「かれえー！」

　こちらは、誰が得をするのか分からないほど激辛のジュースだった。

　そんな感じで、アリデッドは次々と珍妙なドリンクを味見したが、どれも今一つでピンと来るモノがない。

「ちっ、今回はどれもこれもハズレかよ。だいたいパンチがきいてねえんだよ。なんつ

ーか、こう強烈に惹きつける魅力というか」
アリデッドは近くに転がっていたぬいぐるみに説明していた。変な味のドリンクを立て続けに飲んだせいで、酔いがかなり回ってしまったようだ。
「ああ、そうだ」
アリデッドはポンと手を打つと、特大サイズのビールジョッキを用意し、ドリンクの飲み残しを全部中に注ぎ込んだ。様々な色が混じり、どういう反応を起こしたのか七色に変化する。
「おお、いいねえ。レインボー！」
酔っぱらっているアリデッドはジョッキの中身の派手な色合いに上機嫌になると、先ほど吐き出したことも忘れ、それを一気に飲み干した。
「ぷっはー！」
ジョッキを一息に空にし、大きく息を吐きだした後、時間差で味が脳に伝わった。
「ぶぼっほ⁉」
味覚の許容範囲を超えた味が、メジャーリーガーのフルスイング以上のショックを脳に与える。そのあまりの破壊力に、アリデッドは白目をむいて気絶してしまった。
動く者のいないリビングでは、映画はクライマックスに突入しており、爆発した宇宙船から放り出された殺人鬼が、どこかの惑星で大気圏を突破していた。

「……君、オザキ君」

まどろみの中にいたオザキは、自分を呼ぶ声に重いまぶたをゆっくりと開いた。

「ん……」

ぼやける視界の中で、上から覗き込んでいるアリデッドの顔を見つけた。

「あー……アリデッド……？　今日は早起きじゃないか……」

オザキは寝惚け眼をこすりながら上半身を起こす。

「何言ってるの。あんまりのんびり寝てると遅刻しちゃうわよ」

「んー、そうだな……」

オザキは思いっきり伸びをする。

「朝ごはん出来てるから、早く支度してきなさい」

「へーい」

アリデッドが部屋から出ていった後、オザキの頭はようやくしゃっきりしてきた。そして、眠そうだった顔が一瞬で覚醒した。

「……誰だ、今の？」

学校へ行く準備を整えてリビングに向かうと、そこには信じられない光景が広がって

くなく磨かれている。
そして、テーブルの上にはベーコンと目玉焼き、トーストといった、今までこの家で見たこともない朝食が用意されていた。
「冷める前に食べちゃいなさい」
そう言いながら台所から姿を見せたアリデッドは、長い髪を後ろで結び、エプロンをしている。
「え……？　まさか、この朝食って、アリデッドが、作ったのか？」
一語ずつ区切りながら、オザキはアリデッドに確認する。
「そうよ。当然じゃない」
オザキはポカンと口を開けた。
口調から立ち振る舞いまで、何もかもが前日までのアリデッドとは違っていた。
「えーっと……ドッキリ企画とかじゃないよな？」
オザキはどこかに隠れて笑っている奴がいないか、周囲を見回して探す。しかし誰かが潜んでいるような気配はない。部屋がきれいに片付き過ぎて、隠れる場所がないのだ。

「訳の分からないこと言ってないで、早く食べなさい。遅刻したいの？」

「あ……はい」

完全に調子を狂わされたオザキは、素直にテーブルに着いた。アリデッドもオザキの正面に座る。

手を合わせてから、オザキはアリデッドの手料理らしき目玉焼きを口に運ぶ。今までアリデッドが料理したものなど一度も食べたことがなかったので、口に入れるのに多少の勇気が必要だった。

しかしいざ食べてみると、焼き具合も塩加減もよく、まったく問題なく食することができる。上出来と言って差し支えがない。

「どう、美味しい？」

「うん……まあ」

アリデッドに尋ねられ、オザキは素直に頷いた。

「そう。よかった」

自分の答えに嬉しそうに微笑んでいる。それを見て、オザキは不覚にも頬を紅潮させてしまった。

登校したオザキは、自分の席で頭を抱えて突っ伏していた。

「オザキくん、どうかしたんですか？」
面倒見のいいガーネットが、心配して声をかける。
オザキは朝から疲れ切ったような顔をガーネットに向けた。
「いや、もう何がなんだかわかんなかったり、自己嫌悪だったり」
オザキの言葉は要領を得ず、ガーネットは小首を傾げるばかり。
始業のベルが鳴ってすぐ、アリデッドが教室に入ってきた。その姿を見て、オザキ以外の生徒の目は点となった。
いつものようにだらしなく着崩した服ではなく、キチンとしたスーツに身を包み、髪はアップにしてまとめ、まるでまともな教師に見える。
「……誰、アレ」
呆然と呟くスピカの声が耳に届く。無理もない。
アリデッドは教卓の前に立つと、生徒一同ににこやかに微笑む。
「皆さん、おはようございます」
教室の生徒たちは、唖然となったまま挨拶を返せなかった。
アリデッドは幾つかの連絡事項を伝え、朝のホームルームを終えると、教室を出て行った。
教室の扉が閉まる音が合図となって、呪縛が解けたかのように生徒たちはオザキの席

の周りに殺到した。
「ちょ、ちょっと！　どういうことよ、あれは⁉」
新聞部部員の樋ケ(ひのけ)が、ボイスレコーダーを突き出しながらオザキを詰問する。ボイスレコーダーの電源が入っていないことに気がつかないくらい、彼女は動揺していた。
「一体何があったのよ⁉」
スピカはオザキの襟首(えりくび)をつかんで揺さぶる。
「ス、スピカちゃん、落ち着いて」
ガーネットが動転するスピカをなんとか宥(なだ)めようとしていた。
「アリせんせーが壊れたー！」
ミラも驚きを隠せないでいる。
他の誰よりもアリデッドとのつながりが深い魔女(エトワール)たちとしては、アリデッドのあの変化を易々と受け入れられなくて当然だった。
四方八方から質問責めにされたオザキだったが、明快な答えは返せなかった。オザキにも何がどうなっているのか分からないのだから仕方がない。
昨晩アリデッドが適当にブレンドしたドリンクが原因であなったなど、オザキを含め生徒たちが知る由もなかった。
この後、アリデッドと接触した沖(おき)や日下部(くさかべ)が教室に駆け込んできて、オザキは散々問

い詰められることとなった。

授業が終わり、帰宅したオザキは、憔悴し切った様子でベッドに倒れ込んだ。何度も同じ質問を繰り返され、あげくあらぬ噂を立てられるなど、オザキにとって散々な一日だった。

宮本だけは「スーツに包まれたオッパイもいい」などと言って、いつもと変わらなかったが。

そうして、いつの間にかウトウトしていたオザキは、鼻孔をくすぐる香りに空腹を刺激されて目を覚ました。

匂いのもとを辿って部屋を出る。

リビングに行くと、エプロン姿のアリデッドがテーブルの上に料理を並べているところだった。

「あ、丁度よかった。今起こしに行こうかと思っていたの」

アリデッドが作ったらしい夕食の献立は、サラダとハンバーグ。ソースがかかったハンバーグは、色といい香りといい、大いに食欲をそそった。

普段のアリデッドからは想像もつかないほどまともな食卓に、腹の虫も騒ぐ。

朝と同じように向かい合ってテーブルに座ると、オザキは早速ハンバーグに箸をつけ

る。それは見た目を裏切らぬ美味さだった。
食べ終わると、いつもとちがう環境に、二人でいることにだんだんと居心地が悪くなる。そそくさと自室に戻ろうとするオザキをアリデッドが呼び止めた。
「ねえ、お願いがあるんだけど」
「な……なんでしょう？」
オザキは身を引き気味に尋ねる。
「実は一緒に映画を見て欲しいの」
アリデッドの手にはＤＶＤのパッケージがある。
夜になると映画を見るというところは、以前のアリデッドと変わっていなくて、オザキは心のどこかでホッとした。
「別にいいけど」
オザキが承諾すると、アリデッドはパッと顔を輝かせた。
「よかった。ホラー映画だから、一人で見るのが怖かったの」
――前言撤回。やっぱり以前のアリデッドと全然違う。
オザキは顔を引きつらせながら、アリデッドと並んで座って映画の鑑賞を始めた。
ＤＶＤのパッケージを手に取り裏側の解説を読むと、海底基地で人食いマンタに襲われるという内容らしい。シュールな話だとオザキは思った。

映画を見始めて一時間ほど経った頃、ふいにオザキの右肩に重さが加わった。
横を向くと、すぐ目の前にアリデッドの顔があった。
「……っ！」
オザキは思わず出そうになった声を飲み込む。
どうやら映画の鑑賞中に眠ってしまったらしく、オザキにもたれかかっていたのだ。
「お、おい……起きろ」
とにかく起こそうと左手を伸ばしたが、それより早くアリデッドの体勢が崩れ、ちょうどオザキが膝枕をしているような状態になってしまう。
「ちょ……ちょっと待て……」
何とも気恥ずかしいこの状況に、オザキは無駄に緊張してしまい、指先が石膏のように固まってしまった。
膝の上で穏やかな寝息を立て、気持ち良さそうに眠っているアリデッドを見ると、なんだか起こすのも忍びなくなってくる。
普段の性格がねじれまくったままのアリデッドなら、膝の上にある頭を床に放り投げてもオザキは平気だったろう。
しかし今のように真面目で温和だと、強引な手段が躊躇われてしまう。
テレビモニターに流れている映画は、マンタがテレパシーで話しかけてきたり、実は

マンタが宇宙人だったり、最後まで誰も食べられなかったりと衝撃的な展開をしていたが、オザキの記憶には一切残らなかった。

オザキはガチガチに固まったまま、アリデッドを起こすこともできずに朝を迎えた。

「ん……」

窓から入ってくる朝日の光に、アリデッドはまぶたを開ける。

「やっと起きてくれたか……」

結局一睡もできなかったオザキは、目の下にくまを作ってホッと一息つく。

アリデッドは体を起こすと、オザキの顔をまじまじと見つめる。

「なんで……」

「え？」

何か言いかけたアリデッドに、オザキが問い返そうとした次の瞬間、アリデッドの顔が般若(はんにゃ)へと変わった。

「なんでテメーが寝ているアタシの傍(そば)に居やがる！」

それはいつものアリデッドの怒声だった。

「え？　ええ？」

オザキはアリデッドの豹変ぶりに戸惑う。

何秒か間を置いてから、ようやくアリデッドが元に戻ったのだと気がついた。

「さてはテメー、アタシを襲う気だったんだな！　そうなんだろ！　このケダモノが！」

アリデッドはいつの間にか黒い彗（ほうき）を手に取って構えていた。

「ちょ、ちょっと待て！」

いつものアリデッドだということは、今の状況は非常にまずい。情け容赦なく殺されてもおかしくない。

「ぶっ殺す」

思った通りアリデッドは殺（や）る気満々だった。

オザキはとにかく逃げようとして立ち上がったが、長時間膝を貸していたせいで足が痺れており、バランスを崩してしまった。

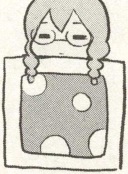
「うわっ」

前のめりに倒れそうになったオザキは、反射的に手を伸ばして指先が触れたものをつかみ、転倒を防ごうとした。

その時とっさにつかんだのはアリデッドのズボン。しかも転んだ勢いでそれを下まで引きずり下ろしてしまう。

まさしく決定打であった。

十秒後、オザキの意識は黒いリネアの奔流（ほんりゅう）に飲まれ、遠い世界へと旅立っていった。



「乳ヒーロー誕生」

意識の暗闇を抜け出し、目を開くと、高い天井が瞳に映った。
「知らない天井だ……」
頭に靄がかかっているような状態で、宮本は無意識にそんな言葉を呟いた。
自分が今、固いベッドの上に仰向けに寝かされているのは自覚できた。だがその経緯がまるで浮かんでこない。
「お目覚めですかの？」
「どわ！」
初老の男にいきなり上から覗きこまれ、宮本は思わずベッドから転がり落ちた。
「いってー……」
宮本は床に打った頭をさすりながら体を起こす。頭部に受けたショックで意識が完全に覚醒していた。
「おっと、驚かせてしまいましたかのう」
「……二郎さん？」
初老の男は宮本の知っている人物だった。

魔女ミラの祖父、襟在二郎だ。ミラと宮本はクラスメイトであり、また草野球でともに汗を流す仲でもあった。
「あれ……？　ここは……？」
宮本は周囲を見回す。
様々な機材や戦車のようなものがあり、軍隊の格納庫のようにも見える。
「ここは我が家の地下秘密基地！　地球防衛隊の最前線ですじゃ！」
二郎はそう言って大声で笑った。
二郎の性格をある程度知っていた宮本は特に驚かなかったが、なぜ自分がここにいるのかが分からない。
「あの、オレ――」
「実は今日、宮本くんに足を運んでもらったのは理由があるのですじゃ！」
宮本のセリフを遮るように二郎が言う。
自分の意思で足を運んだ覚えのない宮本は、何とも言えない表情をした。
二郎は宮本の目の前に、白く分厚い布のような物を突きつける。
「まずは触ってみてくだされ」
宮本は嫌だと思いつつも、言われた通りその布を触る。
「こ、これは……！」

一瞬で宮本の顔に驚きが広がった。

「この柔らかさ、指に吸いつくような感触、思わず指先を一流ピアニストのように情熱的に動かしてしまう優しさ、原始から受け継がれてきた記憶のゆりかご、荒ぶる雄の本能を丸ごと受け止める包容力……。ま、間違いない……オッパイの感触だ！」

宮本の感動の咆哮（ほうこう）が地下を揺らした。

「ふむ、さすがにワシが見込んだ人物ですな」

ゆるみきった顔でオッパイの感触のする布に頬ずりしている宮本を見ながら、二郎は満足げに頷いた。

「こんな素敵なアイテムがこの世にあったなんて……オレは知らなかった！　無知は罪！　しかし乳房の前ではあえて無恥！」

感激の涙を流し続ける宮本の肩を、二郎が優しく叩いた。

「それはワシが開発した衝撃吸収素材、『デストラクション・バストゥアー』ですじゃ」

「衝撃吸収素材？」

「さよう。悪魔（ゾディアック）との戦いに備えて、日夜問わず研究を続け、先日ついに完成したんですじゃ！」

「それがなぜオッパイの感触に？」

宮本に問われ、二郎は遠い目で語り始めた。

「あれはワシがミラに隠れてこっそり深夜番組を見ていた時のことですじゃ。その番組の中で、若い女子がビーチバレーをしておりましてのう。その中の一人が、ボールをその豊満な乳房で打ち返すという荒技をやってみせましたのじゃ。それがワシにとって天啓となったのですじゃ」

「な、なるほど！　すごく納得できました！」

宮本は尊敬の熱い眼差しを二郎に向けた。

「そしてワシはついに完成させたのですじゃ。『デストラクション・バストゥアー』を使用したバトルヒーロースーツを！」

「おお！　ヒーロースーツ！」

「それを着て悪と戦うヒーローに選ばれたのが――宮本くん、君というわけですじゃ」

それにはさすがの宮本も驚く。

「オ、オレっすか？　でもオレ、何の力もない一般人ですよ？」

謙遜でも何でもなく、宮本はただの学生である。魔女たちのような突出した戦闘技能など何も持っていなかった。

「いや、それは違いますぞ。君はただの一般人ではない。オッパイを愛し、オッパイとともに生き、オッパイに生涯を捧げるために生まれてきた天然自然のパイオツニア、宮本武ですじゃ」

「そ、それは……」
宮本は反論できない。言われた通りそのままだからだ。
「この『デストラクション・バストゥアー』は女性の胸部と同じ柔らかさを再現した物。オッパイへの情熱無き者に使いこなすことは到底出来ませぬ」
「だからオレを……」
二郎は宮本の手を握る。
「伊都夏市(いとげ)の平和のために、やってくれますな?」
少しの間逡巡(しゅんじゅん)した宮本は、やがて二郎の手を力強く握り返した。
「伊都夏市に生きる全ての女性のオッパイを守るためなら……!」
「宮本くん!」
「二郎さん!」
正義(?)に燃える二人はがっしりと抱き合った。
「ところでどうしてオレは気を失って、ここに運ばれてたんですか?」
早速試着、という運びの中宮本がふと思い出した疑問を尋ねる。
「む? ヒーローが改造手術を受ける時はそういうもんじゃろう? だからワシがちょいとクロロフォルムを宮本くんに嗅(か)がせたんじゃよ」
二郎はさも当然であるかのようにそう答えたのだった。

「おお……」

ヒーロースーツに身を包んだ宮本を見て、二郎は感動に打ち震える。

スーツは頭まですっぽりかぶれる白い全身タイツにしか見えず、一昔前のコントに出てきそうな感じだったが、二郎はいたく満足していた。

一方、スーツを着ている宮本本人は、恍惚の表情で天を仰いでいた。

「素晴らしい……。まるでオッパイに包まれているかのようだ……。オッパイはあらゆる外敵から我が子を守る偉大なる母のイージスの盾だ……！　天よ、我を赦したまえ」

全身に伝わるスーツの感触で、宮本は悟りを開いていた。

と、そこへ空襲を伝えるサイレンが鳴り響いた。

「来おったか……！」

二郎の表情が引き締まる。

「二郎さん！」

宮本が覚悟を決めた男の顔を二郎に向ける。

「うむ、ゆけい！　君は今日から伊都夏市を守るヒーロー、バストマンじゃ！」

宮本は力強く頷く。

「バストマン宮本武、これより悪魔と魔女との戦いに武力介入を行う！」

宮本は地下基地のカタパルトに自らの体をセットすると、背中のロケット装置のスイッチを押す。その推進力とカタパルトの勢いで空へと飛び出した。

天高く昇る黒い煙で、戦闘場所はすぐにわかる。

「待ってろよ、ミラ、スピカ、ガーネット！」

宮本は最大速度で現場へ向かう。

三色の輝きが空を駆け、不可視の敵と戦っている姿が見えてきた。

「うおおおおおお！　オレがオッパイだ！」

魂の叫びを迸らせると、宮本はその戦いの中心へと飛び込んでいった。

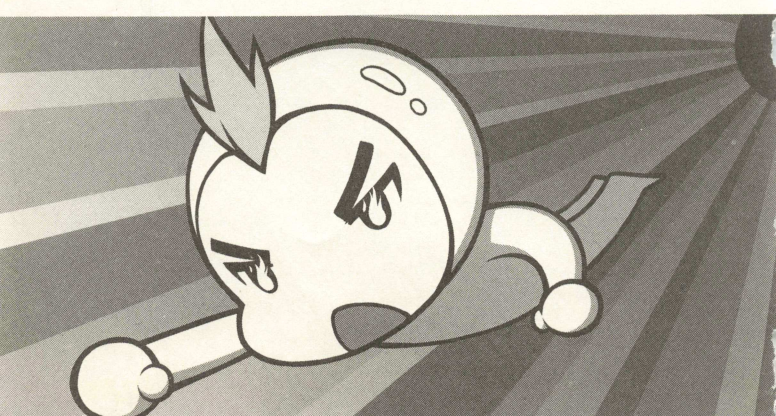
そして――。

ぽよよーん。

間抜けな音とともに、バストマンこと宮本武は弾き飛ばされ、郊外へと消えていった。

「ガーネット、今何か飛んでった？」

「いえ、気付きませんでしたが」



「スーちゃん、敵がそっちいくよ!」
「了解! さっさと終わらせちゃいましょ!」
この後、魔女たちは見事なコンビネーションで悪魔を撃退したのだった。
めでたし、めでたし、めでたし。

あ、宮本くんはスーツのおかげで無事でした。

「ネコまっしぐら」

襟在二郎。自称正義のマッドサイエンティストにして、魔女ミラの祖父である。二郎は科学者として、日々研究と発明に明け暮れていた。

その日も、以前作った発明品を改良し、強化版を作っていた。

「ふう」

二郎は工具を作業台に置くと、額の汗を拭う。

「ふっふっふっ……完成ですじゃ！」

二郎は作業台の上の発明品を見て、満足そうに笑った。

そこにあるのは、ネコミミのついたカチューシャ。

これは、少し前に沖姫々に頼まれて作ったものであった。

伊都夏大学園の文化祭で、生徒会はメイド喫茶をすることになったのだが、ネコミミメイドに扮した沖が語尾に「にゃ」をつけて上手く喋ることができなかった。

最後の手段として二郎に知恵を借りに来たのだが、その時開発したのが、この「自然と猫語が喋れてしまうネコミミカチューシャ」だった。

沖はこのカチューシャを装着することで、何とか文化祭を乗り切った。

そうして返却されたこのカチューシャを、二郎は気まぐれに手を加え、性能を強化したのだ。
パワーアップしたこのカチューシャは、もう猫語を喋るどころではない。まるで猫そのものになりきってしまうのであった。
なぜわざわざそんなふうに改造したのか。
実は理由などない。思いついたので手を加えてみた、ただそれだけである。
こうして、今日も何の役に立つのか分からない発明品がまた一つ、二郎の秘密基地へと蓄えられた。

珍妙な外観の家の前で、沖は暗い顔をしてため息をついていた。
「まさか、また二郎殿に頼らねばならぬとは……」
オカルト嫌いの沖としては甚だ不本意であったが、事態が事態であるため、そうも言っていられない。
問題が起きたのは、数日前のことだった。
沖のもとに、近々喫茶店を開くという男が訪ねてきたのだ。
その男は会うなり土下座をし、自分の店のＣＭに出て欲しいと頼んできたのだ。
話を聞くと、男は伊都夏大学園の文化祭に足を運んだ際、沖のネコミミメイド姿を見

て、これしかないと思ったのだという。
つまり、その男の開く喫茶店とはメイドカフェだった。
最初は固辞した沖だったが、男の情熱と説得に抗しきれず、最後は折れてしまった。
引き受けたはいいものの、素のままではうまく猫語が喋れない。故に、再びあのネコミミカチューシャの力が必要となったのだ。
「これもまた、伊都夏市民のためだ」
自分をそう納得させると、二郎に会うべく呼び鈴を鳴らした。
二郎は沖を地下室に通すと椅子を用意し、散らかっていた作業台を片付けると、テーブル代わりにして座ってもらった。
「して、本日はどのようなご用件ですかな？」
「うむ、それなのだが……」
沖が言いにくそうにしながらも切り出そうとすると、突然二郎が大声を出した。
「ああー！」
沖はビックリした顔で二郎を見る。
「ど、どうなされた？」
「いやー、申し訳ない。ワシとしたことが、お客様にお茶もお出ししておりませぬとは。

失礼しましたですじゃ」
二郎はそう言って詫びる。
「……気遣いは無用に願おう」
沖が疲れたような顔をして言うと、二郎は首を左右に振った。
「いやいや。そういうわけにはまいりませぬぞ。ちょうど上質なお茶が手に入りましてな。腕によりをかけて淹れてきますぞ！」
そう言うと、二郎は返事もそこそこに、老人とは思えぬ俊敏な動きで地下室から出ていった。
「せわしい御仁だ……」
沖は苦笑混じりに呟いた。
二郎が戻ってくるのを待っていた沖だったが、ふと作業台の横に目をやると、置いてあるカチューシャに気がついた。
「これは……あの時の髪留めか？」
沖はカチューシャを手に取って確認する。
「ふむ、やはり同じ物のようだ」
これなら話は早く済みそうだ。あとは二郎に事情を話してこれを借りる許可をもらえばいい。

「壊れたり、電池切れはしておらぬよな？」
沖は正常に作動するか確認しようと、深く考えずそれを頭に装着してしまった。

「お待たせしましたですじゃ」
二郎がトレーにティーカップとお茶菓子を載せて地下室に戻ってくると、作業台の上で四つん這いになっている沖が目に入った。
「沖君……？」
いつもの沖とは思えぬ不可解な行動に、二郎の顔に疑問符が浮かぶ。
沖は四つん這いのまま二郎の方を見ると、
「にゃあ」
と一声鳴いた。
「こ、これは……!?」
二郎は沖の頭を見てすべて理解した。
「あ、あのカチューシャをつけてしまったのですか！」
「みぃ」
沖は返事をするように鳴く。
「おお、すっかり猫になりきっておる。さすがワシの発明は完璧ですじゃ」

ネコミミカチューシャの効果を見て、二郎は状況も忘れて自画自賛した。
「ですが、このままにしておくわけにはいきませんからな」
二郎が近づくと、猫化した沖は警戒したのか飛び跳ねるように下がって距離をとった。
「沖君、大人しくしてもらわないと困りますぞ」
二郎はじりじりと近づこうとするが、沖は「ふぅー！」と威嚇するような声を出しながら、一定の距離を保ち続ける。
「こうなったら最終兵器を登場させるしかありませんな」
そう言いながら道具箱の中から、猫じゃらしを取り出す。
「ほーれほーれ。沖君、こっちですぞ」
二郎が猫じゃらしを振ると、最初は無視をしていたものの、だんだんと興味をそそられたのかゆっくりと近づいてくる。
「そうそう。楽しいおもちゃですぞ」
「ふみぃ……」
近くまで来た沖は、揺れている猫じゃらしの先端に手を出す。その仕草はまさに猫そのものだった。
「よし、今のうちですじゃ……」
猫じゃらしに夢中になっている隙に、二郎は沖の頭に手を伸ばす。カチューシャさえ

外してしまえば、沖は元に戻るはずなのだ。
カチューシャに二郎の指が触れそうになった瞬間、気配を察した沖が大きく後ろに飛び退く。身体的なポテンシャルが高い沖は、本物の猫顔負けの動きを見せた。
「むう、あと少しというところで……！」
一連のことですっかり二郎に警戒心を抱いてしまった沖は、開きっぱなしだったドアの隙間から逃げてしまった。
「ああ！　こりゃいかん！」
二郎は慌てて追いかけたが、沖は家の外に出てしまったらしく、辺りを見渡してもどこにも姿が見当たらない。
二郎は自宅の玄関の前で渋い顔をする。
「まあ、あれは効果が強力な分バッテリーが切れるのも早いわけじゃし、じきに戻ってくるじゃろう」
おそらく捜して見つけるよりも、カチューシャのバッテリーが切れる方が早い。そう判断した二郎は、玄関を開けて家の中に戻った。
もうすぐミラに録画を頼まれている特撮番組があるのだ。
伊都夏市内の小さな公園で、オザキはベンチに座って空を見上げていた。

公園の中は誰もおらず、ゆったり過ごすには丁度よかった。

たまにはこうして喧騒から離れるのもいいものだと、オザキはだらりと足を投げ出す。

仰ぎ見る空の上。どこまでも青く、果てしなく高い。そこから自分がこのセカイに落ちてきたのだと思うと、なんとも不思議な気分だった。

そんなふうに、どこか感傷的な気分で空を見上げていると、唐突に膝の上に重さを感じた。

「何だ？」

視線を下に向けてオザキは目玉が飛び出んばかりに驚く。膝の上には、丸まった沖がいた。

「お、沖⁉」

オザキが狼狽した声を出すと、沖は顔を上げてオザキを見ながら「にゃあ」と鳴いた。

「は？　え？」

何がどうなっているのかさっぱり分からない。

「ちょ、ちょっと待て！」

オザキは気が動転しつつも、ひとまず沖を膝の上からどかそうとした。

しかし沖の体に触れると、

「み！」

と怒ったような声を出して、その場から動くことを拒絶する。
「おいおい……」
オザキは困惑し切った表情で頬をかいた。どうにも動いてくれそうにない。
沖はどうやらオザキの膝の上が気に入っているらしく、丸くなったまま気持ち良さそうにゴロゴロ言っている。
「まるで猫だな」
そう思ってから、ようやく沖の頭にあるネコミミに気がついた。
「これは……？」
どうして沖がこんな物を身につけているのだろうか。
「まさか……」
何となく勘が働き、オザキはカチューシャをそっと沖の頭から外す。
すると、沖の体が一瞬硬直したかと思うと、いきなり人間らしい動きになった。
「こ、これは……!?」
沖は自分の状況に気付き、ベンチから転がり落ちるようにしてオザキから離れる。
「正気に戻った……。やっぱりこれが原因か」
オザキはカチューシャをまじまじと眺める。どうせこんなくだらないものを作るのは二郎しかいない。

「お、沖は一体何をしていたのだ……？」
沖は自分の身に何が起こったのかよく分かっていない様子だった。
「あんまり深く考えない方がいいぞ」
軽い口調で言ったオザキを、沖がキッと睨んだ。
「オザキ……貴様、沖に何をした？」
「え？　オレ？」
いきなり怒りの矛先を向けられ、オザキは一瞬たじろく。
「なぜ沖が貴様の膝の上にいたのだ！」
何か誤解があるらしく、柳眉を逆立てる沖に、オザキは命の危険を感じた。
「い、いや、それはこれのせいだって！」
オザキは慌てて沖に手に持ったカチューシャを見せる。
「それに何の関係が？」
「多分、これをつけると猫みたいな行動をとっちまうんだと思う」
「そんな馬鹿なことがあるものか」
沖はまったく信じていなかった。猫化した影響で、二郎と会う前後の記憶が綺麗に無くなっていたのだ。
「だ、だったら、オレが身につけて証明してやる！」

身の証を立てるため、オザキはカチューシャを自らの頭に装着した。
しかし、台詞に反して、オザキには何の変化も訪れない。
「あ、あれ？」
焦りながら何度もカチューシャをつけたり外したりと繰り返すものの、やはり何も起こらない。
オザキは知る由もなかったが、カチューシャのバッテリーが丁度切れてしまったのである。
「嘘をついて誤魔化そうとは、見下げ果てたぞ、オザキ！」
「い、いや！　違うんだってば！　だ、大体沖が勝手に俺の膝の上に乗ってきたんだぞ！」
「沖はそのようにふしだらではない！」
沖は薙刀（なぎなた）を構え、切っ先をオザキに向けた。
「ほ、本当に誤解なんだよ！」
オザキの必死な釈明も、沖には届かなかった。
「貴様のような男は、沖が修正してやる。動かず歯を食いしばれ」
言われなくても、沖が膝の上に乗っていたせいで足の感覚が損なわれていた。逃げようにも這うようにしか動くことができない。

「な、なぜこんなことに⁉」

この世の理不尽を呪ったオザキは、沖の教育的一撃により星になった。

さらに翌日、いつの間に撮ったのか、沖がオザキの膝の上にいる写真が伊都夏校内新聞に掲載され、しばらくの間、「ネコミミスト」なる不名誉な称号と共にスピカたちに大変冷たい目で見られてしまうこととなった。

「スマガハザード　～ラストエスケープ～」

星の輝きと街の灯りに包まれる空を、魔女スピカは彗(ほうき)に乗って飛んでいた。

夜気に冷やされた風が肌に心地良く、スピカはなびく髪をゆっくりと撫でた。

こうして空を駆けていると、心にある鬱屈(うっくつ)したものや、体に残る疲れが癒されていくような気がする。

そんなことを思いながら伊都夏(いとげ)市郊外の上空に差し掛かった頃、スピカのポケットからスルリとスターリットがこぼれ出てしまった。

「あっ」

スターリットはリネアを使った星型の通信機で、カルデアに所属する人間にとって、なくてはならない物だ。

スピカは落下するスターリットを追って、彗の先を地上に向ける。

地面に落ちる前にスターリットをキャッチすると、すれすれで急制動をかけ、地表への激突を避けた。

安堵のため息をついてから、視線を上げる。

地面から一メートルにも満たない高さで浮いているスピカの目の前に、古ぼけた洋館

いるように見える。人の住んでいるような気配はなく、無人になって長いのか廃墟と化しての姿があった。

　スピカはふと学校で聞いた話を思い出す。

　語っていたのはクラスメイトの宮本だった。

「最近、郊外の廃屋になってる屋敷でさ、謎の生物の目撃情報があるんだよ。世にも恐ろしい姿をしてるらしいぜ」

　その手の話が苦手なスピカは聞きたくなかったが、近くにいたためイヤでも耳に入ってしまった。考え始めると怖くなってしまうので、バカバカしい与太話と思いこみ、心の中で忘却処理を始めていたのだ。

　夜にそれっぽい場所でその話を思い出してしまったことは、スピカにとって痛恨の極みに他ならない。

「伊都夏市の郊外って、人の住んでいない家いっぱいあるし。ここがそうだって決まったわけじゃないし」

　スピカはそう呟いて湧きあがる恐怖心を誤魔化し、一秒でも早くその場から離れるべく空に上がろうとした。

　その瞬間、スピカは見てしまった。

　屋敷の二階にある窓の向こうに、恐ろしい姿をした怪物がいるのを。

「…………っ！」

膨れ上がる恐怖で心が壊れる前に、スピカの脳は意識を手放すことを選択した。

翌日、目の下にくまを作りどんよりした顔で登校してきたスピカは、弱々しい声で宮本に話しかけた。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？　何だ？」

「アンタが話してた廃屋で怪物が目撃されてるってアレ、詳しく聞かせてもらえない？」

宮本は不思議そうにスピカを見る。

「そりゃかまわないけど……どうかしたのか？　顔色悪いぜ」

「な、なんでもないわよ」

スピカは強気ぶって誤魔化す。

「見ちゃったのね？」

「うわあ⁉」

いきなり後ろから声をかけられ、スピカは思わず飛び上がる。

振り向くと、そこにいたのはクラスメイトの樋ケだった。

「ちょ、ちょっと、驚かさないでよ」

スピカが怒ったように言うと、樋ヶは哀れみのこもった視線を投げる。
「その過剰な反応、それに今の話、間違いないわね。スピカ、あなた例の廃屋の怪物を見ちゃったんでしょう?」
「う……」
ズバリ言い当てられ、スピカは言葉に詰まる。
噂の怪物を目撃したスピカは、恐怖のあまり気絶してしまい、気がついた時には自室のベッドの上だった。スピカの家に仕える執事の襟在一郎（きんざいいちろう）が、倒れているスピカを発見して連れて帰ったのだ。
樋ヶは軽く頭を振る。
「かわいそうに……。あの怪物を見た者には、呪いがかかると言われているわ」
「の、呪い!?」
不穏な言葉にスピカは身を竦（すく）めた。
「そうよ。怪物の噂は私たち新聞部も当然耳にしてるもの。それで、色々と調べてるんだけどね、目撃者はみんな不幸な目にあってるの。それこそ呪いをかけられたとしか思えないような、ね」
「ふ、不幸な目って?」
「例えば、コーヒーに入れる砂糖を塩と間違えたり、財布を落としたり、タンスの角に

足の小指をぶつけたり……」

宮本は、それは日常によくあるドジな話ではないのかと思ったが、とりあえず話の腰を折るまいと黙っておいた。

「そ、そんな……」

恐怖のあまり冷静な判断力を失っているスピカは、もはや涙目になっていた。

「けど、呪いを解く方法が一つだけあるの」

「え⁉ ど、どうすればいいの⁉」

樋ケが示すわずかな光明に、スピカは必死の形相で食らいつく。

「それはあの怪物を捕まえることよ。そうすれば呪いが解けると言われているわ」

「あ、あれを捕まえるの⁉」

スピカの脳裏に昨晩の記憶が蘇る。暗くて細部までは分からなかったが、闇の中で見たあの瞳の赤い光は、この世のものとは思えなかった。思い出しただけでも体に震えが走る。

「む、無理よ、あんなの」

「いいの？ 呪いをかけられた目撃者の中には、熱が出て何日も寝込んだり、目が痒(かゆ)くなって涙と鼻水が止まらなくなった人もいるのよ」

「いやあ！」

スピカは耳をふさいで続きを聞くことを拒んだ。
宮本は、それって風邪とか花粉症じゃないのかと思ったが、何だか盛り上がってるみたいなので、口を出すのはやめておいた。

放課後、スピカはあの怪物を目撃した廃屋の前に立っていた。
「ここが怪物の巣かー！」
ミラが興奮した様子で廃屋を見上げる。
「立派なお屋敷なのに、もったいないなぁ」
ガーネットはそんな感想を述べた。
弱り果てたスピカが魔女の仲間に相談したところ、ならばみんなで捕まえに行こうという話へと進んでいったのだ。
ただ、ミラは単純に好奇心だったが、ガーネットは悪魔との関連を憂慮していた。
「結構雰囲気あるわね」
樋ヶが廃屋を写真に収めている。新聞部員である彼女も、取材という名目で一緒についてきていた。
「どんな奴が住んでたんだろうな」
金属バットを持った宮本が、独り言のようにそう言った。宮本は生徒会の執行部とし

て、生徒に害がありそうなものは調査する義務があった。金属バットは万が一のための用心である。
「よっしゃー！　早速突撃だー！」
ミラが張り切って中に入ろうとする。
「ええ!?　もう行くの？」
なかなか踏ん切りのつかないスピカはミラの迅速な行動に躊躇いを見せる。
「ずっと外から眺めてても仕方ないでしょ？」
樋ケもミラに続いて中へ入ろうとしていた。
「で、でも……」
怯えたような顔をしているスピカの肩を、ガーネットが優しく叩いた。
「スピカちゃん。虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うし、それに正体が分からないいまの方が怖いと思わない？」
ガーネットの言うことにも一理ある。幽霊の正体見たり枯れ尾花という諺もあるし、真相は拍子抜けするようなことかもしれない。
「い、いざとなったらリネアでぶっ飛ばしてもいいわよね？」
スピカが訊くと、ガーネットは困ったように微笑した。
「まあ……ほどほどに」

両開きの玄関の扉を開けると、広いホールが目に入った。
「これぞ洋館って感じよね」
樋ヶがシャッターを切りながら言う。
屋敷の中は薄暗く、開いた扉から入り込む風により、埃が舞う。カビの匂いが強く、人が住まなくなってかなりの時が経っていることを感じさせた。
「おじゃましまーす！」
ミラが元気よく挨拶しながら屋敷の中に足を踏み入れる。
スピカはガーネットにくっつくようにして、ミラの後に続いた。
玄関ホールは、正面に二階に続く階段があり、左右には塗装の剥げかけた木製の扉が見える。
「広いお屋敷ですね。お掃除が大変そう」
ガーネットがキョロキョロと見回しながらそんなことを言った。
「確かに広いわね……。二手に別れた方がいいかも」
「え⁉」
樋ヶの言葉にスピカがギョッとなる。
「確かに手分けした方がいいかもしれませんね」

ガーネットも樋ヶに同調する。
「で、でも、ホラー映画とかだと、そういうパターンで一人ずつ……！」
スピカがそう反論すると、樋ヶは呆れたように笑った。
「それはあくまで映画の話でしょ。これだけ広いと、全員固まってちゃ探索にも時間がかかるわ。そうこうしてるうちに日が没むわよ？」
「う……」
それを言われるとスピカは返す言葉がなくなる。今はまだ日の光があるからいいが、夜の闇に閉ざされた状態で、この屋敷内を歩くのは願い下げだった。
「じゃ、決まりね」
確認するように樋ヶが言うと、スピカは不承不承といった感じで頷いた。
「じゃあ、一階は私と宮本で調べるから、二階は三人でよろしく」
その振り分けに異論を唱える者はいなかった。
「それじゃ、また後でな」
組合せが決まると、宮本と樋ヶはそう言って別室に通じる扉の先へと消えていった。
「よーし！　ミラちゃんたちも行くぞー！」
「床が腐ってるかもしれないから、足元には気をつけてね」
「何も出ませんように、何も出ませんように……」

スピカたち三人は階段を上って二階へと向かった。
二階の廊下はまっすぐ奥まで伸びており、壁側には扉が規則正しく並んでいた。所々割れている窓からは、外の光が入ってきている。
「アタシが例の怪物を見たのは、多分この廊下なのよね……」
スピカにとっては可能な限り思い出したくない記憶だった。
「じゃあこの辺りに何か手掛かりがあるかも」
ガーネットの意見にスピカが頷く。
「うん。だから慎重にいこう」
そのスピカの言葉が終わらないうちに、ミラが手近なドアを勢いよく開けた。
「こんにちはー！」
「い、言ってるそばから……」
「平気だよスーちゃん。お化けが出ても、ミラがやっつけるさー！」
ミラは自分の胸をドンと叩いて、無造作に部屋の中に入っていた。
「私たちも行こう、スピカちゃん」
「う、うん」
ガーネットにうながされ、スピカもミラの後に続いて部屋に入る。
部屋はどうやら客室だったようで、ベッドの他は鏡台らしきものとクローゼットくら

いしかない。
そして部屋の中に、先に入ったはずのミラの姿も見あたらなくなっていた。
「あれ……ミラ……？」
「ミラちゃん？」
ガーネットも不審に思い、ミラの姿を部屋の中に探す。
クローゼットを開けたが中は空。ベッドの布団をめくっても、埃が舞いあがっただけでミラの姿はない。
「いない……」
ベッドの下を覗いていたガーネットが、立ち上がって膝についた埃を払った。
「ま、まさか……」
最悪の予想が頭をかすめ、スピカがガタガタと震えだす。
「うーん……これは」
難しい顔をして考え込んでいるガーネットに、スピカはすがるような目を向けた。
「や、やっぱりこれって……！」
「落ち着いて、スピカちゃん。とりあえずスターリットで呼んでみましょう」
ガーネットは青いスターリットを取り出すと、ミラに呼びかけた。
「ミラちゃん、聞こえる？　聞こえたら返事して」

何度か呼びかけてみたが、ミラからの返答はなかった。
「な、なんで⁉」
スピカも自分のスターリットでミラに通信を試みたが、結果は変わらない。
「そ、そんな……」
予想もしない事態にスピカは膝の力が抜け、よろめいて倒れそうになってしまう。
「スピカちゃん、しっかりして！」
あわててガーネットがスピカの肩を抱き止める。
「ミラが……だってミラが……」
青ざめて震えるスピカを、ガーネットが安心させるように抱きしめた。
「まだミラちゃんに何かあったと決まったわけじゃないわ。ひょっとしたら隠れて脅かそうとしてるだけかもしれないでしょ、ね？」
ガーネットの優しい声音に、スピカは幾分か平静さを取り戻した。
「う……うん。そうだよね……」
「とにかく、樋ケさんたちと一旦合流しましょう」
状況を鑑(かんが)みるに、それが一番適切な判断だろう。
そう考えたスピカとガーネットは来た道を戻ると、一階に下りてさきほど二人が入っていった扉を開ける。

扉の向こうは二階と同じような構造の廊下になっていた。

「樋ヶさーん、宮本くーん」

「二人ともどこにいるのー？」

スピカとガーネットは呼びかけながら廊下を進む。しかしどこからも返事は返ってこない。

「ま、まさか二人とも、ミラみたいに……」

「悪い方に考えちゃダメよ、スピカちゃん」

ともすれば挫けそうになるスピカを、ガーネットが励ましながら先へと進む。

慎重に歩いていた二人は、廊下の一番奥の扉がわずかに開いていることに気付いた。

スピカとガーネットは視線を交わし合うと、その隙間から中を覗き見る。

その部屋はどうやら居間らしく、暖炉やソファが設置されていた。

「あれは……」

スピカは床に落ちている金属バットに気がついた。

ゆっくり扉を開けると辺りを警戒しながらそろそろと中に入った。そして落ちている金属バットに近づくとしゃがみこんで確認を行う。

「これって……宮本が持って来てた……」

バットの表面に書かれているメーカーのマークは、宮本が持っていた物と同じだった。

それに家具やソファのように埃をかぶっていない。宮本の持ち物と考えて間違いなさそうだ。

「ど……どうしてここにあるのよ……」

スピカはガーネットに問いかけようと、扉の方へと振り向いた。

しかし、そこにいるはずのガーネットの姿はなかった。

「え……？」

スピカは慌てて室内を見回す。しかしガーネットの姿はどこにも見えない。まさしく煙のように消えてしまっていた。

「う……嘘よ……」

スピカは目の前の現実を何とかして否定しようとする。だが頭の中でどんな理屈を並べたてようとも、現状が変わるわけではない。

「ガーネット！」

スピカは力の限り叫んだ。

しかし反応はまるでない。

スピカは眩暈(めまい)を感じ、足元をふらつかせた。

爪先に何か当たり、視線を下に向ける。

そこには先ほども使用していたガーネットのスターリットが落ちていた。

「イヤ……」

スピカは拒絶するように頭を左右に振る。

その時、軋(きし)んだ音を立ててドアが開いた。

恐怖のあまり機械的な動きでそちらを向く。

そこに立っていたのは、人の形をした何かだった。

人間ではない。人間の肌は灰色ではないし、あんな獣のような顔の造形はしていない。

頭には二本の長い角が生え、体毛はなく、その固そうな皮膚には生命が通っていないかのように見えた。そして赤く光っているその目は、昨夜スピカが目撃したものに間違いない。

スピカは悲鳴を上げることもできず、その場に尻餅をつく。あまりのことに腰が抜けてしまったのだ。

怪物はドスドスと重そうな足音を立てて近づいてくる。

「こ、来ないで……！」

スピカは力の入らぬ手足で必死になって後退するが、すぐに背中に壁がぶつかった。

目の前まで来た怪物は、ゆっくりとその腕を伸ばしてきた。

「っあ……」

その指先が触れる直前に、スピカは意識を失った。

「……様！　お嬢様！」

聞き慣れた声が、現実から逃れるために意識を断ったスピカを呼び起こした。

「ん……」

まぶたを開けると、見知った顔がいくつもあった。

「あれ……爺や……それにガーネット、ミラも……」

「スピカちゃん、よかった……！」

「心配したぞ、スーちゃん！」

ガーネットとミラがスピカの目覚めを喜ぶ。一郎は安堵した表情を見せた。

「えっと……ここは……」

スピカは上半身を起こして視線を巡らせる。どうやら廃屋の外らしい。

「あ、宮本に樋ヶも……」

宮本と樋ヶの二人も、心配そうにスピカを見ていた。

「一時はどうなることかと思ったわよ」

樋ヶが胸をなでおろしながら言う。

「まったくだな。とにかく、これで一安心だ」

そう言って宮本は陽気に笑った。

スピカは現在の状況がいまいち理解できていなかった。
「えーっと……何がどうなってるの……？」
屋敷の中で行方不明になったみんなが、なぜ平気そうに集まっているのか。
「お嬢様、申し訳ありません。すべての原因は私めにあります」
一郎が深々と頭を下げた。
「爺やが……？　どういうことなの？」
「実は、この廃屋には私がしかけたトラップが無数にあるのです」
「爺やの仕掛けたトラップが？」
一郎は元軍人で、とりわけトラップを得意とし、グレムリンと呼ばれ恐れられていたらしい。
「勘を鈍らせぬよう、誰も近づかぬこの廃屋でトラップを仕掛ける訓練をしていたのでございます。それが皆様に作動してしまい、このようなことに」
一郎は申しわけなさそうな顔をする。
「爺やのトラップに引っ掛かって、みんなは無事だったの？」
「はい。万が一誰かが入って来たとしても殺傷しないように、ここに仕掛けたトラップは拘束して自由を奪う程度のものでございますので」
「ミラもぐるぐる巻きにされちゃって、声も出せなかったさー」

ミラが笑いながら言う。スターリットで呼びかけても応答がなかったのはそのためらしい。

「私も落とし穴に引っ掛かったんだけど、はずみでスターリットを落としちゃってスピカちゃんに連絡できなかったの。ごめんね」

ガーネットが申し訳なさそうに言った。

「オレらもまとめてネットに捕まって、天井裏に引っ張り上げられちまったもんな」

「ホント、最悪だったわよ。ずっとコイツと一緒に拘束されてただなんて……もう」

そう言っている割には、樋ヶの顔は緩みっぱなしだった。

「虫の知らせと申しましょうか。何か嫌な予感がいたしましてここへ来てみたところ、皆様が罠に掛かっているところを発見したのでございます。今回のことは、すべて私の不始末です。いかなる処罰も覚悟しております」

一郎はスピカに頭（こうべ）を垂れる。言葉の通り、スピカの裁きがどんなものでも受け入れるつもりのようだった。

「まあまあ、廃墟とはいえ勝手に入ったオレらだって悪いんだし、それに一郎さんが助けてくれなきゃ、どうなってたか分かんないんだし、なあ？」

場をとりなそうとした宮本が、周囲に同意を求めた。

「そうですよ。責任は私たちにもあります」

ガーネットが同調し、樋ケも頷く。
「まあね。簡単にトラップにやられちゃうなんて、まだまだ私も部長に鍛えてもらわなきゃいけないわ」
「そうだー！　いちろーじいちゃは悪くないぞ、スーちゃん！」
ミラも一郎を庇う。
「み、皆様……」
一郎は驚いたように表情を揺らしていた。
スピカは盛大なため息をつく。
「もういいわよ。みんなの言う通り、アタシたちにだって落ち度があったわけだしね」
「お嬢様……」
「今回のことはこれでおしまい。いいわね、爺や」
主人に許され、一郎は深く頭を下げた。
「はっ……寛大な御処置、感謝いたします」
スピカは小さな笑みをこぼす。真相が分かると、なんだか可笑しくなってきてしまった。
「でも爺や、あの変な怪物の人形はやり過ぎじゃない？」
スピカが言うと、一郎は不思議そうな顔をした。
「怪物の人形……何ですかな、それは？」

「何言ってるのよ。あれもトラップなんでしょ。本物みたいによくできてたわね」
「いえ……本当に心当たりがないのですが」
嘘をついているようには見えない一郎に、スピカの笑顔が引っ込む。
「冗談……よね？」
血の気が引いていきたスピカに、一郎は言いにくそうに切り出す。
「実は……私がここに着いた時、お嬢様はすでにこの場で倒れていらっしゃったのでございます。不自然ではあると思っておりましたが……」
「え……あれ……？」
スピカは救いを求めるように他の者の顔も見る。誰もが不思議そうな顔をしている。結託してスピカをかついでいるような気配はなかった。
「じゃあ……あれは……本物……？」
認めたくない現実を処理し切れず、スピカはもう一度意識を手放した。
スピカたちのいる前庭から屋敷を挟んで反対側ある裏庭に、くだんの怪物はいた。
怪物は前屈みになるとしばらくもぞもぞと震え、おもむろに背中が縦に割れると、中から人が出てくる。
「ふう……」

日下部は、怪物の着ぐるみから出ると、息を一つ吐いた。

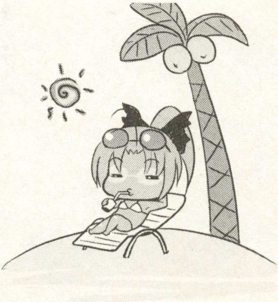
「まさかここでスピカさんたちと鉢合わせするとは……。一郎さんの仕掛けたトラップはこの着ぐるみの性能実験に丁度よかったのですが」

屋敷の中でスピカを見つけた日下部は、近づいて声をかけようとしたのだが、何もしていないのに気絶してしまった。それで仕方なく外に連れ出したところ、一郎がやって来たので身を隠したのだ。

日下部は先ほどまで入っていた着ぐるみを、外から眺めながら小首を傾げる。

「どうしてスピカさんはあんなに怖がったんでしょうか？」

――それが分からない。この着ぐるみのモデルは、ウサギなのに。



「ガーネットの三分間クッキング」

伊都夏市内のとあるスタジオ。そこではキッチンセットが用意され、ガーネットによるお料理番組が始まろうとしていた。
「えーっと、カメラ、もう回ってますか？　あ、はい」
ガーネットは咳払いを一つし、カメラに向かって笑顔を見せる。
「ガーネットの、三分間クッキング」
本人によるタイトルコールの後、アシスタント二人が拍手をした。
「皆さんこんにちは、司会のガーネットです。そして、本日アシスタントを務めてくださる――」
「伊都夏大学園新聞部部長、日下部雨火です」
「同じく新聞部、樋ケ結花です」
二人はカメラに向かってお辞儀をした。
「お二方は豊富な経験をお持ちですので、今回私のアシスタントを引き受けていただきました」
「どうぞよろしく」

「それでガーネット、今日は何を作るの？」

樋ヶの問いに、ガーネットは嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「はい。今日は山菜などを使った、とってもリーズナブルなお料理を紹介しちゃいます」

お金がかからないとなると、つい嬉しくなってしまうガーネットだった。

「ではガーネットさん。まずは材料の紹介から」

日下部に促され、ガーネットはテーブルに広げられた食材を一つ一つ紹介していく。

「まずは山菜から、ワサビの葉、つゆ草、雪下(ゆきした)、蔓菜(つるな)、おらんだがらし、タンポポ、釣鐘人参(つりがねにんじん)。そして今度はこちらのキノコ。サケツバタケ、センボンイチメガサ、以上の品々です」

「これでどんな料理を作るの？」

興味深そうに観察していた樋ヶが問う。

「てんぷらをメインに、おひたしとお味噌汁を作っちゃいます」

「この材料を選んだ理由は？」

日下部が訊くと、ガーネットは眼鏡を光らせた。

「比較的採取しやすい物を選びました」

「へえー、この辺でも採れるの？」

「はい。山や水辺に自生してますよ」

「詳しいわね、ガーネット」

自分にはない知識と樋ヶが感心する。

「は、はい。まあ」

食費を抑えるために、いつも採っているとはさすがに言い出しにくい。

「では早速調理に取り掛かりましょう。何せ三分間クッキングですから」

「あ、そうですね」

日下部に急かされ、ガーネットは手際よく材料を選り分けた。

「では、まずてんぷらから始めます。材料は、ワサビの葉、つゆ草、雪下、蔓菜、釣鐘人参、サケツバタケです」

「ほとんどてんぷらにしちゃうのね？」

「はい。メインディッシュですから」

ガーネットは材料を樋ヶに渡す。

「下ごしらえはしてありますから、てんぷらは任せてもいいですか？」

「オッケー」

樋ヶは二つ返事で引き受けた。彼女は料理が得意という家庭的な一面も持ち合わせているのだ。

「それで、次はどうしますか？」

日下部が尋ねると、ガーネットはコンロに掛けられた鍋を指差した。
「お味噌汁を作りましょう。材料はセンボンイチメガサです」
ガーネットは薄い茶色の小さなキノコを手に取る。
「このセンボンイチメガサは猛毒のコレラタケとよく似ていますので、採取には充分注意してくださいね」
「ちなみに私が採ったキノコがここにあるんだけど」
樋ケが別により分けてあったキノコを取り出した。
ガーネットはそれを見て表情を険しくする。
「それは死の天使とも呼ばれる、ドクツルタケです。食べたら死にます」
「ゲッ、マジで？」
「死にます」
樋ケは少し残念そうな顔をすると、純白のキノコをゴミ箱に捨てた。
ガーネットは鍋に火をかけ、キノコを投げ入れる。
「では日下部さんは鍋を見ていてください」
「いいでしょう」
日下部はガーネットに代わって鍋の前に立つ。
「残った材料はタンポポとおらんだがらしの二つですが、まずタンポポは葉をおひたし

にします」
ガーネットはタンポポの葉を別の鍋に入れ、お湯で煮始める。
「作り方はホウレン草のおひたしと同じでＯＫです」
ガーネットは柔らかくなった葉を鍋から取り出し、水気を切ると皿に盛りつける。醤油をかけると緑の中に陰影ができ、見た目にも深みが加わった。
「はい、これでタンポポのおひたしは出来上がりです。簡単でしょう？」
ガーネットはカメラに向かって微笑みかけた。
「ガーネット、てんぷら出来たわよ」
樋ヶが大皿に載せた山菜とキノコのてんぷらを持ってきた。
「ありがとうございます。それでは、おまけと言っては何ですが、てんぷらのつけあわせにこれを」
ガーネットはてんぷらの横に、唯一残してあった葉をのせた。
「これってクレソン？」
「はい。今はそちらの名前の方が通じやすいかもしれませんね。生のまま食べることができるんですよ」
「てゆうか、見事に葉っぱばっかりね」
「ヘルシーだからいいんですよ」

ガーネットがとり繕うかのようにそう言った。
「お味噌汁もできました」
日下部がコンロの火を止める。
「それじゃあ、試食してみましょう」
三人はそれぞれ分担して、テーブルに料理を並べた。
「山菜とキノコのてんぷら料理、完成です」
ジャーンという効果音の後、日下部と樋ヶが拍手をする。
三人はテーブルにつくと、手を合わせてから料理に箸をつけた。
「あ、美味しい」
樋ヶがてんぷらを食べて素直な感想を口に出す。
「山菜は薬用に使ったりすることも多いですから、健康にもいいですよ」
ガーネットが味噌汁を飲みながら丁寧に説明する。
「ふーん。今度お弁当に入れてみようかな……」
樋ヶの独り言を聞き逃さなかったガーネットの眼鏡の縁が光った。
「男の子には山菜だけじゃ物足りないかも知れませんから、お肉も入れてあげた方がいいですよ」
「んな⁉」

ガーネットのアドバイスに、樋ヶは赤面しながら狼狽する。
「べ、別にタケちゃんに渡すお弁当ってわけじゃあ……！」
「私は一言も宮本くんの名前なんて出してませんよ？」
「あうう……」
ニコニコとしているガーネットに、樋ヶは言葉に詰まった。
そんなことをしていると、ふいにスパイシーな匂いが鼻孔をくすぐり、ガーネットと樋ヶは同時に日下部の方を見た。
「日下部さん、それは……？」
日下部はてんぷらを、いつの間にか用意したカレールーにつけて食べていた。
「部長、おいしいですか……？」
「いけますよ。カレーはさすがに万能です」
「はあ……」
ガーネットと樋ヶは微妙な表情を浮かべる。てんぷらをカレーで食べるというセンスはちょっと理解できそうになかった。
しばらくして樋ヶがある変化に気付いた。
「あれ？」
「どうしました、樋ヶさん？」

「いやね、料理の残りをそこの上に置いといたんだけど、なくなってるのよ」
「え⁉」
ガーネットは立ち上がって周囲を見回す。ほどなくキッチンセットの陰に人影を見つけ、そちらに近づいた。
そこにいた人物の顔を見て、彼女は驚きの声を上げた。
「アリデッド先生⁉」
「もぐもぐ……よう、ガーネット」
カルデアの司令であり伊都夏大学園の教師でもあるアリデッドは、口の中に詰め込んだ料理を缶ビールで流し込んでいた。
「ど、どうしてここに？」
「いやさあ、近くをぶらぶらしてたんだけどよ、なんかうまそうな匂いがしてな。で、つられて来てみればガーネットちゃんがうんまそうな物を作ってるでねーのよ。そんで、いただきます！　ウメェー！　アタシは優秀な教え子を持って幸せだ！　で現在にいたるってわけ」
「そ、そうですか……」
もはや何を言っていいのか分からず、ガーネットはただひきつった笑みを浮かべる。
樋ケが遠慮がちにガーネットの背中に声をかけた。

「まだカメラ回ってるけど、いいの？」
「ああ!? そうだった！ アリデッド先生、今はまずいです！」
「あぁん？ 何だよ、番組の収録中かよ」
アリデッドが面倒くさそうな顔をする。
「そ、そうですよ！」
「じゃあアタシがバシッと締めてやるよ」
「え？」
ガーネットの困惑をよそに、アリデッドはやおら立ち上がるとカメラに向かって缶ビールを持った手を高々と上げた。
「ビールのつまみに最高！」
そのセリフに合わせて、エンディングテーマが流れ始める。
「あ、終わっちゃった」
「こ、こんなのでいいんですか？」
「いいんじゃないですか」
オロオロしているガーネットに、日下部が他人事のように言った。
「ウメー！ 葉っぱウメー！」
上機嫌で飲み続けるアリデッドを映しながら、番組は終わった。

この後、酔っぱらったアリデッドの相手を延々させられたガーネットの苦労は語るまでもない。

C 00:05:37
ON PREMIUM

「カレーなるＣＭ」

薄暗い密室の中、樋ヶ(ひのけ)は大きな鍋をかき回していた。

「部長のカレーは……うふふ、寝かせれば寝かせるほど味が深くなって……」

樋ヶはナンを取り出しカレールーにつける。

「こうやってつけて……うまい！」

チャーチャッチャチャチャー。

チープな効果音とともに、スポットが当たる。

「寝かせておいしい日下部雨火(くさかべあまほ)プロデュース特製ビーフカレー、ニトロプラスダイレクトで好評発売中――」

「樋ヶ特派員」

「うわっひゃ⁉」

気配もなく現れた日下部に、樋ヶは驚いて飛び上がった。

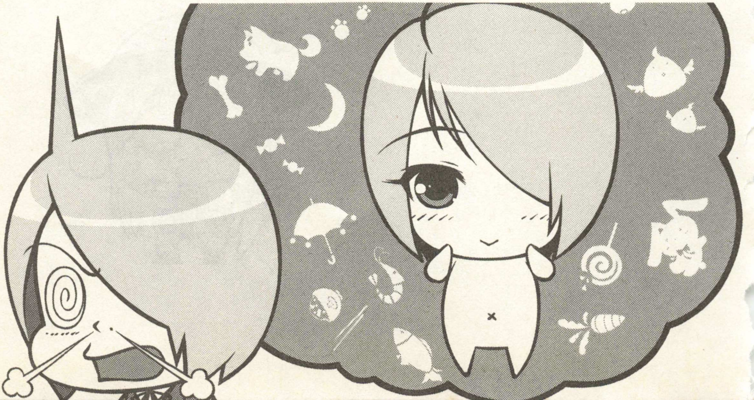
部屋の照明をつけると、部室の一部に暗幕をはっていただけということがありありと分かる。

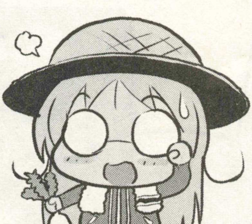
「こんな所で何をしているのですか？」

「いえ、部長印のカレーのＣＭを……」
日下部は樋ヶに手渡されたレトルトカレーの箱をしげしげと見つめる。
「おいしいんですか？」
日下部の問いに、樋ヶは勢い良く頷く。
「はい！　部長特製のカレーの味を、レトルトながらもしっかりと再現してありますから！」
「そうですか……それならいいのですが、問題がひとつ」
「何ですか？」
「私の名前を使っているにもかかわらず、私のもとにはマージンが一切入ってきていません」
「そうなんですか？」
「権利の在り方は明確にしておかないと、後々面倒なことになります」
日下部の瞳が鋭く光る。
「じゃあ、権利料を請求しますか？」
「それでもいいのですが、話がこじれて次回作の出番が減るのもあまり面白くないですからね」
「あ、じゃあ壁紙作ってもらいましょうよ。沖姫々(おききき)みたいに！」

「壁紙ですか？」
樋ヶはさっとパソコンを立ち上げると、ニトロプラスのホームページを開いた。
「ほら、これですよ」
表示された壁紙を見た日下部は、瞬時に顔を真っ赤にする。
「なっ……こ、これは……ロ、ロリ！　沖さんのロリ画像！」
「え？　いや、まあ、確かに幼少時の沖会長ですけど……」
「ま、まさか、私の幼い姿を……は、裸にしたり、沖さんみたいに、は、はかせてなかったり……！」
「ぶ、部長⁉」
「ふ、膨らんでなかったり生えてなかったり、そんな姿を、か、壁紙に……⁉」
「ちょ……落ち着いてください、部長！」
樋ヶは何とか日下部の気を鎮めようとしたが、日下部の妄想は止まらなかった。
「ゆ、許せない……まだあどけない私を、そんな、は、破廉恥な目にあわせようだなんて……！」
日下部はどこからともなく持ちだした消火器を振り上げたまま走りだす。
「ぶ、部長⁉　どこ行くんですかー⁉」
「辱(はずかし)められる前に、ヤってやるー！」

「きゃあああ！　ぶちょおー！　だめだめー！」
樋ヶは暴走する日下部を追い、街へと消えていった。
日下部部長の特製カレー、好評発売中！





「空を見上げて」

屋上へ通じる扉を開けると、気持ちのよい風が吹き抜けていった。
樋ヶ結花(ひのけゆか)は空の下に出て大きく伸びをする。
「んー……やっぱり気分転換には外に出るのが一番ね」
新聞部の部員である彼女は、明日の「伊都夏(いとげ)校内新聞」に載せる記事を執筆している最中で、休憩がてら屋上に出て来たのだ。
「あら？」
樋ヶの視線が屋上の先客に留まる。後ろ姿であっても、間違えることはなかった。
「部長」
背中に声をかけると、新聞部部長、日下部雨火(くさかべあまほ)がゆっくりと振り向いた。
「樋ヶ特派員ですか」
「珍しいですね、なんだかボーっとしてたみたいで。何してたんですか？」
樋ヶが尋ねると、日下部は顔を真上に向けた。
「空を見ていました」
「空……ですか？」

樋ヶが意外そうに顔を向ける。

見上げればそこには青く広い空がある。しかしそれは虚像でしかない。なぜならば、このセカイは天蓋（グレンツェン）という伊都夏市と外とを隔てる壁に、陸も空も完全に覆われているのだ。つまり今現在目にしているのは、あくまで天蓋であって本物の空ではないということになる。

そのことを思うと、樋ヶはこの空の美しさを素直に受け取れなくなる。

「私はこの空の向こうにある真実を確かめたいのです」

日下部が空を眩しそうに見上げながらそう言った。

「空の向こうの真実……」

樋ヶも日下部と同じように天を仰ぐ。

空の向こうとは、天蓋の外のことだろう。

魔女（エトワール）と悪魔（ゾディアック）の戦いがいつ果てるともなく繰り返され、悲劇に満たされたこのセカイ。どうしてこのセカイが生まれたのか、誰も知らない。誰も答えることができない。だからこそ、このセカイの真実には追うべき価値がある。それこそ日下部のように、全てを賭けてでも。

「部長……」

樋ヶは尊敬の念を新たにして、日下部を見つめる。

日下部は空を見上げたまま、これまでのことを思い返していた。
空襲（メテオライト）のあったとある日、悪魔の攻撃によりビルが一棟炎に包まれた。
ビルの中にいたものはほとんど脱出に間に合ったが、男女が一組、燃え盛る炎の中に取り残されていた。
「ああ……太郎さん。私たちこのまま死ぬのね」
「弱音を吐くんじゃない、花子さん！　きっと僕が助けてみせる！」
男はそう言うと、脱出路を求めて炎に飛び込もうとした。
「うわっ！　熱っ！　無理！」
しかし炎の勢いに圧し戻されて、あっさり逃げ戻ってくる。
「無念だ……僕らはここまでのようだよ……」
「太郎さん……」
「でも花子さん。僕は君と一緒に死ねるなら本望さ」
「太郎さん……私も同じよ」
人生の終焉（しゅうえん）を目前に、周囲の炎に負けじと愛を燃え上がらせる二人。
するとそこに、炎の中から緑の珍妙な生物が姿を見せた。
「な、なんだ⁉」

二人は驚きのあまり抱き合うように尻餅をつく。
「断熱能力……耐火性能……ともに基準クリア」
緑の生物――日下部の着ぐるみ――は、炎をものともしない様子で歩いていた。
「ビルが燃えていたのは幸いでしたね。この新型の性能実験をするついでに、いいアングルで魔女と悪魔の戦いの写真を撮ることができました」
日下部は着ぐるみの中で満足そうに一人呟く。
その時になってようやく、日下部は腰を抜かしてこちらを見ている二人に気がついた。
「逃げ遅れたのですか」
「え……あの、その……」
緑のよく分からない着ぐるみに話しかけられ、二人ともまともに舌が回らない。
「あっちの方は火の手が弱いですよ」
日下部は一方向を指差してそれだけ言うと、自分は逆方向に向かい、炎の中に消えていった。
残された二人は、呆然と緑の着ぐるみの後ろ姿を見送ることしかできなかった。
その日は静かな夜だった。
伊都夏市の汐鍋港では、一組の男女が身を寄せ合って波の音を聞いていた。

「静かね、太郎さん」
「そうだね、花子さん。まるで世界に二人きりになったみたいだ」
「波の音が耳に気持ちいいわね……」
「潮騒(しおさい)は僕らへの祝福の言葉だよ、花子さん」
「あん、太郎さんたらロマンチスト」
などとイチャイチャベタベタとしていると、暗い海の中から突然謎の生物が飛び出してきた。
「ひっ⁉」
二人は同時に飛び上がる。
それは以前にも見たことにあるような緑の着ぐるみだった。
「水圧テスト、保温能力テスト、水中推進力テスト、オールクリア」
緑の着ぐるみ——例によって中身は日下部——は、着ぐるみの水中テストを終えて、陸に上がってきたところであった。
上陸後の動作確認を終えた日下部は、着ぐるみの腹部にあるポケットの中から、海中で捕らえた魚を取り出した。
「今夜はシーフードカレーにしますか」
日下部は驚きで固まっている二人には目もくれず、水を滴らせながらその場を去って

いった。

「有袋類(ゆうたいるい)……なのかしら……？」

これまでの性能テストの結果を思い返し、日下部は微笑をこぼす。新型の着ぐるみの出来は上々だった。

その笑みを別の意味でとらえた樋ヶは、嬉しそうな口調で言う。

「大丈夫ですよ。部長ならいつかあの向こうへ行けますって！」

「樋ヶ特派員……」

日下部は樋ヶに頷いて見せた。

再度空を見上げ、日下部は思う。

そう、いつかあの天蓋を超えて――。

重力の鎖から解き放たれ、果てしなく大きな青い球体を眼下に見据(みす)えながら、日下部は最後の試験を終えようとしていた。

「宇宙放射線被曝量、気圧維持、データ衛星とのリンク、すべて問題無し」

新型着ぐるみの最終テストは宇宙空間で行われた。

このテストさえクリアすれば、これ一つでどこへでも取材へ行くことができる。

あらゆる真実を目にしたいと思う日下部の夢に、また一歩近づけるのだ。
宇宙でのテストはほぼ終了した。残すは地上へ帰還するテストだけだ。
日下部は着ぐるみの腹のポケットから布を取り出し、それで体全体を覆う。
「理論上の数値では、この耐熱シートでいけるはず」
日下部は推進剤を噴射し、地球へ向かって進んだ。
重力の圏内に入った日下部は、重力に導かれ、そのまま大気圏へと突入していった。

同時刻、地上では一組の男女が星空を眺めていた。
「星がキレイだね、花子さん」
「本当ね、太郎さん」
「おや、流れ星だよ、花子さん」
「まあ素敵。お願いしなきゃ」
「そうだね。僕も星に願い事を囁(ささや)こう」
そして二人は同時に願い事を口にする。
「太郎さんが幸せでありますように」
「花子さんが幸せでありますように」
二人は顔を見合せて笑った。

「僕らは今、とても素晴らしい恋人同士だよ、花子さん」
「ええ、そうね。太郎さん」
「ところであの流れ星、だんだん大きくなってるような」
「っていうか、近づいてきてない？」
「こ、ここに墜ちてくるぞ！」
「え、ちょ、ちょっと――」
　真っ赤に燃える物体は、見事に二人のいる場所へと落下した。
『うぎゃあああ！』
　二人は爆風に吹き飛ばされ、何事かも分からぬまま気絶する。
　落下の衝撃でできたクレーターの中心から、緑の着ぐるみがゆっくりと立ち上がった。
「地球ですか……。何もかも懐かしいですね」
　そんなことを呟きながら、日下部は夜空を見上げるのだった。

　――と、そこまで妄想して、日下部は口許を綻(ほころ)ばせた。
　果たして残された宇宙でのテストがそう上手くいくかどうか、その「真実」は天蓋の外にある。
「いつか行かねばなりませんね。真実を確かめるために、このセカイの外へ」

「ついていきます、部長！」

微妙な部分でのズレはともかく、真実を追う二人は、この日決意を新たにしたという。

「愛のストーカー～弁当の材料～」

「ハァ……」
自室にて、樋ヶ結花(ひのけゆか)は盛大なため息をついていた。
手には二枚の映画のチケットが握られている。
このチケットを、幼なじみである宮本武(みやもとたけし)に渡そうとして、今日も失敗した。それも三日連続。
手順はいたって簡単なはずだった。
「映画のチケットが手に入ったんだけど、二枚あるから一緒に行かない？」
宮本にそう告げればいいだけだ。彼は深く考えず誘いを受けてくれるだろう。
だがそれができない。
宮本の前に立つと、肝心な用件の前に憎まれ口が先に出てしまう。
どうして自分はこう素直ではないのか。
「ふう……」
樋ヶはもう一度ため息をついた。
幼なじみでいる期間が長すぎたのだろうか。もっと早くに想いを告げていれば、こん

なに悶々とせずに済んだのだろうか。
しかも、樋ヶと宮本はお互い対立している組織に属している。
樋ヶは新聞部部員で、宮本は生徒会の執行部。ジャーナリズムと体制側では相容れぬのもいたしかたない。
「そもそもタケちゃんが鈍すぎるのがいけないのよ……胸にしか興味なさそうなことも言うし……」
樋ヶが自分の意地っ張りを棚に上げて宮本を非難する。宮本はオッパイ大好き人間を公言しており、それが樋ヶの心に壁を作る一因にもなっていた。
「まあ、それは言ってもしょうがないし」
樋ヶは宮本のそういう面も受け入れる覚悟でいた。なかなかの女っぷりである。
「とにかく、明日こそは……！」
樋ヶは固い決意を心に秘め、布団に潜り込んで眠りに落ちた。
そんなわけで翌日、樋ヶは物陰から宮本の動向を探っていた。
いきなり渡そうとするから失敗するのだ。人目があるとつい意固地になってしまうし、じっくりチャンスを狙った方がいい。
そう考えた樋ヶは、新聞部で培った尾行術で、気取られぬように宮本についてまわっ

ていた。
　午後の授業が始まる前の教室。見れば宮本はオザキと何やら話をしていた。
　樋ヶは教室の外からこっそり聞き耳を立てる。
「なあオザキよ。イチゴ大福はオッパイに通じるものがあると思うんだが」
「唐突に何を言い出すんだお前は」
　オザキはあからさまに呆れた顔をする。
「いや、ほらさ、大福って柔らかいじゃないか」
「まあな」
「それに加えてイチゴ大福だとピンクじゃないか」
「ああ」
「乳首って感じがしないか？」
「しない」
　オザキは同意を求める宮本を一太刀に切り捨てた。
「そうかなぁ。あの甘酸っぱい味にはオッパイの奥義が隠されてると思うんだけどな」
「何だよオッパイの奥義って」
「そんなわけでさ、オレは最近イチゴ大福にハマっているわけよ」
　宮本は制服のポケットからイチゴ大福を二つ取り出すと、そのうちの一つをオザキに

渡した。
「人肌にしといたから、温かいうちに食ってくれ」
「大福を温めるな」
文句を言いながらも、オザキは宮本にもらったイチゴ大福を口に入れた。
一連の会話を聞きながら、樋ヶは懸命にメモをっていた。
「なるほど……タケちゃんは今イチゴ大福にハマっている、と……」
頭の中でイチゴ大福の中身の構想を組み立てる。
樋ヶは毎日のように宮本に食べさせるためのお弁当を用意しているのだが、これも映画のチケットと同じくなかなか渡せずにいる。
「おー、ひけー！　かくれんぼかー⁉」
背後からいきなり大きな声をかけられ、樋ヶは飛び上がらんばかりに驚いた。
「まず……！」
樋ヶは宮本の視線がこちらに向く前に、素早くその場を離れる。
「あり……？　ミラ邪魔しちゃったかな？」
脱兎のごとく逃げ出した樋ヶの背中を見送り、ミラがポリポリと頭をかく。
「ま……邪魔は邪魔だったでしょうね」
ミラと一緒にいたスピカは、樋ヶの去っていった方向を見ながら「素直じゃないんだ

から」とでも言いたげに肩を竦めた。

樋ヶのストーキングは、その日一日続いた。

宮本は生徒会の仕事があるためなかなか一人になってくれず、結局学校にいる間は二人きりになるチャンスがなかったのだ。

結局宮本は帰宅の途に就き、樋ヶは今日もチケットを渡しそびれてしまった。

「うう……私ってば今日一日何やってたんだろう……」

落ち込みかけた樋ヶだが、戦利品のことを思い出し気持ちを切り替えた。

「まあ、これはそれなりに収穫だったわよね」

ポケットからメモ帳を取り出し、中身を確認して頬を緩める。

尾行している間集めた情報で、宮本が食べたいもののリストがメモ帳の中に出来上がっていたのだ。

「これを参考にすれば、きっとタケちゃんも私のお弁当を食べてくれるわ」

メモ帳を胸に抱き、そう自分を鼓舞する。

「よし、明日こそ！」

そう心に決めると、準備を行うため家路を急いだ。

宮本と一緒に帰ればチケットを渡す機会はいくらでもあったと気付いたのは、自宅の

玄関をくぐった後だった。

次の日、メモ帳の記述をもとに作ったスペシャル弁当を持参した樋ヶは、呆然(ぼうぜん)と昼のチャイムを聞いていた。

周りの生徒は帰り支度を始めている。

そう、今日の授業は半日で終わりだったのだ。

部活動がある者以外は、学校で昼食をとったりしない。

弁当を作るころだけに集中していた樋ヶは、そのことを綺麗に忘れていた。

宮本の方を見ると、鞄を持って帰ろうとしている。どうやら今日は生徒会の用事もないらしい。

――弁当は無理でも、せめてチケットだけでも渡そう。

そう思って樋ヶは思い切って席を立った。

「タケ……み、宮本――」

「オザキ、一緒に帰ろうぜ」

しかしそれとほぼ同時に、宮本はオザキに声をかけていた。タイミングが重なったため、樋ヶの声は宮本の耳に届いていなかった。

「ああ、別にいいけど、何か用事でもあるのか?」

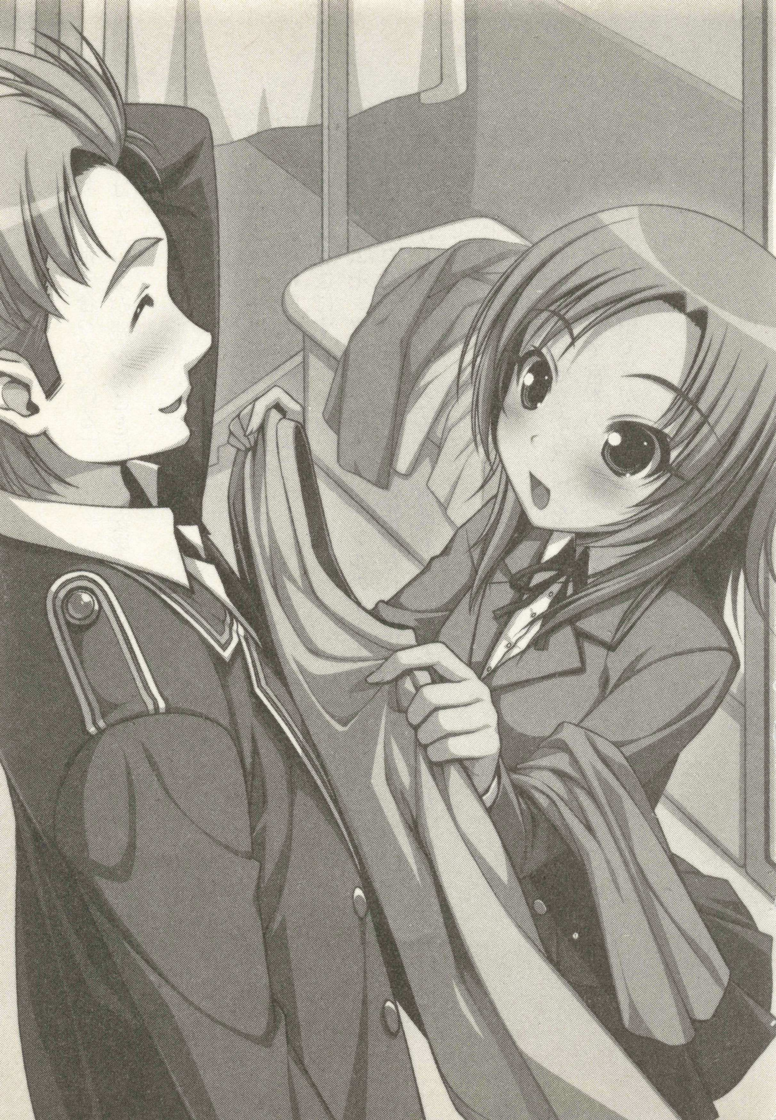
「察しがいいな。さすが義兄弟（マイブラジャー）。買い物に行きたいんだけどさ、一人じゃなんかさみしくてよ」
「しょうがないな。わかっ――」
了承しようとしたオザキの耳を、スピカがいきなり引っ張った。
「いだだ！　な、何するんだよ⁉」
「アンタはこっちに先約があるでしょ」
「せ、先約？　何の話――いだだだだ！」
スピカはオザキにみなまで喋らせず、耳を引っ張ったまま強引に連れていく。
途中、すれ違った樋ヶに一瞬だけ視線を送ると、オザキを連れて教室を出ていった。
「何だ、あれ」
あっという間にオザキを連れ去られた宮本は、首を傾げて頬をポリポリとかいた。
一方、樋ヶにとってはまさに千載一遇の好機だった。
――今を逃せば、またチャンスが遠くなる！
樋ヶは意を決して口を開いた。
「タ、タケちゃん」
「ん、ユカか。どうかしたのか？」
「ユ、ユカって呼ばないでってば！」

思わずいつものようにきつく返してしまい、樋ヶは心の中でしまったと悔いる。しかし宮本は気にした様子もなかった。
「ああ、悪い悪い。で、何か用か？」
「あ、あのね……その……」
樋ヶはチケットを後ろ手に持ったまま、もじもじと次の言葉を継ぐことができない。
「何だよ。らしくないぞ」
「えっと、つまり……」
「うん？」
樋ヶは顔を真っ赤にしながら、決死の覚悟でそれを口に出した。
「わ、私も、買い物があって」
だが、口をついて出た言葉は、予定とは違うものだった。最後の最後、ギリギリのところで逃げをうってしまったのだ。
樋ヶは自己嫌悪でうずくまりたくなった。
しかし――。
「ああ、じゃあ一緒に買い物に行こうぜ」
「へ？」
宮本の言葉に、樋ヶは思わず間抜けな声を出す。

「買い物があるんだろ？　だったら一緒に行こうぜ」
　事態が思わぬ好転を見せ、樋ヶはそのチャンスに飛びついた。
「しょ、しょうがないわね。ついていってあげるわよ」
　口では素っ気なさを装ったが、心の中で樋ヶは小躍りしていた。
　――これでチケットを渡す機会をじっくりうかがえる！
　というわけで、樋ヶと宮本は連れ立って街へと出かけることになった。

　宮本の買い物は洋服だった。
　オシャレをしようと思ったのではなく、ただ単に今までの服が古くなったので新しい物を買いに来たらしい。
「やれやれ。そういうところはもう少し気を遣いなさいよ」
　などと言いながら、樋ヶは宮本に次々と服を持ってくる。
　ああでもないこうでもないと、宮本の体に合わせては他の服を探し、探してはまた合わせる。
「なあ、別にそんなにこだわらなくても」
　宮本としては、普通に着られて見た目がおかしくなければそれでいいのだ。
　しかし樋ヶは断固として譲らなかった。

「ダメ！　服はちゃんと良い物を選ぶ！　アンタはそのあたりが無頓着すぎ！」
女性にそう強く言われてしまっては、男としてはなかなか返す言葉を見つけられない。
「そうかなぁ……」
宮本は曖昧な表情で頭をかいた。
結局、樋ヶが納得するまで試着させられ、彼女から合格が出た服を買わされたのだった。
宮本の服を買った後、二人は家電量販店に向かい、樋ヶがカメラの望遠レンズを購入することになった。
すぐに必要な物というわけでもなかったが、買い物があるから宮本と一緒に来たという大義名分がある以上、何かを買わねばならず、あって困る物ではないからという理由でそれを選んだ。
「さて、買い物も終わったけど、これからどうする？」
店を出た後、宮本がそう尋ねてくる。
樋ヶはまだ映画のチケットを渡せておらず、ここで帰るわけにはいかなかった。
「そ、そうね。まだ日も高いし、どこか寄ってく？」
「おう。じゃあゲーセンでも行こうぜ」
宮本はあっさりのってきた。



「いいわよ。付き合ってあげる」

樋ヶはチャンスが残ったことに内心安堵しながら、宮本とともにゲームセンターへと向かった。

「ふう、結構遊んだなあ」

ゲームセンターを出ると、宮本は大きく伸びをした。

「アンタがムキになるからでしょ」

樋ヶが微笑をこぼす。

二人はゲームセンターで、様々なジャンルのゲームを対戦した。

今日は樋ヶの調子が良く、宮本は終始押されっぱなし。

負けっぱなしでは男がすたると、何度もリベンジを申し込んだが、結局通算では樋ヶが勝ち越していた。

「ちぇ、腕上げたな」

「ま、そういう日もあるわよ」

樋ヶは勝者の余裕を見せながら、肩を叩く。

と、そのタイミングで宮本の腹が鳴った。

「あー、ゲームに夢中で気がつかなかったな。腹が減っちまった」

そう言って腹部をさする。
その言葉を聞いて、樋ヶは鞄の中にある弁当箱を思い出した。
わざとらしい咳払いの後、窺うように言った。
「ね、ねえ。実は、その、お弁当……持ってるんだけど……」
「へ？ 弁当？ なんで持ってるんだよ？」
宮本が不思議そうな顔をする。
「え？ そ、それは、その、つまり、だから……」
宮本に渡すためとは言えない樋ヶは返答に困ってしまう。
「あ、わかった。お前、今日は午前で学校終わりだって忘れてたんだろ？」
「う……うるさいわね！」
樋ヶは真っ赤になって唇を尖らせる。そんな様子を見て、宮本は楽しそうに笑った。
「相変わらずどっか抜けてるな、ユカは」
「タ、タケちゃんに言われたくないわよ！」
「ははは。怒るなって。でも、ちょうどよかった」
「あ……た、食べてくれるの？」
「ん？ 食ってもいいんだろ？」
「う、うん！」

樋ヶは激しいほどの勢いで首を縦に振った。
「じゃあ、どこかで座って食べようぜ」
二人は近場に公園を見つけると、そこのベンチに腰を落ちつけた。
樋ヶは鞄から弁当箱を取り出し、ドキドキしながら宮本に差し出した。
「は、はい、どうぞ」
「お、サンキュー」
弁当箱を受け取って蓋（ふた）を開けると、鮮やかに彩られた弁当箱の中味を見て子供のように瞳を輝かせた。
「おお、なんか美味そうだな」
そんな幼なじみの横顔を見て、樋ヶは小さく息を吐いた。
本来の目的であったはずの、映画のチケットはいまだに渡せていない。
「でもタケちゃんにお弁当食べてもらえたし、まあいいか」
そう思う自分の現金さに、内心で苦笑した。
映画のチケットがなくても、宮本と一緒に過ごすという本懐（ほんかい）を遂げていることには気付いていない。
「いただきまーす」
宮本は弁当箱の中身を箸で口に運ぶ。

数回咀嚼した後、顔色が急変した。
「…………」
青ざめたまま、彫像のように硬直する宮本。
「タケちゃん？」
何が起こったのかと宮本の顔を覗き込むと、幼なじみは泡を吹きながら白目をむいていた。
「ええ⁉　タ、タケちゃん⁉」
樋ヶは驚きのあまり素っ頓狂な声を上げる。
彼女の作った弁当には、宮本をストーキングして調べた嗜好を書いたメモにあるものを全て詰め込んであった。
とにかく食べてもらいたい一心だったため、普段なら行っている食材同士の相性などまったく考えずに調理したのだ。
ちなみにメモの中にはコーラや鷹の爪、味噌汁やドーナツなど多種多様なものが入っていたが、全て材料として使った。
その結果、混沌を極めた想像を絶する味が出来上がっていたのだ。
宮本の唇が痙攣するように動き、か細い声で言葉を紡ぐ。
「あばばばば……川が見える……渡ってみよう……」

「きゃあああ！　タケちゃんそっち逝っちゃダメえええええ！」

旅立ちかけている宮本の魂を、必死でつなぎとめる。

結局その日のことは、宮本とデートできたという思い出というより、あやうく毒殺してしまうところだったとして、樋ヶの記憶に刻まれることとなったという。

「ギターを背負った渡り鳥」

日差しの暖かな休日、オザキはあてもなく街を歩いていた。
家にいるとアリデッドに絡まれるので、さっさと外に出て来たのだ。
外部から隔絶されたセカイであっても、休日はそれらしく若者や家族連れで賑わっている。
記憶喪失のオザキはそんな光景を横目で見ながら通り過ぎ、いつの間にか人気の少ない通りに出ていた。
「こっちのほうが静かでいいな」
そんなことを思いながら街路樹の下を歩いていると、頭上で何かが軋むような音が聞こえた。
不審に思い視線を上に向けると、見覚えのあるシルエットが街路樹の枝の上に立っていた。
伊都夏大学園（いとげだいがくえん）生徒会顧問、佐草陽水（さくさあきみ）だ。
いつも妙な場所から現れ、気に障（さわ）るような一言を残して去っていく。オザキとしてはできれば関わり合いになりたくない手合いだった。

「…………」

無視して通り過ぎようとしたオザキを、深みのある声が上から呼び止める。

「若人よ」

そう呼びかけ、続けて何か喋ろうとしたが、その前に足元の枝が重みに耐えきれずに折れた。

「ぬおっ⁉」

足場を失くして落下した佐草は、まともに着地をすることもできず樹の上から転がり落ちた。

「……何やってんだ」

オザキは呆れきった眼差しを佐草に送る。

佐草は立ち上がると尻についた埃を払い、何事もなかったかのように不敵な笑みを唇に浮かべる。

「若人よ」

「何だよ」

オザキはぞんざいな態度で対応する。

佐草の話す内容など、まともに取り合うつもりもなかった。

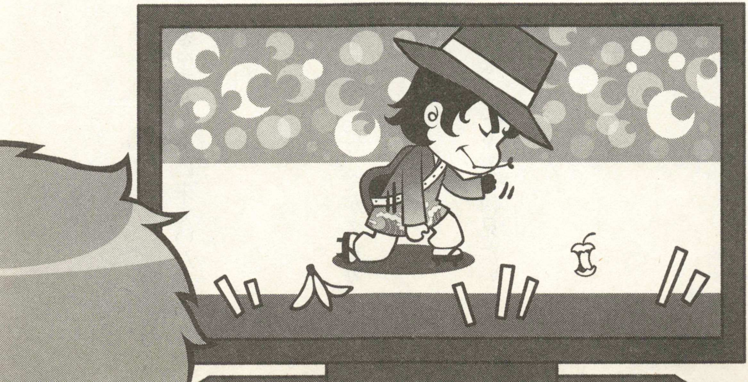
「お前はどこへ向かおうとしている」

「ただブラブラしてるだけだ。別に目的はねえよ」
「若さの浪費だな」
佐草が揶揄(やゆ)するように笑うと、オザキも負けじと言い返した。
「お前も無駄な労力を使ってるじゃないか」
「オレがか？」
「そうだよ。そのギター、弾けないなら背負う意味ないじゃないか」
佐草は演奏できないにもかかわらず、いつもギターを背負っていた。
オザキにしても他の誰かにしても、ギターを弾いているのを見た事のある人間は一人もいない。
そんな指摘に対して「やれやれ」とでも言いたげに首を振る佐草。
「分かってないな。弾ける弾けないの問題ではないのさ」
「じゃあ、格好つけてるだけかよ」
「ロマンを語れぬ男に、明日の朝日は昇らない」
「ワケわかんねえよ」
これ以上付き合いきれないと、オザキは踵(きびす)を返すと佐草に背を向けてその場から立ち去ろうとする。
「待て、オザキ」

呼び止められたオザキは、渋々といった感じで振り向く。
「……ったく、なんだよ」
「そこまで言うのであれば、俺がギターで活躍する姿を見せてやろう」
「できるのかよ」
オザキは疑わしげに佐草を見る。
挑発的なオザキに対し、佐草は余裕を感じさせる笑みを見せた。
「フ……楽しみに待っているがいい。それでは、アディオス」
そう言って、佐草は普通に歩み去った。
一人残されたオザキは、頭をかきながら「ま、いいか」と忘れることにした。

数日後、アリデッド宅のリビングで食事をしていたオザキは、テレビに映っている人物を見て、口に含んでいた水を盛大に噴き出した。
「さあ、盛り上がってきました伊都夏エアギター大会。お次の参加者は、なんと学校の先生です！」
「オレの歌を聴けぇー！」
ステージの上にいるのは、まぎれもなく佐草だった。
「何やってんだ、あのおっさん……」

曲に合わせてギターを弾く佐草を呆れ顔で見ながら、
オザキはそっとチャンネルを変えた。



「ファイナル・アクション・ヒーロー」

その日、スピカ、ガーネット、ミラの三人は、伊都夏市内にあるデパートに来ていた。
「スーちゃん、ガーちゃん、はやくはやく！」
ミラがエレベーターの前で飛び跳ねながら二人を呼ぶ。
「子供じゃないんだから、やめなさいってば」
スピカが周囲の視線を気にしながら言う。
子供じゃない、と言っても、ミラは子供にしか見えない容姿をしていた。だがスピカたちと年齢は変わらない。
「あんなにはしゃいじゃって、見せたいものって何なのかしら？」
ガーネットがバーゲンセールの値札をちらちら見ながら言った。
今日三人がデパートに来たのは、ミラに誘われたからだった。なんでも一緒に見たいものがあるのだという。
「ま、あんまり深く考えないでおきましょ」
スピカはそう言って微笑をこぼす。
三人がエレベーターに乗り込むと、ミラは屋上行きのボタンを押した。

途中で止まることもなく、あっという間に屋上に到着する。
エレベーターから出てまず目に入ったのは、ステージとその前に座る子供連れの家族の姿。
「これは？」
スピカが問うと、ミラは胸を張って答えた。
「今日は『月光刑事カルネヴァン』のヒーローショーがあるのさ！」
「月光のカル……何？」
「月光刑事カルネヴァンだよ。今テレビで放送中のヒーローものさ。カルネヴァンは普段はさえない巡査だけど、特殊なベルトとメガネを装備して、ペンライトを振ることでヒーローに変身するんだよ！」
「ふぅん……って、見たいものってコレ？」
「そうだよ！」
スピカは引きつった顔で会場を見る。舞台のセットは安っぽく、屋上らしく寒々しい風が吹いている。客もまばらで、何となく見にきたといった感じだった。
スピカは何とも言えない表情をガーネットの方に向ける。ガーネットは困ったような笑顔を返しつつ、目で「付き合ってあげましょう」と言ってきた。
スピカは内心でため息をつくと、観客席を見ながらミラに尋ねる。

「で、席はどこなの？　チケットは？」
「どこに座ってもいいんだよ。チケットもいらないのさ！」
「そ、そうなの？」
お嬢様育ちであるスピカが知る舞台公演とは、かなりのギャップがあった。
三人は一番後ろの席に並んで座る。ミラのことだから一番前に座りたがるのかと思ったが、
「それは子供に譲るもんだよ」
と、至極真っ当なことを言われてしまった。
しばらくして、設置されたスピーカーからノイズ混じりの音楽が流れ出し、ステージ脇からマイクを持ったお姉さんが出てきた。
「よい子のみんなー！　こんにちはー！」
「こんにちはー！」
大声で返事をした観客はミラだけだった。スピカは恥ずかしそうに縮こまる。ガーネットはニコニコしながら拍手をしていた。
「はい。今日はですね、何と悪い人たちがこのステージを襲ってきます！」
お姉さんがそう言うと、黒い全身タイツで黒い覆面の連中が、キーキーと奇声を上げながらステージに現れた。

「何、この凄まじい急展開は……」
　スピカは頭痛を鎮めるようにこめかみを揉む。もう少し前置きとか、前振りがあってもいいのではないだろうか。
「大変です！　ステージは悪の組織に乗っ取られてしまいました！」
　悪の組織の戦闘員たちは、跳んだり側転したり実に楽しそうだった。お姉さんも張り付けたような笑顔のままで、緊張感も何もない。いくらなんでも投げやりすぎだと、スピカは頭を抱える。
「さあみんな、今こそカルネヴァンを呼びましょう！　大声でお願いします！　せーの……」
「カルネヴァン！」
　声を張り上げたのはまたもミラだけだった。それでもショーはお構いなしに進行する。
「とうっ！」
　トレンチコートにマスクをかぶった変質者――ではなく、正義のヒーローがステージに登場した。
「月光刑事カルネヴァン、参上！」
　カルネヴァンは警察手帳を戦闘員に見せながら敬礼した。
「いや、敵に敬礼してどうするのよ」

スピカは思わずつっこむ。
「敵への敬意も忘れないのが、カルネヴァンのいいところなのさ！」
ミラはステージから目を離さぬままそう言った。
「地獄の軍団ども！　貴様らには逮捕状が出ている！」
カルネヴァンは戦闘員たちに紙きれを一枚突きつけた。
「キー！」
それだけで戦闘員が一人倒れる。スピカは一瞬ポカンとした表情を浮かべる。
「よくもデパートに爆弾を仕掛けたな！」
カルネヴァンが戦闘員に怒声を上げる。
「あ、そういうストーリーだったんだ」
だったら伏線ぐらい入れればいいのにと思ったが、そういうものでもないらしい。
「だが爆弾はもう爆弾処理班が解除した！　残念だったな！」
スピカはあまりの展開に椅子からずり落ちそうになる。
「もう解除したわけ？　しかも爆弾処理班が？」
「だってカルネヴァンは刑事だもん」
ミラがそう言うと、スピカは疲れた顔になった。
「ああ……そうだったわね」

従来の枠に捕らわれない、斬新な脚本なのだと思ってスピカは自分を納得させる。

「貴様らのような悪党に与えるものは何もない！　だが、黙秘権と弁護士を呼ぶ権利は保障されている！」

「でた！　カルネヴァンの決めゼリフ！」

ミラが嬉しそうに拳を握った。

スピカはもはや何も言う気になれず、死んだ魚のような目でステージを見ていた。

「いくぞ！　抵抗した場合は、公務執行妨害のおまけつきだ！」

そのセリフを皮切りに、カルネヴァンと戦闘員たちの大立ち回りが始まる。が、どうしようもないくらいショボイ殺陣で、スピカはつい欠伸をしてしまう。見ると、他の子供たちも退屈そうにしていた。無理もないだろう。それぐらいこのヒーローショーの出来はひどかった。

そしてようやく最後の戦闘員が倒れ、ショーが終わろうとした時、巨大な警報が街に響き渡った。

「！」

三人の魔女は反射的に立ち上がる。

『三人とも、聞こえるか！？』

スターリットから、アリデッドの声が飛んだ。

「聞こえます。今三人一緒です！」
ガーネットがいち早く通信に応じる。
『ちょっと待てよ。今情報を……って、そこだ！　その近くに落ちるぞ！』
三人は空を見上げた。はるか雲の上に、黒い点が見える。どんなに小さくとも、それが悪魔（ゾディアック）だと魔女（エトワール）たちには分かった。
「スーちゃん、ガーちゃん、行こう！」
ミラが先陣を切って彗（ほうき）に乗る。
「パパっと片づけちゃいましょう！」
ミラに続いてスピカの彗も宙を舞う。その後にガーネットが続いた。
三人の魔女は上空で悪魔を迎え撃つ。しかし再三の攻撃にも耐え切られ、悪魔は地上へと落下してしまう。
悪魔という巨大な物体の墜落のショックで周囲の建造物が崩れる。その中に、三人が先ほどまでいたデパートも含まれていた。
「くっそー！　ゆるさないぞー！」
ミラが悪魔に突撃を敢行する。スピカとガーネットがそれを援護するが、悪魔の攻撃に阻まれ、決定的なダメージを与えるには至らなかった。
「ちくしょー！」

いったん距離をとったミラは、そこで半壊したデパートの屋上に、逃げ遅れた子供がいるのを発見した。
「た、大変だー！」
ミラはその子供を助けようとデパートに彗を向けたが、悪魔の放った巨大な黒球がミラの邪魔をする。
「ミラちゃん！」
ガーネットの放ったリネアが黒球を粉砕するも、その衝撃の余波でミラは吹き飛ばされてしまう。
「ミラ！」
スピカがリネアで弾幕を張りながら、ミラのもとへと飛ぶ。
「うぐ……大丈夫。だけど……」
まだ子供はデパートの屋上に取り残されたままだった。
助けに行こうにも、悪魔の攻撃が激しすぎて、近付くことさえできない。何より子供のことが気になったままでは、全力で戦えない。
『おい、聞こえるか』
スターリットから伝わるアリデッドの声は、どこか無機質に聞こえた。
「アリせんせー？」

『あの子供のことは自衛軍にでも任せとけ。撃退が最優先だ』
「え⁉」
アリデッドは暗に子供のことは無視しろと伝えてきた。
『これ以上時間をかけたら被害が広がるだけだ。子供一人と伊都夏市全部、秤(はかり)がどっちに傾くかくらい……判るな？』
「…………」
スピカとガーネットは黙り込む。アリデッドが正しいとは思わない。だが反論するに足る言葉も見つからなかったのだ。
「ダメー！」
しかしミラは違った。命令を躊躇(ちゅうちょ)なく拒絶した。
『ミラ、我儘(わがまま)言ってんじゃねえぞ』
アリデッドは静かな声でミラを諭そうとする。
だが、ミラは頑なだった。
「ダメったらダメー！ ヒーローはどんな時でも、絶対にあきらめないんだ！」
言うことをきかないミラに、アリデッドは瞬時に沸点に達した。
『いい加減にしろよ！ 夢想じゃ現実は覆(くつがえ)せねえんだよ！』
アリデッドの怒声に、ミラは負けじと言い返す。

「そんなのヒーローじゃない！　そんなのもうミラじゃない！」
ミラはアリデッドの命令を無視して、子供の救出に向かおうと彗をデパートへ向けた。
しかしそれよりも一歩早く、悪魔の放った黒球がデパートの屋上を直撃する。
轟音と炎の中、デパートの上半分が崩れ落ちた。
「うわあー！」
ミラの悲痛な絶叫が空に響く。
「そんな……！」
スピカとガーネットも、目の前の凄惨(せいさん)な出来事に表情を歪めた。
『……切り替えろ。敵を倒せ』
アリデッドは冷徹な司令として命令を伝える。しかしその声にはどこか偽りがあった。
これ以上被害を拡大するわけにはいかないと、ガーネットは悪魔を見据(みす)える。
その時、その視界の端にあるものを見つけた。
「あれは……!?」
「どうしたの、ガーネット」
スピカがガーネットの隣に並ぶ。
ガーネットは崩壊したデパートの隣の、まだ崩れていないビルの屋上を指差して叫んだ。

「あそこ！　あれを見て！　ミラちゃんも！」
「え？」
ミラとスピカはガーネットの指し示す場所に目を向ける。
そこには先程までショーを行っていたマスクをかぶったトレンチコートのヒーロー、月光刑事カルネヴァンが立っていた。
しかもカルネヴァンの腕の中には、デパートに取り残されていたあの子供がいる。
「あ、あれって……！」
スピカが信じられないものを見たように目を丸くする。
「うおおおー！　カルネヴァンが助けてくれたー！」
ミラが興奮して叫ぶ。
『おいおい……マジかよ』
スターリットからアリデッドの呆れたような声が聞こえる。
「へえ……あの役者さん、やるじゃん」
スピカは心の中で、カルネヴァンの役者を大根と思っていたことを詫びた。
「二人とも、今こそ決着をつけましょう！」
「もちろんよ！」
「よっしゃあー！」

三つの光が天空を駆ける。
「STAR！」
「MINE！」
「GIRL！」
「AERIAL――SHOOOOOOT！」
赤と青に彩られた空で、黄金の矢が悪魔を貫いた。
悪魔を撃退した後、ミラはカルネヴァンの役者に礼を言おうと、あちこち探し回っていた。
あの子供は自衛軍に保護されたと分かったが、カルネヴァンの姿はどこにも見当たらない。
『ミラ、いたわよ！』
一緒になって探してくれていたスピカから、スターリットに通信が入った。
ミラはハヤテのごとき勢いでそこへと向かう。
スピカは崩れたデパートの近くで待っていた。
「スーちゃん、カルネヴァンは⁉」
「いたのはいたんだけど……」

スピカの傍の瓦礫の陰で、パンツ一枚の男が倒れていた。
「この人……？」
ミラは不思議そうな顔をする。崩壊するデパートから颯爽と子供を救った人物が、なぜこんな所で半裸になって気絶しているのか、それが分からなかった。
「背格好といい、履いてる靴といい、間違いないと思うんだけど……」
男の靴はカルネヴァンが履いていた白い革靴だった。ステージで見た物に間違いない。
しかし、スピカも役者の男性がどうしてここで倒れているのか説明できなかった。
「スピカちゃん、ミラちゃん」
「あ、ガーネット」
ミラから遅れることしばし、スピカからの通信を聞いたガーネットもやって来た。
「あー、それ！」
ミラがガーネットの持っている荷物を見て大きな声を上げる。
「それって、カルネヴァンの衣装？」
ガーネットが持っていたのは、カルネヴァンのマスクを含めた衣装一式だった。
「ガーちゃん、それどうしたの？」
「ここに来るとき、お巡りさんに呼び止められて、これを返しておいてほしいって」
ミラの質問にガーネットはそう答えた。

「ん……？」

ガーネットの説明を聞き、スピカは眉根を寄せて考え込む。

何故お巡りさんがこの衣装を持っていたのか。そもそも役者は非常時に何故衣装を脱ぐ必要があったのか。

スピカはミラに聞いたカルネヴァンの設定を思い出す。

変身する前は、さえない巡査――。

「いやいやいやいや」

スピカは見えかけた結論を自ら否定した。

スピカと同じく考え込んでいたガーネットは、興奮気味の口調で言う。

「ねえ、ひょっとして、あのカルネヴァンの正体って――」

「カルネヴァンだよ」

ミラがハッキリとそう断言する。

スピカとガーネットは、一度顔を見合わせた後、ミラに視線を移した。

ミラは満面の笑みを広げ、こう言った。

「セカイには絶対、ミラたち以外にもヒーローはいるのさ！」

「僕の考えた神様ルート　18歳未満は回れ右して帰れ！」

冷たく重い鉄の輪で両手を縛められた男が、頭からコートをかぶせられパトカーへと連れて行かれる。
遠巻きにそれを見ていた野次馬たちが、ひそひそと囁きあう。
「あの人、何をやったの？」
「それが幼女の破廉恥シーンを書こうとしたらしいのよ」
「まあ、お下品」
冷たい視線は顔を覆うコート越しにも突き刺さり、男は俯いたまま絞り出すような声で横を歩く刑事に問いかけた。
「刑事さん……俺……何でこんなことしちゃったのかな……」
「それはお前が考えることだ」
初老の刑事は男の背中をポンと叩く。
「通報したニトロくんを恨むんじゃないぞ」
「はい……」
男は涙声で頷き、ゆっくりパトカーへ乗り込んだ。

パトカーの赤い光が尾を引きながら、夜の街へと消えていった……。

ブツッ。
ガガガガー。
ピピッ。

〈しばらくお待ちください〉

ザーザーザー。

モニターは砂嵐で覆われました。
今回の放送はこれで終わりのようです。
あなたがまた、チャンネルを合わせてくれる日をお待ちしております。
それでは、
「バイバイでち！」

KAMISAMA

あとがき

はじめましての皆様、はじめまして。そうでない皆様はお久しぶりでございます。お菓子とかに昔よく入ってた保存剤並みに相手にされてない存在の野山です。

さて、あとがきです。実は僕はあとがきが泣くほど苦手です。何を書けばいいのかいつも悩みます。

今回はあとがき書かなくてもいいと思って余裕ぶっこいていたら、

「やっぱあとがきもよろしく」

と担当のT氏から素敵なお達しが。

やべえ、どうしよう。何書こう。

よし、こうやって悩んでいる間にこれだけ埋まったぞ。

……うん、まだ足りないっスね。

それではこの本の原作である「スマガ」にちなんだお話でも。

スマガのヒロインである魔女ですが、魔女が空を飛ぶための道具といえば、やはり箒のイメージが強いですよね。スマガでもやはり箒に乗って飛んでます。

しかしちょっと調べてみたところ、伝承にある魔女は杖やヤギでも飛んでいたらしいです。なんだよヤギって。

何でも、魔女の軟膏なるものを内股に塗って飛ぶとか。さる文献に残されたこの軟膏の成分を調べたところ、幻覚性の物質が多く含まれていたとか。この軟膏を使用することにより、トランス状態になり一種の浮遊感を得ていたと目されているらしいです。要するに精神的に飛んでいたのですな。

はい、今日の無駄知識でした。

ではお世話になった方々に謝辞を。

担当のT様。僕の筆が遅いせいで色々ご迷惑をおかけしました。執筆期間中はあれこれ気にかけていただき、本当に感謝してます。

ニトロプラス様。的確なアドバイスをいただき、ありがとうございました。これからもクオリティの高い作品に期待してます。

その他お世話になった皆様。いつも迷惑かけっぱなしでもう誰に謝っていいのやら。もっと真人間に近づけるよう頑張ります。

そしてこの本を手に取ってくださった皆様に最大級の感謝を。本当にありがとうございました。

ではでは、この辺で失礼させていただきます。

平成二十一年　三月吉日　野山　風一郎

かおす；へっど
If you are God, and the delusion becomes reality.
About what kind of the noids you get?
Is it the sensual world? The despotic society?
The destructive sanctions?
Or...
イラスト：南向春風
ご存知「CHAOS；HEAD」の
チビキャラノベル発売中！
ちょっと真面目じゃない…
それこそカオスなグレードでお届け！
過度な期待はしねえで
待っとげ…
ウッス

ブラッドチューン
BLOOD TUNE
The ANIMATION
著者：糸井健一　イラスト：ユキヲ
原作：ニトロプラス／５ｐｂ
あの「ブラチュー」が待望のノベル化！
え？　知らない？
「ブラッドチューン」とは
ニトロプラス＋５ｐｂ制作のＰＣゲーム
「CHAOS;HEAD」内にて
メディアミックス展開により
「ブラッドチューン THE ANIMATION」
としてアニメ化されたもの。
全26話予定で現在も放映中。
☆（ほし）の力により魔法少女に変身するヒロイン
「星来・オルジェル」が登場するコミックを原作としている。
小説版オリジナルのストーリーにご期待下さい！
好評発売中！　なうおんせーるさ☆

リトルバスターズ！SSS　Vol.1～4　好評発売中！
リトルバスターズ！エクスタシーSSS　Vol.1～5　定価 640円+税

なごみ文庫
村田治
MURATA OSAMU
原案・挿画
ひづき夜宵
好評発売中！
リトルバスターズ！
Little Busters-EX
エクスタシー
僕らの学園祭戦争
Impressions of LittleBusters!EX
SS
公認ショートストーリー
© VisualArt's / Key

なごみ文庫をお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3　長谷川ビル1F
なごみ文庫編集部「野山風一郎先生」係

ニトロプラス劇場

SMG — 凄く真面目な外伝 —

2009年5月1日　初版発行

原　作——Nitroplus
著　者——野山風一郎
発行人——河出岩夫
発行所——有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売——株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷——中央精版印刷株式会社

©2008 Nitroplus ©Fuichiro Noyama
2009 Printed in Japan
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
ISBN978-4-434-13043-4

ニトロプラス劇場

装甲悪鬼村正

暴走編

凪小石

原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版

640

「スマガ」応援団長

"白石稔" 大・興・奮!!

「これは、世紀の『パイオツニア』
宮本武の、情熱とか夢とか
愛情とか、なんかこういろんな
思いが込められた、

魂の叫びである!

…だったらいいな(笑)」

なごみ文庫ラインナップ（各巻640円+税）

糸井健一/著
　『ブラッドチューン　TheNOVELIZATION』
小形聖史/著
　『聖なるかな　光をもたらすもの編　上・下巻』
雑賀匡/著
　『リトルバスターズ！　三枝葉留佳の事件簿』
野山風一郎/著
　『ニトロプラス劇場　ＳＭＧ―凄く真面目な外伝―』
御門智/著
　『恋姫†無双外伝　紫電一閃！ 華蝶仮面』
　『恋姫†無双外伝　紫電一閃！ 華蝶仮面２』
　『恋姫†無双外伝　紫電一閃！ 華蝶仮面３　上・下巻』
水碕睦月/著
　『えたーなる☆ふれんど』
村田治/著
　『リトルバスターズ！エクスタシーぼくらの学園祭戦争』

《アンソロジーノベル》
　『リトルバスターズ！ ＳＳＳ Vol.1～Vol.4』
　『かおす；へっど』
　『くらなど。 Vol.1～Vol.2』
　『リトルバスターズ！エクスタシー ＳＳＳ Vol.1～Vol.5』

新刊情報（６月～）
　『りとばす。 Vol.1』

なごみ文庫
の-1-01

ニトロプラス劇場
SMG—凄く真面目な外伝—

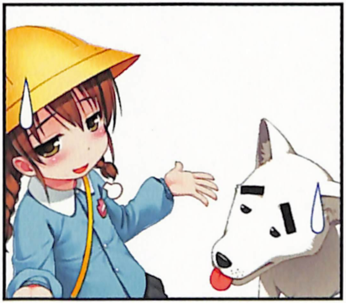
野山風一郎
原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版
640

ISBN978-4-434-13043-4
C0193 ¥640E

9784434130434

1920193006407

定価（本体640円+税）

発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社